



写真21 砂脈群306〔E地点〕(南東から)

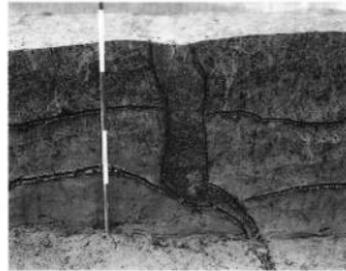
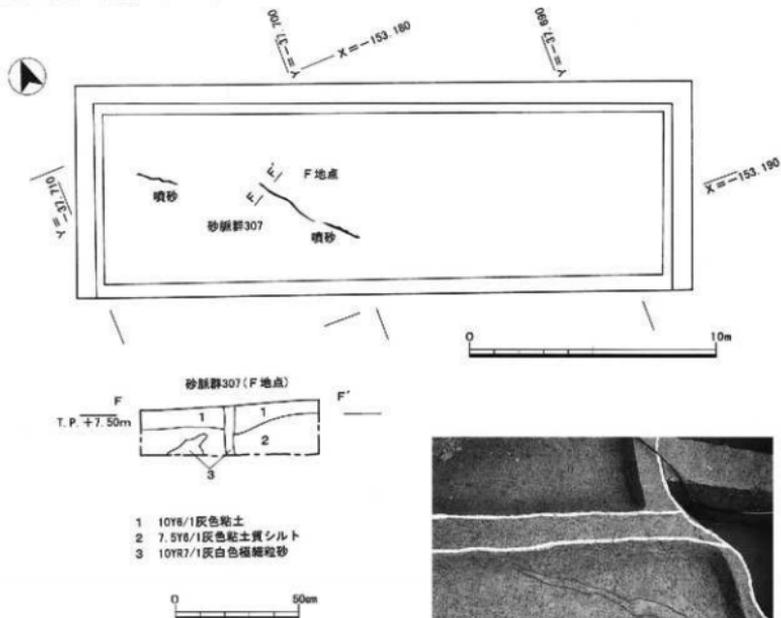


写真22 砂脈群306〔E地点〕(南東から)

砂脈群307 (写真23、第104図)

21調査区西～中央部のⅦ-8-9 J、Ⅶ-9-9 A地区で検出した。砂脈群301～砂脈群303と同様、北西～南東に伸びる。幅は5cm前後で、最上部はT.P.+7.6m付近に達している。砂脈群301～砂脈群303、砂脈群305・砂脈群306と方向や噴き上がりのレベル等が共通している。地震の発生時期は限定できない。



第104図 21調査区 砂脈群307断面図

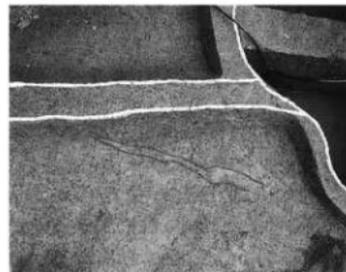


写真23 砂脈群307〔F地点〕(南から)

・第4面〔弥生時代後期後半～古墳時代前期前半（布留式古相）〕（第105～131図、図版二八～三九、六九～七七）

調査地中西部の7～11調査区で検出した。第Ⅺ層（T.P.+6.2～5.8m）上面で検出した遺構で、一部、近世に比定される農耕用井戸を除けば、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半（布留式古相）に集中している。検出した遺構には、井戸5基（S E 401～S E 405）、土坑4基（S K 401～S K 404）、溝34条（S D 401～S D 434）、墳墓6基（401号墳～406号墳）、土器集積一箇所（S W 401）がある。

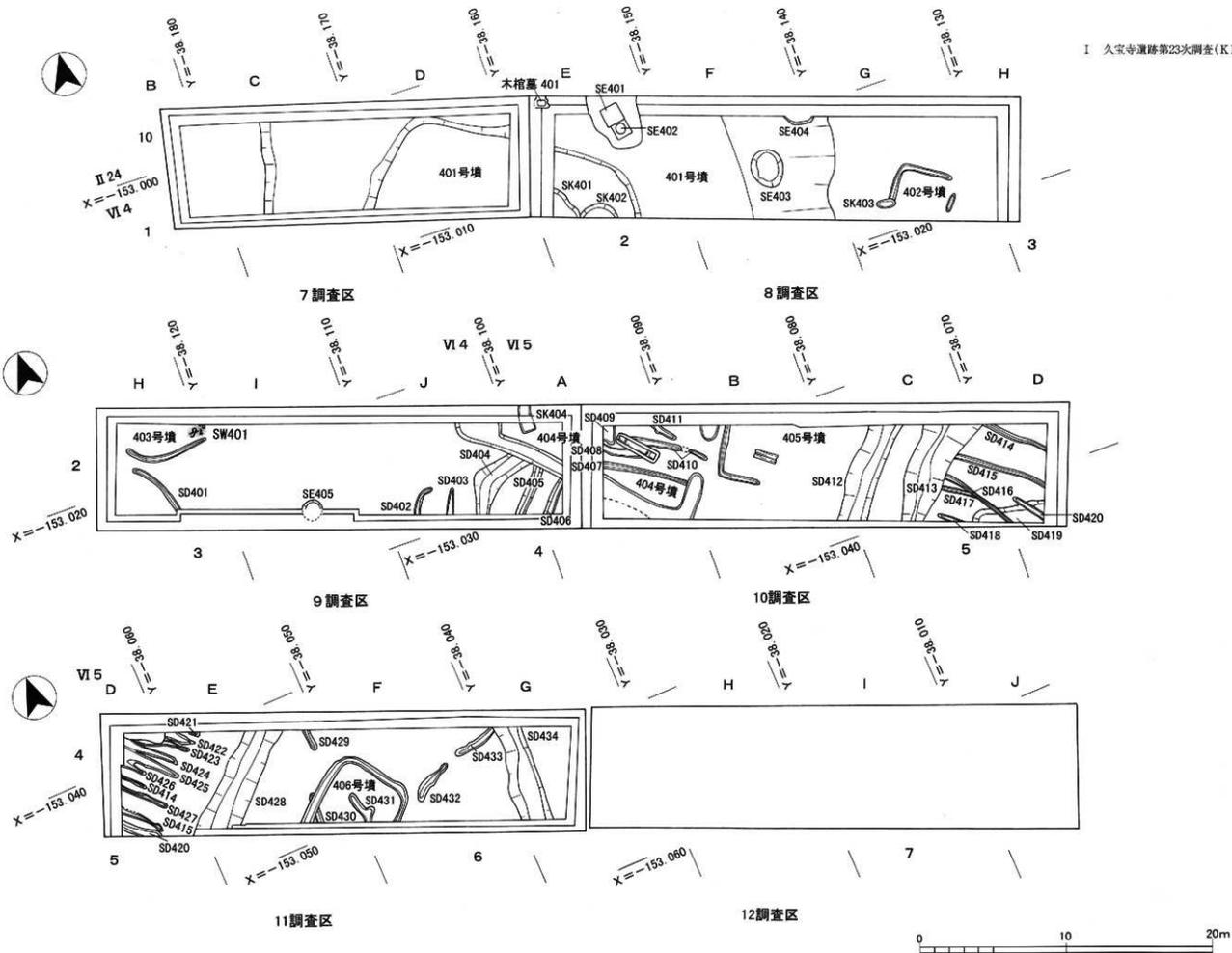
井戸（S E）

S E 401（第106図）

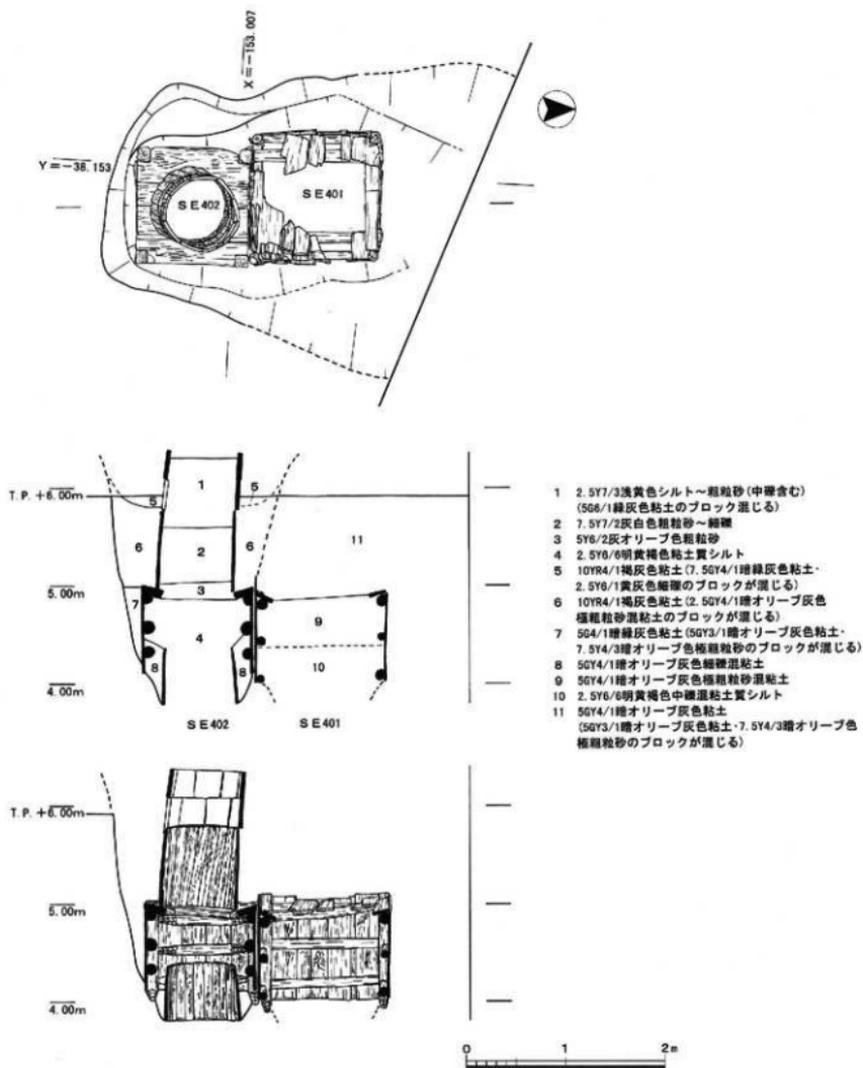
8調査区北西部のⅥ-4-1 E地区で検出した農耕用の井戸である。S E 402の井戸側上部を構成する瓦井戸側と桶井戸側を取上げ、井戸側下部を構成する木組井戸側の上面部分の調査時点で、S E 402の木組井戸側の北辺に接する形で検出された。上部が機械掘削により削平を受けており本来の遺構構築面は不明である。遺構の掘方については、南部がS E 402の掘方と重複するため不明であるが、北壁部分から観察すれば検出面から垂直に約0.4m下がり、そこから内側に傾斜しながら約0.25m掘り下げられている。掘方内の埋土は、11層5GY4/1暗オリーブ灰色粘土で、5GY3/1暗オリーブ灰色粘土や7.5Y4/3暗オリーブ色極粗粒砂のブロックが混入する。井戸側は、下部井戸側を構成する木組井戸側が遺存していただけで、井戸側上部は完全に抜き取られていた。木組井戸側は、径約0.1m程度の丸太の下端を尖らせた柱を四方に配し、そこに断面が半円形の横木を上・中・下の3段に拵接ぎして方形に組み、さらに外側からは、長さ約0.9m、幅約0.2～0.3m、厚さ約0.03mの板を縦方向に4～5枚並べている。井戸側内埋土は、上部が9層5GY4/1暗オリーブ灰色極粗粒砂混粘土、下部が10層2.5Y6/6明黄褐色中礫混粘土質シルトである。遺物は出土していない。井戸の形態は河内一浩氏分類のⅠ類にあたる。構築時期は江戸時代中期以降が推定される。

S E 402（第106図）

8調査区北西部のⅥ-4-1 E地区で検出した。S E 401の南に接する。上部の井戸側が瓦井戸側と桶井戸側で、下部の井戸側が木組井戸側と水溜で構成される農耕用の井戸である。S E 401と同様、遺構構築面は上層であるが機械掘削により削平を受けており、本来の構築面は不明である。掘方の平面形状は、北側がS E 401の掘方と重複するため全容は明らかでないが、東西幅2.0m、南北幅約2.5m程度の方形を呈するものと推定される。深さは2.3m以上で、断面は不整形な逆台形である。掘方内の埋土は、上から5層10YR4/1褐灰色粘土で、7.5GY4/1暗緑灰色粘土と2.5Y6/1黄灰色細礫のブロックを含む、6層10YR4/1褐灰色粘土（炭化物を含む）で、2.5GY4/1暗オリーブ灰色極粗粒砂混粘土上のブロックを含む、7層5G4/1暗緑灰色粘土で、5GY3/1暗オリーブ灰色粘土と7.5Y4/3暗オリーブ色極粗粒砂のブロックを含む3層である。井戸側は極めて良好な状態で遺存していた。下部の井戸側は、最下部に水を溜める機能を果たした水溜と木組井戸側で構成されている。水溜に使用された桶は、径0.7mを測るもので、長さ約0.6m、幅約0.1m、厚さ約0.02mの縦長の板21枚で構成されている。木組井戸側は、幅が約0.1mで、下端を尖らせた角材を用いて方形に組み、そこに断面が半円形の横木を上・中・下の3段に拵接ぎして組み込む構造で、さらに外側からは、厚さ約0.03mの板を縦方向に一辺に3～4枚並べている。木組井戸側の上面には、幅0.3～0.4m、長さ約1.1m、厚さ0.07mを測る4枚の板材が南北方向に並べられており、そ



第105図 第4面 (7 調査区~12調査区)



第106図 SE 401・402平断面図

の中央部には、上部井戸側を設置するためのカガミと称される径約0.7mの穴が設けられている。上部井戸側は桶井戸側と瓦井戸側で構成されている。桶井戸側に使用された桶は、径0.7m、長さ約0.8m、幅約0.1m、厚さ約0.02mの縦長の板21枚で構成されている。瓦井戸側は2段分検出された。径0.75mを測り、井戸側用瓦9枚で一周する構造である。井戸側用瓦の法量は、上段が縦25.5cm、横26.0cm、厚さ3.0cmで凸面に綾杉状に刻みが施され、下段は縦28.5cm、横25.0cm、厚さ3.3cmを測る。出土遺物は井戸側用瓦のほか、掘方の掘削時に下部層から遊離した弥生時代後期の土器片が出土している。井戸の形態は河内分類のⅡ類にあたり、構築時期は江戸時代中期以降が推定される。

S E 403 (写真24)

8調査区のほぼ中央のⅥ-4-2F地区で検出した。素堀り井戸である。本来の遺構構築面は上部である。掘方の平面形は楕円形で、長径2.6m、短径2.3m、深さ1.2mを測る。掘方の断面は、検出面から約0.7m掘り下げた所で、幅0.5~0.8mの緩やかに傾斜するテラスを持ち、さらに中央部を0.5m掘り下げている。埋土は10Y4/1灰色粘土で、2.5Y5/4黄褐色シルトや7.5Y3/1オリーブ黒色粘土(炭化物を含む)のブロックが混入するもので、最下層は湧水層に達している。遺物は出土していないが、その形態から江戸時代中期以降が推定される。



写真24 S E 403検出状況(南東から)

S E 404

8調査区の北部のⅥ-4-2F・G地区で検出した。素堀りの井戸である。本来の構築面は上部である。掘方の平面は、北部が調査区外に至るため不明であるが、検出部分からみて、東西幅約2.1m、南北幅2.0m以上の円形を呈していたものと思われる。掘方の断面は半円形を呈し、深さは1.8mを測る。埋土は10Y4/1灰色粘土で、2.5Y5/4黄褐色シルトと7.5Y3/1オリーブ黒色粘土のブロックが混入するもので、最下層は湧水層まで達している。遺物は出土していないが、形態からみて井戸の構築時期は江戸時代中期以降が推定される。

S E 405

9調査区南部のⅥ-4-3I地区で検出した。上部は機械掘削時点で削平を受けているが、壁面観察の結果、旧作土層(第Ⅶ層)の直下(T.P.+6.8m前後)が推定される。掘方の平面形状は円形で、断面は逆台形を呈する。検出部分で径1.4m、深さ2.1mを測る。井戸側については、抜き取られており残存していなかったが、掘方内から蓋の断片が出土していることから、桶井戸側が使用されていたものと推定される。埋土は粘土質シルトを主体とする4層が水平に堆積しており、短期間に埋め戻しが行われたことが推定される。遺物は、国産の磁器碗の破片が1点のみ出土している。構築時期は江戸時代中期以降が推定される。

土坑(SK)

SK 401

8調査区南西隅のVI-4-1・2E地区で検出した。401号墳の墳丘上に位置する。遺構構築面は上層である。掘方の平面は、南部と西部が調査区外に至るため不明である。検出部分が東西長1.8m、南北長1.8m、深さ0.5mである。断面は皿状を呈する。埋土は粘土質シルトを主体とする10層から成る。遺物は土師器片が少量出土しているが、時期を明確にできたものはない。

SK 402

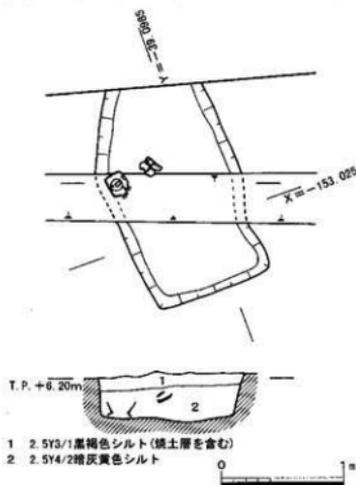
8調査区南西部のVI-4-2E地区で検出した。401号墳の墳丘上に位置する。遺構構築面は上層である。掘方の平面は、南部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分が東西幅2.5m、南北幅0.8m、深さ0.2mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は5GY4/1暗オリーブ灰色粗粒砂混粘土(10YR4/4褐色シルトのブロックを含む)の単一層である。遺物は出土していない。

SK 403

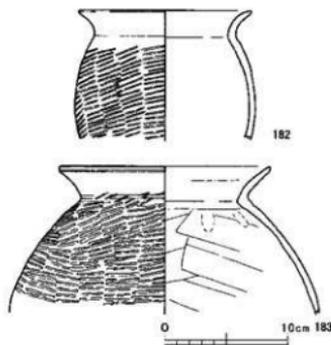
8調査区南東部のVI-4-2G地区で検出した。402号墳の西周溝を切っている。平面形は楕円形で、長径1.3m、短径0.6mを測る。断面は浅い逆台形を呈し、埋土は10Y4/1灰色粘土の単一層である。遺物は土師器の小破片が1点出土している。

SK 404 (第107・108図、図版六九)

9調査区北東部のVI-5-3A地区で検出した。404号墳の墳丘上に位置するが、層位的には404号墳の墳丘構築面より下層にあたる。北側が調査区外に至るため詳細は不明であるが、平面形は南北に長い長方形と推定される。掘方の断面形は、ほぼ方形で底部は水平である。規模は、東西幅0.9m前後、南北幅1.7m、深さ0.38mを測る。埋土は上層の2.5Y3/1黒褐色シルトと下層の2.5Y4/2暗灰黄色シルトの2層に分層できる。さらに上層には、炭化物を含む焼土がブロック状に混在する。遺物は下層内から弥生土器の甕2個体分と小破片が20点前後出土している。甕2点



第107図 SK 404平断面図



第108図 SK 404出土遺物実測図

(182・183)を図化した。182は体部の張りが小さい小形の甕である。復元口径14.0cmを測る。胎土は粗く、器面に1～3mm大の長石、チャートの砂粒が数多く認められる他、スコップで角閃石の含有を認める。色調は淡橙色。生駒西麓産である。183は体部の中位以上が完存している。口径17.0cmを測る。色調は灰白色。生駒西麓産である。182・183共に弥生時代後期後半に比定される。

溝 (SD)

SD401

9調査区西端のVI-4-2・3H地区で検出した。南北方向にやや弓なりに伸びる溝である。法量は、検出長4.0m、幅0.35m、深さ0.05mを測る。埋土はN3/0暗灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

SD402

9調査区南部のVI-4-3J地区で検出した。南西-北東に「く」の字状に伸びる溝である。法量は、検出長2.0m、幅0.3m、深さ0.2mを測る。断面の形状は腕形を呈する。埋土は10YR8/6黄橙色～5BG6/1青灰色粘土質シルトの3層に分層できる。遺物は出土していない。

SD403

9調査区南東部のVI-4-3J地区で検出した。SD402の東側に位置する。南西-北東に直線的に伸びる溝である。法量は、検出長1.75m、幅0.4m、深さ0.15mを測る。断面の形状は腕形を呈する。埋土は上層の10Y7/1灰白色細粒砂と下層の5PB4/1暗青灰色粘土質シルトの2層に分層できる。遺物は弥生時代後期後半に比定される壺口縁部1点の他、小破片が数点出土している。

SD404

9調査区東部のVI-4-3J、VI-5-3A地区で検出した。SD403の東側に位置し、東部は404号墳の西周溝に切られている。南西-北東に伸びた後、屈曲して東-西に流路を変えている。法量は、検出長4.5m、幅0.8m～1.8m、深さ0.2mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は上層がN4/0灰色シルト、下層が5PB4/1暗青灰色粘土質シルトの2層に分層でき、さらに下層内には植物遺体がラミナ状に混在する。遺物は出土していない。

SD405

9調査区南東部のVI-4-3・4J、VI-5-3A地区で検出した。SD404の東側に位置し、北東端は404号墳の西周溝に切られている。南西-北東方向に直線的に伸びる溝で、検出長3.3m、幅0.7m、深さ0.15mを測る。断面の形状は腕形を呈する。埋土は10YR8/6黄橙色～5BG6/1青灰色粘土質シルトの3層に分層できる。遺物は出土していない。

SD406

9調査区南東隅のVI-5-3・4A地区で検出した。SD405の東側に並行して伸びるもので、北東端は404号墳の西周溝に切られている。法量は、検出長2.5m、幅0.55m、深さ0.15mを測る。断面の形状は腕形を呈する。埋土は上層が10Y7/1灰白色細粒砂、下層が5PB4/1暗青灰色粘土質シルトの2層に分層できる。遺物は弥生土器の甕の破片が数点出土している。

SD407

10調査区西部のVI-5-3A、4A・B地区で検出した。構築面は404号墳の墳丘部分の盛土より下部である。南東-北西に直線的に伸びるもので、北西端が調査区外で、南東端が404号墳

の南周溝に切られている。検出長6.0m、幅0.4m、深さ0.06mを測る。埋土は5PB2/1青黒色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

S D 408

10調査区西部のVI-5-3 A地区で検出した。S D 407と同様、404号墳の構築以前の遺構である。南東-北西に直線的に伸びるもので、北東端が調査区外、南東端が404号墳の主体部掘方により切られている。検出長2.0m、幅0.5m、深さ0.05mを測る。埋土は5PB2/1青黒色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

S D 409

10調査区北西端のVI-5-3 A地区で検出した。S D 407と同様、404号墳の構築以前の遺構である。南東-北西に伸びるもので、検出長1.12m、幅0.46m、深さ0.11mを測る。埋土は5PB2/1青黒色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

S D 410

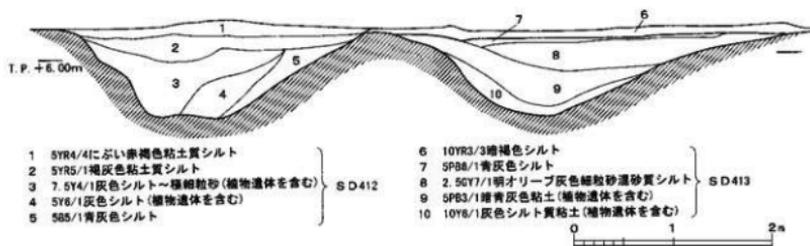
10調査区北西部のVI-5-3 A・B、4 B地区で検出した。S D 407と同様、404号墳の構築以前の遺構である。南東-北西に伸びるもので、北西端は404号墳の主体部掘方に切られている。検出長5.1m、幅0.44m、深さ0.06mを測る。埋土は5PB2/1青黒色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

S D 411

10調査区北西部のVI-5-3 A・B地区で検出した。S D 406と同様、404号墳の構築以前の遺構である。南東-北西に伸びるもので、検出長1.64m、幅0.5m、深さ0.05mを測る。埋土は5PB2/1青黒色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

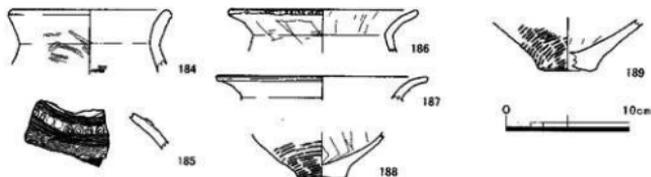
S D 412 (第109・110図、図版三〇・七〇)

10調査区中央-東部のVI-5-4 B・C地区で検出した。南西-北東に伸びる溝で、両端は調査区外に至る。検出長7.3m、幅2.0m-2.2m、深さ1.1mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は上層が褐色系の粘土質シルトが2層、下層が青灰色系のシルト-極細粒砂が3層で、全体で5層に分層される。遺物は上層(1・2層)から弥生時代後期後半-古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される土器類の小破片が少量出土している。6点(184-189)を図化した。184は小形の短頸直口壺の小破片である。復元口径12.5cmを測る。色調は褐色系。胎土中に1-2mm大の長石が多量に含まれている。生駒西麓産。185は壺の体部上半の小破片である。体部外面の残存部分で3段の直線文の間に円形浮文と波状文が施文されている。生駒西麓産。寛は4点(186-189)で

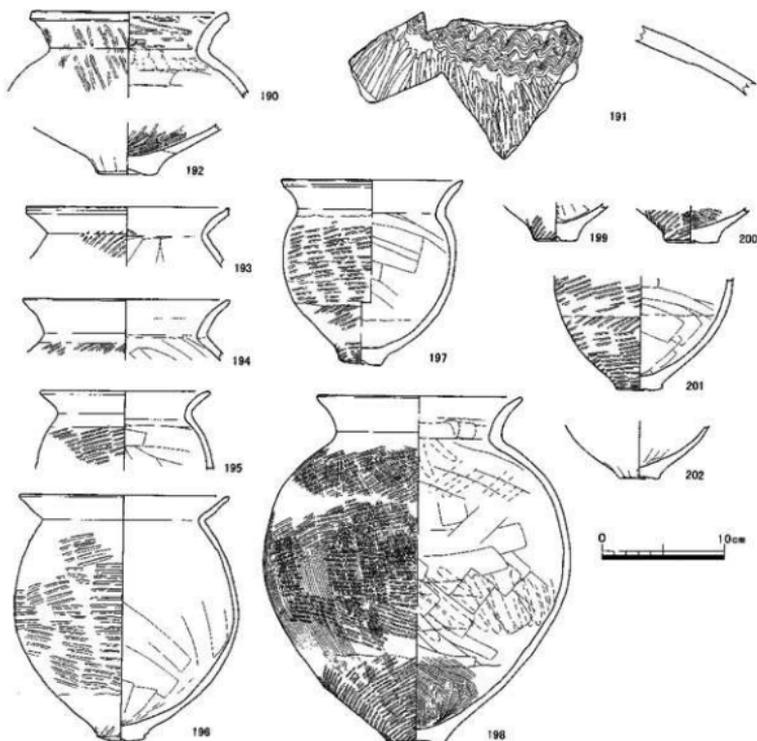


第109図 S D 412・413北壁断面図

ある。186・187が口縁部、188・189が底部の資料である。186の口縁部端面に刻み目が施文されている。188・189の底部表面はドーナツ底である。186～189は生駒西麓産である。弥生時代後期後半を中心とするものと考えられるが、185については古墳時代初頭前半(庄内式古相)の様相が含まれていることから遺構の廃絶時期は古墳時代初頭前半(庄内式古相)が考えられる。



第110図 S D412出土遺物実測図



第111図 S D413出土遺物実測図

SD413 (第109・111図、図版三〇・七〇・七一)

10調査区東部のVI-5-4・5C地区で検出した。SD412の東側で、同一方向に並行して伸びる溝で、両端は調査区外に至る。検出長7.4m、幅1.7m~3.8m、深さ0.9m前後を測る。断面の形状は楕形を呈する。埋土は上層がシルト~細粒砂泥砂質シルトの3層(6~8層)、下層が灰色系の粘土が2層(9・10層)である。遺物は下層内から、弥生時代後期後半に比定される土器類が少量出土している。13点(190~202)を図化した。内訳は壺3点(190~192)、甕9点(193~201)、鉢1点(202)である。190は広口壺の小破片である。復元口径15.8cmを測る。191は大形の二重口縁壺の体部上半の小破片と考えられる。器壁が厚く1.0~1.2cmを測る。体部外面に波状文が2条にわたって施文されている。192は壺の底部である。突出する底部で表面はドーナツ底である。色調は190~192共に褐灰色で生駒西麓産である。甕は9点(193~201)で全て体部外面にタタキ調整を行うV様式甕である。197が完形、196・198が図上で完形で復元できる。L縁部が残存するものについては、口縁部が外反気味ないしは「く」の字に屈曲するものに区別される。口縁端部の形状は強いヨコナエにより垂直ないしは斜上方に明瞭な端面を形成する193・197の他、丸く終る194~196・198がある。底部の形状は突出しない198以外は突出する底部形態で、表面はドーナツ底を呈する。色調は褐灰色ないしは赤褐色で、全て角閃石を含む生駒西麓産の胎土が使用されている。202は小形鉢で口縁部を欠く。底径3.4cmを測る。生駒西麓産。遺構の時期は出土遺物から弥生時代後期後半が考えられる。

SD414~SD427

10調査区東部から11調査区西部で検出した溝群である。SD413とSD428の間で検出した。10調査区南東隅で検出したSD419を除けば、基本的には南東~北西に並行して伸びる小溝群である。検出部分で、幅0.30~1.60m、深さ0.06~0.30mを測る。埋土は5PB2/1青黒色粘土質シルトである。遺物は出土していない。なお、北西端が弥生時代後期後半に比定されるSD413に切られていることから、時期的には、それ以前の遺構と推定される。遺構の性格としては、畑作に関連する畝立て溝であったと考えられる。法量および詳細は第24表に示した。

第24表 SD414~SD427法量表(単位m)

| 遺構名 | 地区 | 全長 (検出長) | 幅 (最大) | 深さ | 埋土 | 出土遺物 |
|-------|--------------|-------------|-----------|------|-----------------|------|
| SD414 | VI-5-4・5D | 10.5 | 0.36 | 0.14 | 5PB2/1青黒色粘土質シルト | |
| SD415 | VI-5-4CD,5D | 13.5 | 0.36 | 0.08 | * | |
| SD416 | VI-5-4・5C | 4.40 | 0.36 | 0.09 | * | |
| SD417 | VI-5-4C | 2.40 | 0.32 | 0.10 | * | |
| SD418 | VI-5-5C | 2.00 | 0.30 | 0.07 | * | |
| SD419 | VI-5-5CD | 4.80 | 1.60 | 0.30 | * | |
| SD420 | VI-5-4CD,5D | 2.80 | 0.60 | 0.11 | * | |
| SD421 | VI-5-4・5E | 0.80 | 0.40 | 0.06 | * | |
| SD422 | * | 2.20 | 0.50 | 0.15 | * | |
| SD423 | VI-5-4D・E,5E | 3.50 | 0.40 | 0.15 | * | |
| SD424 | VI-5-4D,5D・E | 4.20 | 0.40 | 0.06 | * | |
| SD425 | VI-5-4・5D | 4.20 | 0.60 | 0.06 | * | |
| SD426 | * | 2.00 | 0.30 | 0.06 | * | |
| SD427 | VI-5-5D | 3.40 | 0.30 | 0.06 | * | |

SD428

11調査区西部のVI-5-5D・E地区で検出した。検出部分で検出長8.0m、幅2.5m、深さ

0.6mを測るが、本来の構築面は機械掘削対象範囲内のT.P.+6.2m付近(第X層)であるため、深さについては1.6m以上が推定される。埋土は北壁で確認できたものを合せて「V」字状を呈する断面形状に沿ってシルトを主体とする9層が堆積している。遺物は出土していない。

S D429～S D433

11調査区の中央部から東部で検出した。5条の小溝である。方向は南～北に伸びるもの3条(S D429～S D431)、東～西に伸びるもの2条(S D432・S D433)がある。406号墳の墳丘上で検出したS D430・S D431については、周溝により切られており406号墳の構築以前のものである。S D432以外は他の遺構との切り合いや、調査区外に至るため全容を知り得たものはない。検出部分で長さ1.5～3.1m、幅0.5～0.6m、深さ0.13～0.23mを測る。断面形状は浅い皿形を呈する。埋土はS D429が砂質シルトである以外は細粒砂～極粗粒砂である。遺物はS D429から弥生土器片が出土したのみである。各小溝の法量・詳細等は第25表に示した。

第25表 S D429～S D433法量表(単位m)

| 遺構名 | 地区 | 全長 (検出長) | 幅 (最大) | 深さ | 埋土 | 出土遺物 |
|--------|-----------|-------------|-----------|------|----------------------------|------|
| S D429 | VI-5-5E | 1.5 | 0.6 | 0.15 | 10Y4/1灰色砂質シルト | 弥生土器 |
| S D430 | 〃 | 2.5 | 0.6 | 0.13 | 5Y3/1オリーブ黒色シルト 泥細粒砂～中粒砂 | |
| S D431 | VI-5-6F | 3.1 | 0.5 | 0.19 | 〃 | |
| S D432 | 〃 | 2.9 | 0.6 | 0.23 | 10Y5/1灰色細粒砂～極粗粒砂 | |
| S D433 | VI-5-5F-G | 3.0 | 0.6 | 0.18 | 〃 | |

S D434

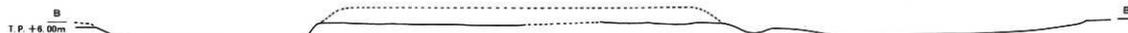
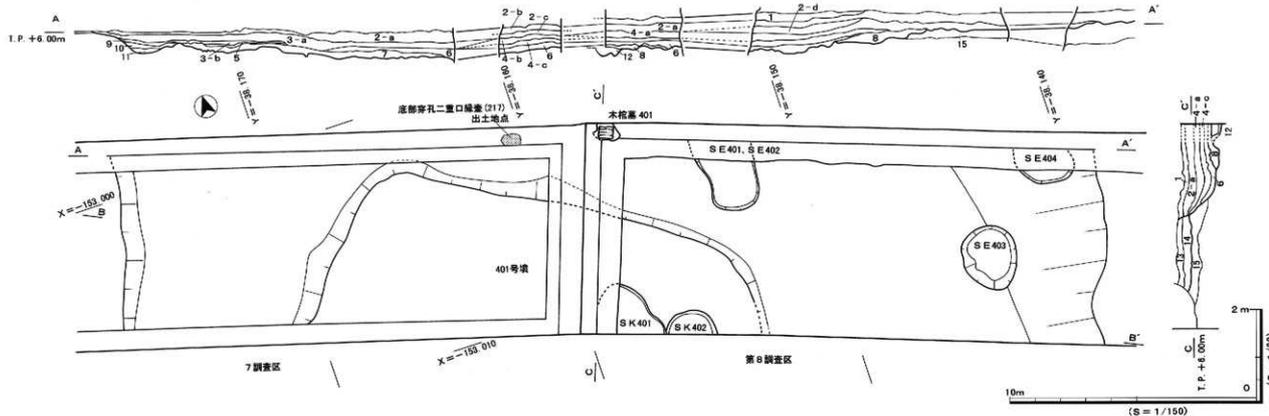
11調査区東部のVI-5-5・6G地区で検出した。北～南に伸びるもので、S D427と同様、構築面は上層の機械掘削対象範囲内のT.P.+6.3m付近(第X層)が推定される。検出長7.5m、幅0.5m、深さ1.0mを測る。埋土は10Y5/1灰色細粒砂～極粗粒砂である。遺物は出土していない。

墳墓

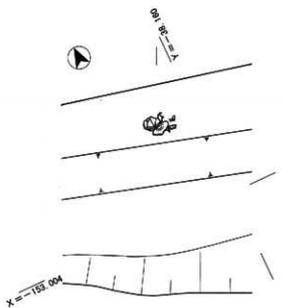
墳墓については8～11調査区で、古墳時代初頭前半(庄内式古相)～古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される6基(401号墳～406号墳)を検出した。これらの墳墓群については、10調査区東部のS D412より西部で検出した5基(401号墳～405号墳)と11調査区西部のS D428より東部で検出した1基(406号墳)に二分される。共に、北東～南西に伸びる溝を介して展開する墓域で、ここでは401号墳～405号墳を西部墓域、406号墳を東部墓域と呼称した。西部墓域については、水処理施設の西部で検出された墳墓群(9～63号墳)、東部墓域については、多日の広場での久宝寺1号墳、水処理施設の東部で検出された墳墓群(3～8号墳)、第28次調査の2基(301・302号方形周溝墓)との有機的な関係が想定される。

401号墳(第112～115図、図版三一～三三、七一・七二)

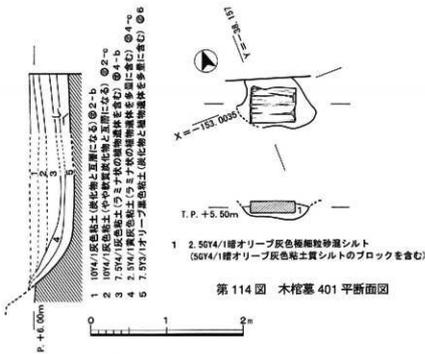
7調査区中部から8調査区中部にわたるII-24-10C、VI-4-1C～E・2E～G地区で検出した。南部の大部分は調査区外に至る。402号墳の西約4mに位置する。墳丘は中央から北側、周溝は東・西・北周溝の一部が確認できた。機械掘削段階で墳丘盛土の一部が削平されている。また、墳丘はS K401・402に、周溝はS E401～404に攪乱を受けている。第VI層をベースにつくられ、主軸はN-29°-Eをとる。墳丘規模は検出面で東西幅16.1m、南北幅6.2m以上を測る。



第112図 401号墳平面図

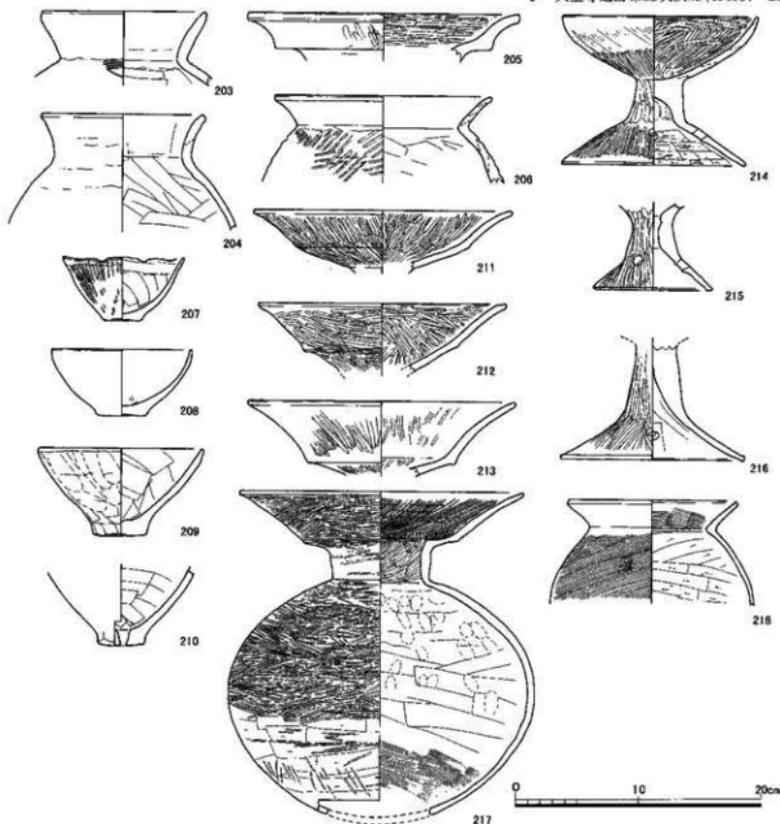


第113図 底層穿孔二重口縁釜(217)出土状況



第114図 木棺墓 401 平断面図

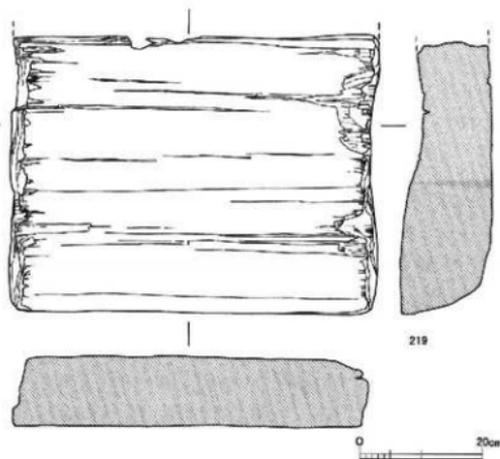
- 1 2.5G74/1 障オリブ灰色粘土
(炭化物と互層になる 西方に行くにつれマンガン斑を含む)
- 2-a 5Y4/1 灰色粘土 (炭化物を含む)
- 2-b 10Y4/1 灰色粘土 (炭化物と互層になる)
- 2-c 10Y4/1 灰色粘土 (やや黄 炭化物と互層になる)
- 2-d 2.5G74/1 障オリブ灰色粘土 (ラミナ状の炭化物を多量に含む)
- 3-a 7.5Y4/1 灰色粘土 (炭化物と互層になる)
- 3-b 5Y4/1 灰色粘土 (多量の炭化物と互層になる)
- 4-a 7.5Y4/1 灰色粘土 (炭化物と植物遺体を極少量含む)
- 4-b 7.5Y4/1 灰色粘土 (ラミナ状の植物遺体を含む)
- 4-c 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (ラミナ状の植物遺体を多量に含む)
- 5 5Y2/1 障オリブ黒色粘土 (炭化物と植物遺体を多量に含む)
- 6 7.5Y3/1 障オリブ黒色粘土 (炭化物と植物遺体を多量に含む)
- 7 7.5Y4/1 灰色シルト質粘土 (植物遺体を極少量含む)
- 8 2.5G74/1 障オリブ灰色粘土質シルト (植物遺体を含む)
- 9 7.5Y5/1 灰色粘土
- 10 5Y2/1 黒色粘土質シルト (炭化物と植物遺体を多量に含む)
- 11 10Y4/1 灰色粘土質シルト
(7.5Y5/1 灰色シルトの小さなブロックを含む)
- 12 2.5G74/1 障オリブ灰色粘土質砂質シルト
- 13 5G74/1 障オリブ灰色粘土質シルトのブロックを含む (木棺墓 401)
- 14 10Y4/1 灰色粘土質砂質粘土 (炭化物・マンガン斑を含む)
- 15 7.5Y4/1 灰色粘土質シルト (炭化物・鉄分・マンガン斑を含む)
- 16 10Y4/1 灰色シルト (炭化物・マンガン斑を含む) (ベース層)



第115図 401号墳周溝内出土遺物実測図

墳丘盛土は7・8調査区を区画する断面から復元できる。盛土はⅪ層上面に14層7.5Y4/1灰色細礫泥シルト質粘土を約0.2m盛った後に13層10Y4/1灰色粗粒砂泥粘土を重ねており、全体で約0.3mの厚みが確認できる。周溝底から墳丘頂までの比高差は0.9m前後を測る。周溝は検出面で幅7.7~14.0m、深さ0.3~0.5mを測る。埋土は大別して2段階に分けることができる。周溝機能時には粘土~粘土質シルトが周溝底より徐々に堆積していき、周溝外周であるベース面の高さまでを埋める。その後、墳丘頂までは調査区全体に堆積する炭化物を含む粘土によって覆われる。主体部は検出されていないが、8調査区北西隅の北周溝底から周溝内埋葬である木棺墓1基(木棺墓401)を検出した。また、9調査区北東部の北周溝底からは墳頂に配置されていたと推定される底部穿孔の二重口縁壺1点(217)が検出されている。遺物は周溝内から弥生時代後期後半~古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される土器類が少量出土している。16点(203~218)を図化し

た。203は広口直口壺である。復元口径13.0cmを測る。色調は褐灰色。生駒西麓産である。204は広口壺である。口径13.0cmを測る。色調は淡褐灰色～淡橙色である。胎土中に2～4mm大の長石が散見される。生駒西麓産である。205は二重口縁壺の小破片である。口縁部の1/4が残存している。復元口径22.0cmを測る。色調は褐灰色。胎土中に1～5mm大の長石の他、0.1mm以下の角閃石が多量に含まれている。生駒西麓産。206は甕の小破片である。復元口径17.4cmを測る。体部外面のタタキ調整は粗く2本/cmである。色調は赤褐色。生駒西麓産である。小形鉢は3点(207～209)を図化した。共に1/2程度が残存している。207の口縁端部は未成形で波状を呈する。底部は突出した平底で表面は3点共にドーナツ底である。色調は207が褐灰色、208・209が橙色である。3点共に生駒西麓産である。210は小形の有孔鉢で口縁部を欠く。底部は突出する平底で、底部の中央部分に上部で1.0cm、下部で0.4cmを測る孔が穿たれている。色調は黒褐色～褐灰色。生駒西麓産である。211～213は有稜高杯の杯部である。残存率は211が1/2、212が3/4、213が1/8程度である。口径は211が20.8cm、212が20.0cm、213が21.6cmを測る。211・212が杯部高と同規模の口縁部高を測るのに対して213は長めの口縁長を測る。杯部外面の調整は縦方向のヘラミガキを多用する211・213と横方向のヘラミガキを行う212がある。色調は211・212が淡橙色、213が褐灰色である。3点共に生駒西麓産である。杯部の法量指数は、211が口縁比65.7・口縁比20.5、212が口縁比62.5・口縁比25.0、213が口縁比55.5・口縁比32.3で、211・212が弥生時代後期末、213が古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される。214は碗形高杯である。脚部は完存、杯部は1/3が残存している。口径16.0cm、器高12.0cm、裾部径15.0cmを測る。杯部および脚部外面は縦方向のヘラミガキを多用している。内面は杯部が縦方向のミガキ、裾部はナデ、柱状部には指頭圧痕が残る。スカシ孔は4個。色調は淡褐灰色。生駒西麓産。215は小形の高杯の脚部である。遺存部分では柱状部が中空で古墳時代初頭(庄内式古相)に盛行する小形器台の形状を呈しているが、おそらく杯底部の円板充填部分が剥がれたことによるものと考えられる。外面に煤の付着が認められる。スカシ孔3個。色調は淡褐灰色。生駒西麓産。216は高杯の脚部である。裾部径14.8cmを測る。スカシ孔は4個。色調は淡褐灰色。生駒西麓産。217は7調査区北東部の北周溝内の下部で検出した。精美な作りの二重口縁壺で底部に焼成後の穿孔が認められる。体部下半の一部を欠く以外は完存している。口径23.0cm、復元

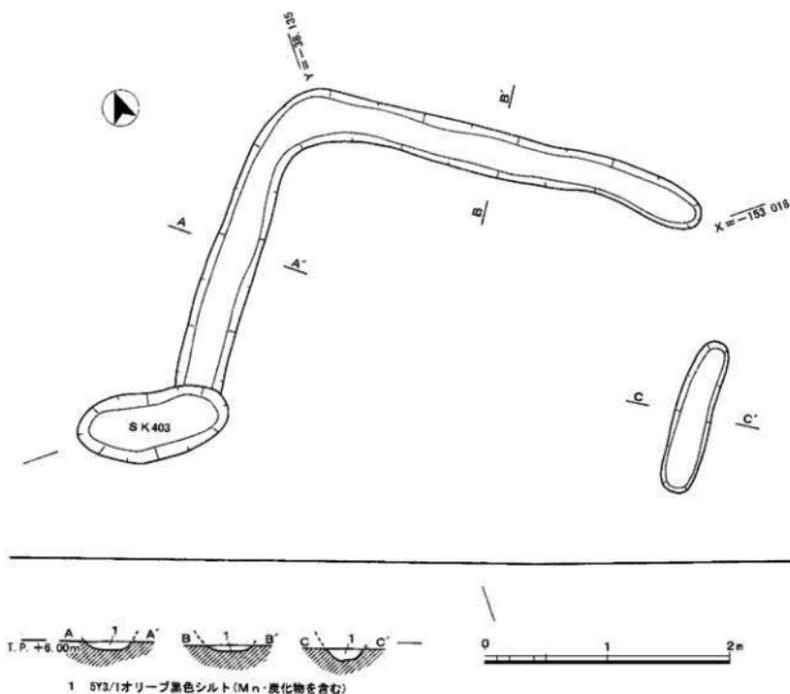


第116図 木棺墓401底板実測図(S=1/8)

器高26.7cm、体部最大径24.8cmを測る。外面の器面調整は、口縁部から体部中位までが横方向の密なヘラミガキ、以下はヘラケズリが行われている。内面の器面調整は口縁部が放射状、頸部が右七がりの密なヘラミガキ、体部上位から下位は指頭圧痕とナア、底部付近でハケが施されている。底部の穿孔部分は径8.0cmを測るもので、破面からみて内側から削られたことが推定される。なお、口頸部内外面および体部外面の一部に赤色顔料の塗布が認められる。色調は淡灰褐色。胎土は精良である。この底部穿孔壺は、埴輪祭祀定着以前の墳頂部における葬送儀礼の一端を示すものと推定される。時期は古墳時代前期前半(布留式古相-布留I期)に比定される。218は体部外面の器面調整にハケを多用する甕で、布留式影響の庄内式甕(甕D)に分類される。口径13.5cmを測る。色調は褐灰色。生駒西麓産。古墳時代前期前半(布留式古相)の短期間にのみ存在する器種である。出土遺物は時期差が認められ、203~216の弥生時代後期後半~古墳時代初頭前半(庄内式古相)のものについては周溝掘削時点に下部層(第Ⅶ・Ⅷ層)から掘り出されたもので、古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される217・218が401号墳に伴う遺物と考えられる。

木棺墓401(第114・116図、図版三三)

8調査区北西隅で北壁断面の除去中に検出した。401号墳に伴う周溝内埋葬である。北周溝の

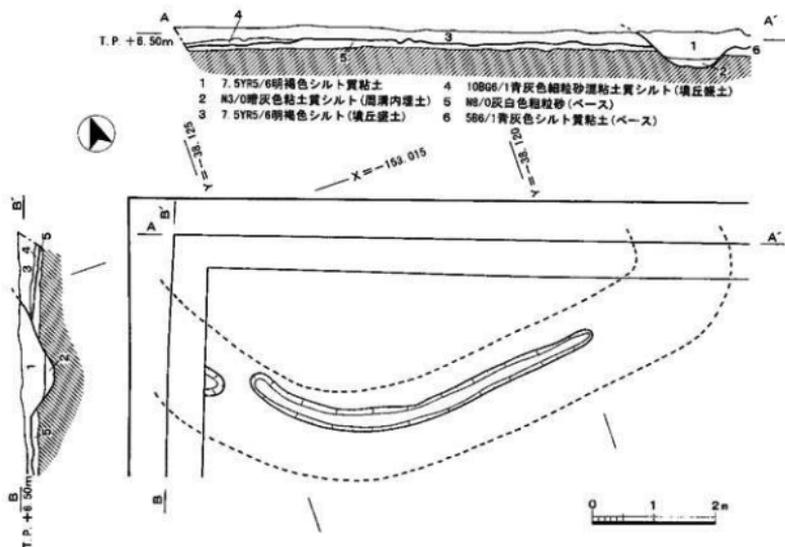


第117図 402号墳平面断面図

ほぼ中央にあり、墳丘端からは北約2.5mに位置する。北部は調査区外に至るが、墓塚本来の掘方は長方形であったと推測される。検出面で東西幅1.05m、南北幅0.7m以上、深さ0.25mを測る。墓塚内には長辺60cm、短辺45cm、厚さ14cmを測る組合せ式木棺の底板(219)が残っていたが、その北側部分は銅矢板によって切断されている。墓塚内の埋土は、2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混シルトに、5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルトのブロックが混入する。木棺墓401は周溝を埋める崩落土より下部に構築面をもつことから、401号墳の構築後まもなく埋葬されたと考えられる。なお、木棺材はコウヤマキの側材が使用されている。この材については、独立行政法人奈良文化財研究所の光谷拓実氏に年代年輪法による年代測定を依頼している。詳細は第4章第3節に記載している。

402号墳 (第117図、図版三三)

8調査区南東部のVI-4-2G地区で検出した。401号墳の東約4mに位置する。東周溝と南・北周溝の一部を検出した。北周溝西部はSK403によって切られている。第II層をベースにつくられ、主軸はN-38°30'-Eをとる。墳丘規模は南周溝が検出されていないため不明であるが、検出面で東西幅2.2m以上、南北幅3.6mを測る。墳丘盛土は削平されており、周溝は幅0.32~0.4m、深さ0.03~0.1mを残すのみであるが、南東コーナーには陸橋を示唆させる部分を有する。周溝内の埋土は5Y3/1オリーブ黒色シルトの単一層である。また主体部は検出されていない。遺物は周溝内から土師器片が出土している。時期を明確にする遺物の出土がないため不明な点が多いが、402号墳の構築時期は西接する401号墳に近い時期と推測できる。



第118図 403号墳平断面図

403号墳 (写真25、第118図、図版三四)

9調査区北西部のVI-4-2H・I地区で検出した。402号墳の北東約7mに位置する。北半分は調査区外に至る。断片的な溝のみの検出であるが、報告書作成段階での機械掘削終了時の写真と西・北壁断面の検討、さらに墓城内の一面にあること及び周囲に別機能を想定させる遺構の存在がないことから墳丘に伴う周溝の最下部との認識に至った。したがって検出した溝は南西コーナーから伸びる西・南周溝の一部と推定される。墳丘盛土及び周溝の大部分は機械掘削段階で削平されているが、西・北壁断面より

5・6層(第Ⅺ層相当)をベースにつくられていることがわかる。主軸はN-7°-Wをとる。墳丘規模は復元図より東西幅7.2m、南北幅2.6m以上と推定できる。墳丘盛土はベース面の一部に4層10BG6/1青灰色細粒砂混粘土質シルトを約0.1m盛った後に3層7.5YR5/6明褐色シルトを重ねており、全体で0.2~0.35mの厚みが確認できる。断面では周溝底から墳丘頂までの比高差は0.65m前後までを確認できるが、盛土の上層は後世の作土層であるため、墳丘頂はその影響を受け削平されている。周溝は検出面で幅0.2~0.4m、深さ0.03~0.06mを測る。復元図より幅1.4m、深さ0.4mが推測できる。埋土は周溝底に2層N3/0暗灰色粘土質シルトが堆積する。その上層である1層は調査時において分層されていなかったが、断面検討の結果、周溝内の堆積であると判断した。調査時点で分層されなかったことを考えると、3層とよく似た堆積であったと思われる。また、主体部は検出されていない。遺物は周溝内から弥生時代後期後半の土器片が数点出土している。これらは、墳丘の南東隅で検出したSW401から周溝掘削時に巻き上がったものと考えられる。なお、SW401は調査時点では403号墳に伴うものであると考えられたが、層位的には第Ⅺ層内に含まれる遺物である。403号墳の構築時期も、時期を明確にする遺物が出土していないため確定できないが、402号墳と同様に401号墳と近い時期を推測する。

404号墳 (写真26、第119~124図、図版三四~三六、七一~七五)

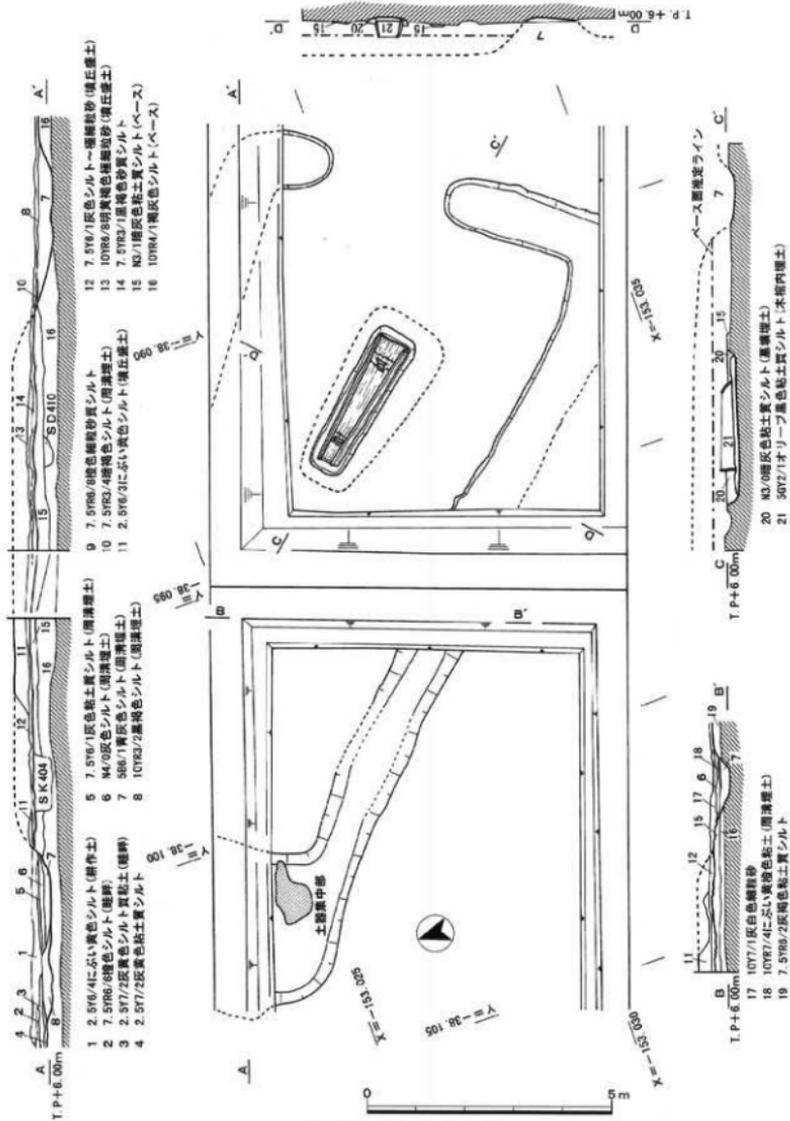
9調査区東部から10調査区中央部にわたるVI-4-3J、VI-5-3・4A・B地区で検出した。403号墳の東約17mに位置し405号墳に西接する。北半分は調査区外に至る。西周溝と南・北周溝の一部及び主体部1基を検出した。第Ⅺ層をベースにつくられ、主軸はN-42°-Wをとる。機械掘削段階で墳丘盛土と周溝の一部は削平されている。墳丘規模は検出面で東西幅6.0m、南北幅13.5mの長方形を推測できる。墳丘盛土は北壁断面からある程度の復元が可能で、9調査区ではその一部、10調査区ではその半分以上が後世の耕作による削平を受けている。盛土はベース面に厚さ0.15~0.2mのシルト~極細粒砂(12~14



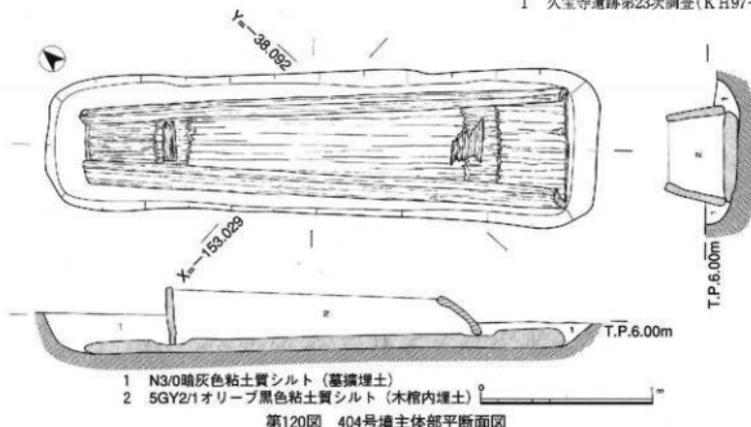
写真25 機械掘削終了時の403号墳
検出状況(西から)



写真26 機械掘削終了時の404号墳
主体部木棺検出状況(北西から)

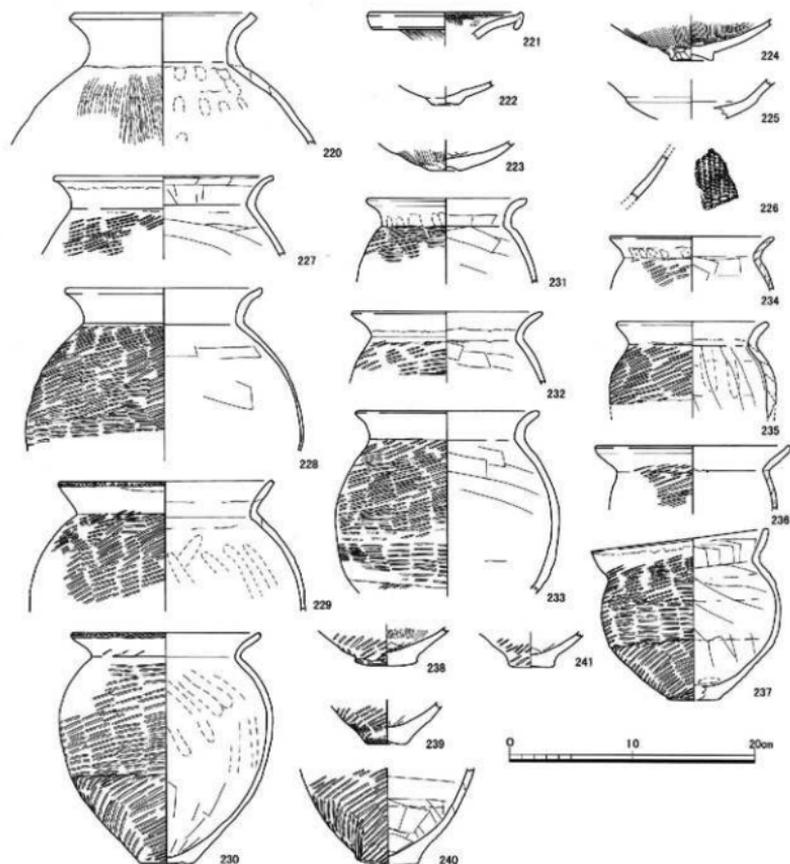


第119図 404号墳平面断面図



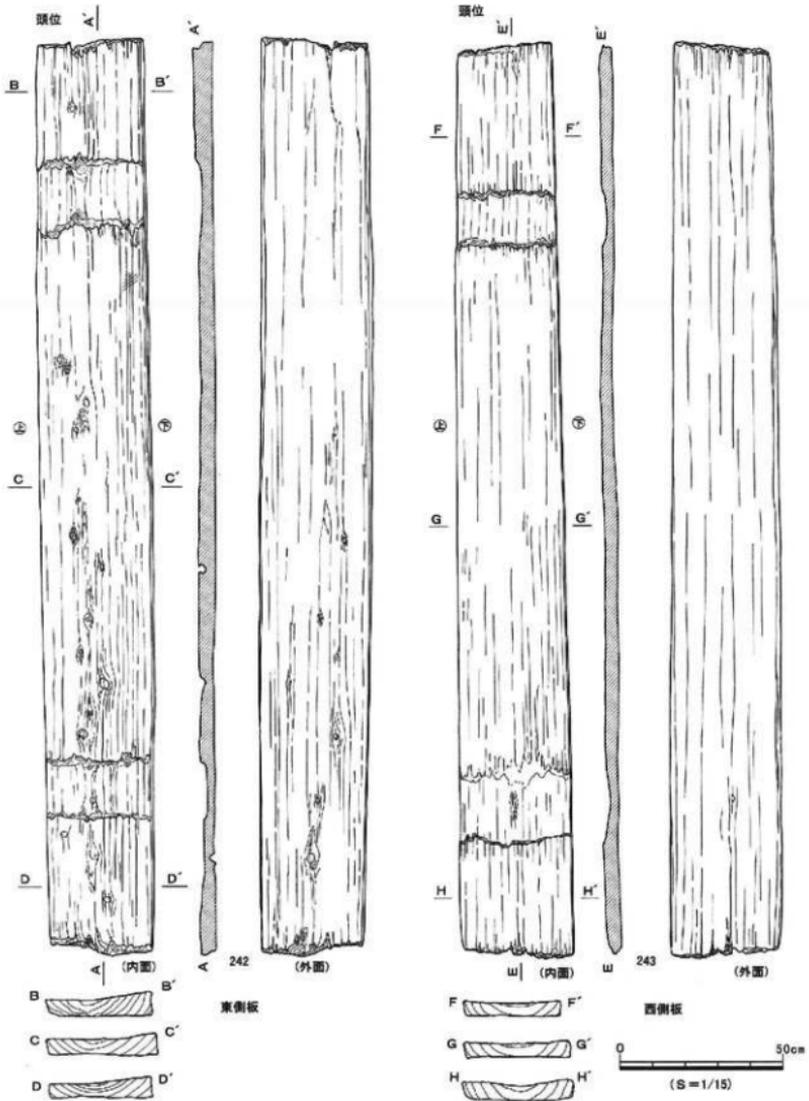
層)を全体に水平に盛った後にシルト(11層)を約0.3mの厚さで盛っている。周溝底から墳丘頂までの比高差は0.65~0.75mを測る。検出面での周溝の規模は西・南周溝で幅1.1~1.2m、深さ0.03~0.25mであるが、北周溝は幅3.2m、深さ0.22mと他と比べ著しく幅広になっている。また、南周溝の中央よりやや北に2.3m幅の陸橋部と思われる部分を有する。周溝内の埋土は墳丘からの崩落土と思われるシルト(7層)が周溝の半分ほどを埋めた後、周溝外肩までを埋める粘土~シルトが堆積する。その上層は後世の耕作土が墳丘の周りを覆う。墳丘部の一部は後世に鳥畑として利用されており、周溝を埋める耕作土はそれに付随する水田作土と考えられる。また、9調査区の北及び中央断面では墳丘盛土の立ち上がり周溝から連続するのではなく、0.7m程度の間隔を開けた後に立ち上がるのが見て取れる。図面上での墳丘盛土の復元は、鳥畑構築の際に墳丘盛土の一部が削平されたという理解のもとで行っているが、墳丘の規模から考えて周溝掘削土のみで全体の盛土を構築するには、周溝の規模が小さく浅いことが指摘できる。これらから墳丘周縁にテラスが設けられ、中央部にだけ盛土がなされていたという推測も成り立つが、現段階では段築の可能性を示唆するに留める。主体部は墳丘中央よりやや南側に墓塚を配置し、その内部に木棺を納めている。主軸は墳丘主軸と同じで、東に頭位を置く。墓塚は推定で南北幅約3.9m、頭位の東西幅約1.7m、足位の東西幅約1.3mのやや隅丸長方形の掘方をもち、深さは0.4m以上で、底部は木棺の規模より一回り大きく掘り窪めている。埋土はN3/0暗灰色粘土質シルトが堆積する。墓塚の規模はベース面上での確認であるため、それがどの段階において掘削されたものかは不明である。墓塚には、非常に良



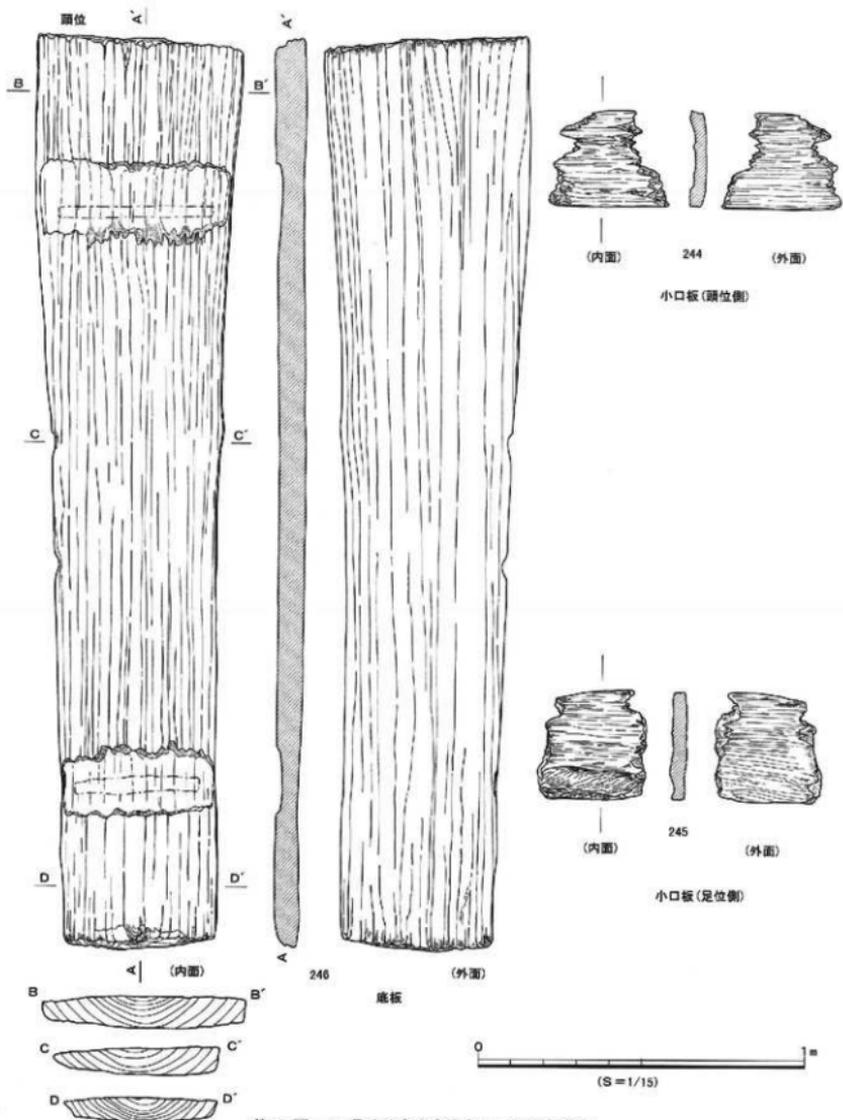


第122図 404号墳周溝内出土遺物実測図

好な状態で両側板(242・243)・両小口(244・245)・底板(246)の残る組合式木棺が納められていたが、蓋板は残っていないかった。また、木棺は傾斜を持ち、頭位を足位より高くしている。両側板と底板には小口をはめるために幅0.2mの溝が彫られ、溝の位置を合わせて底板の上に両側板を乗せて組まれている。木棺の規模は長さ2.85m、頭位幅0.71m、足位幅0.45m、高さ0.42mを測る。樹種はすべてコウヤマキである。蓋板が削平されているため、木棺内には外部から入り込んだ5GY2/1オリープ黒色粘土質シルトが堆積していた。棺内から遺物は出土していない。なお、機械掘削段階で木棺上部を確認していたが、担当者が近世の木製暗渠という認識であったため調査区全体を木棺上部より約0.2m掘り下げている。上記の墓竈掘方は、担当者との協議の上で機械掘削終了段階の写真をもとにした推定の規模であることを了承されたい。遺物は周溝の北西コーナー



第123圖 404号墳組合式木棺側板裏測図



第124图 404号墳組合式木椁小口・底板实测图

部分からコンテナ1箱程度の上器類が集中して出土している。小破片が中心で、時期は古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される。22点(220~241)を図化した。その内訳は壺5点(220~224)、甕15点(227~240)、高杯1点(225)、鉢1点(226)である。220は広口壺である。復元口径14.3cmを測る。色調は灰白色である。胎土中に0.5~2mm大の長石・石英・黒雲母の他、スコップで確認される角閃石を含む。生駒西麓産。221は口縁端部に垂下する口縁部を形成する小形の加飾壺である。復元口径12.7cmを測る。口縁部内面上位に波状文が2段にわたって施文されている。色調は淡褐色。生駒西麓産。222~224は壺の底部である。底部が突出して裏面が窪み底を呈する222・224と突出せず窪み底を呈する223がある。色調は222が淡橙色、223が赤褐色、224が褐色である。3点共に生駒西麓産である。225は有稜高杯の杯部の小破片である。色調は褐色。生駒西麓産である。226は体部外面に籠目を有する鉢の小破片である。色調は褐色。生駒西麓産。227~237はV様式系甕で全容を知り得たものは230・237である。230は口径15.3cm、器高20.0cm、底径4.2cm、237は口径14.5cm、器高13.2cm、復元底径4.2cmを測る。口縁部形態は反気味に屈曲する228・231を除けば「く」の字に屈曲する。口縁端部は丸味を持って終るものと、内傾して終るものがあり、229・230の端面には刻み目が施されている。色調は淡褐色~褐色。胎土中に1~5mm大の長石、チャートを多量に含む228・233が非生駒西麓産で、他は生駒西麓産である。238~241はV様式系甕の底部である。241を除けば突出の小さい平底で、裏面の形態は239がドーナツ底で他は水平な面を持つ。色調は238が淡褐色で他は褐色である。生駒西麓産。出土遺物は古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定されるが、小破片が多く、一全体となるものが少ないため周溝掘削時における混入遺物の可能性があるが、構築時期としては、古墳時代初頭前半(庄内式古相)以降としておく。なお、404号墳は当該期の墳墓としては中河内地域で最大規模のものであり、その墳丘規模からみて複数の主体部を持つ墳墓であった可能性がある。

405号墳(写真27・28、第125~128図、図版三七・三八・七六)

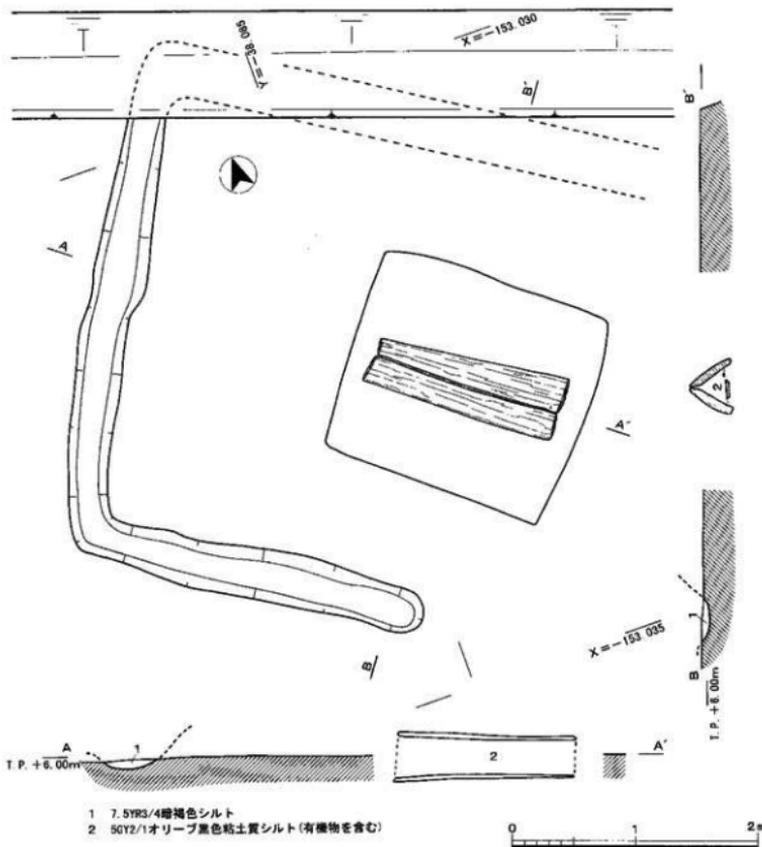
10調査区中央~西部のVI-5-3・4B地区で検出した。404号墳に東接する。「L」字状を呈する西周溝と北周溝及び主体部を検出した。第XI層をベースにつくられ、主軸はN-37°30'-Eをとる。機械掘削段階で墳丘盛土及び周溝の一部を削平している。墳丘規模は北壁断面に東・北周溝の痕跡が確認できないことから、調査区内で完結したものと考えられる。検出面での墳丘規模は東西幅3.5m、南北幅3.5m以上で、平面形は南北に長い長方形を推測できる。墳丘盛土は削平を受けており不明である。周溝は検出面で幅0.3~0.45m、深さ0.02~0.07mを測る。周溝内の埋土は7.5YR3/4暗褐色シルトである。主体部は



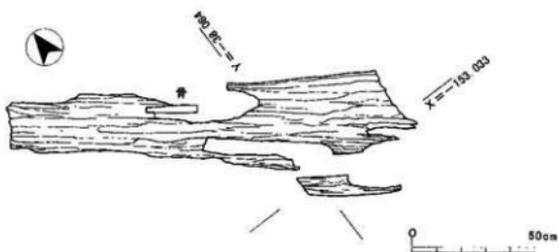
写真27 405号墳主体部検出状況(東から)



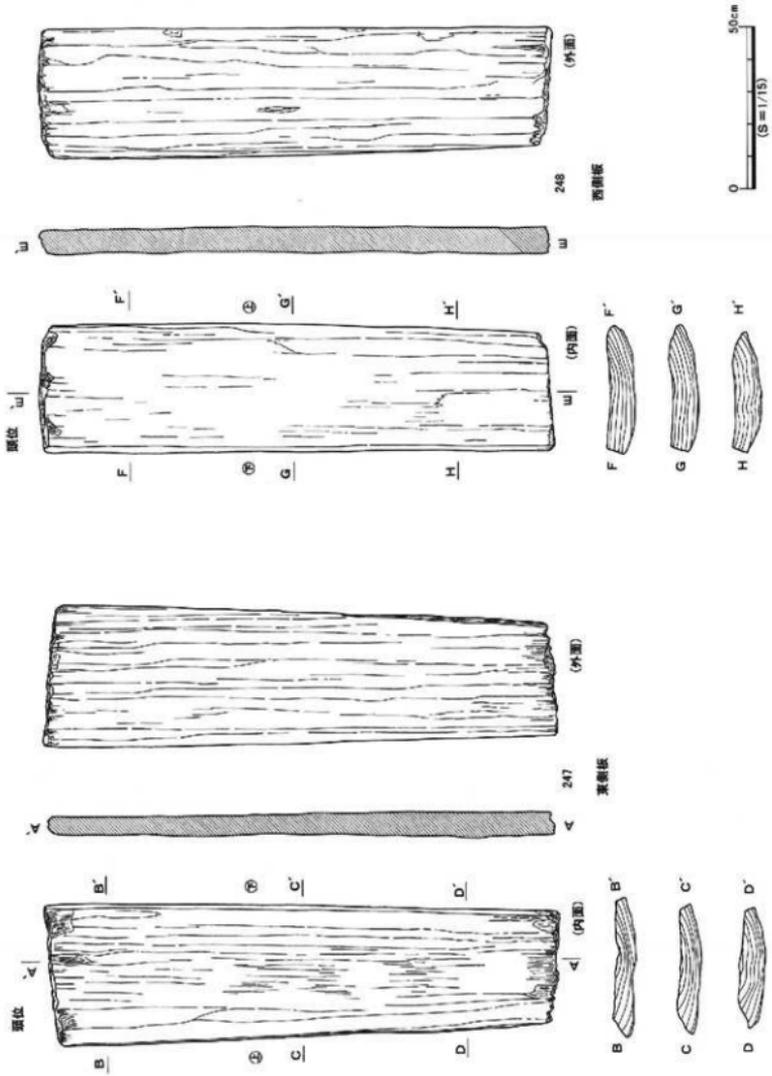
写真28 405号墳主体部出土骨片検出状況(北から)



第125図 405号墳平面断面図



第126図 405号墳組合式木棺底板平面図

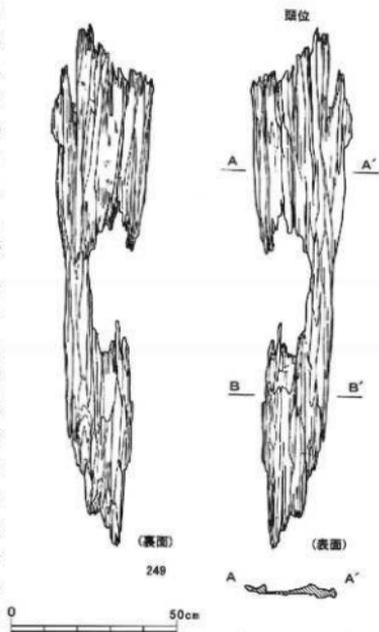


第127图 405号墳組合式木棺側板実測図

墳丘のはば中央に位置する。主軸は墳丘主軸と同じで、頭位は404号墳と同じく東方向に置く。主体部には木棺が使用され非常に良好な状態で検出された。両側板(247・248)と底板(249)のみの構成で、両側板が上部で合わさる「合掌形」の構造をなす組合式木棺である。両側板の上部内側は斜めに削られており、合掌の形に組まれることを意識して製作されている。木棺の規模は長さ1.56m、頭位幅0.53m、足位幅0.38m、高さ0.31mを測る。樹種は両側板がコウヤマキで、底板がスギである。小口が存在しないため、木棺内には外部から有機物を含む5GY2/1オリブ黒色粘土質シルトが入り込み堆積している。また、底板には頭位から0.9mの位置に大腿骨と考えられる骨片が残っていたが、その他の遺物は確認されなかった。なお、404号墳同様機械掘削段階で木棺上部を確認していたが、404号墳と同じく近世の木製暗渠という認識のもと、範囲確認のためにその周辺を掘削したことで、本来の墓塚の輪郭は消滅している。写真及び図に見られる木棺を取り囲む範囲は、墓塚の輪郭を示すものではないことも合わせて了承されたい。周溝内から遺物は出土していない。構築時期は遺物が出土していないため明確にはできないが、404号墳に隣接することから古墳時代初頭前半(庄内式古柩)以降と推定される。

406号墳 (写真29、第129図、図版三九)

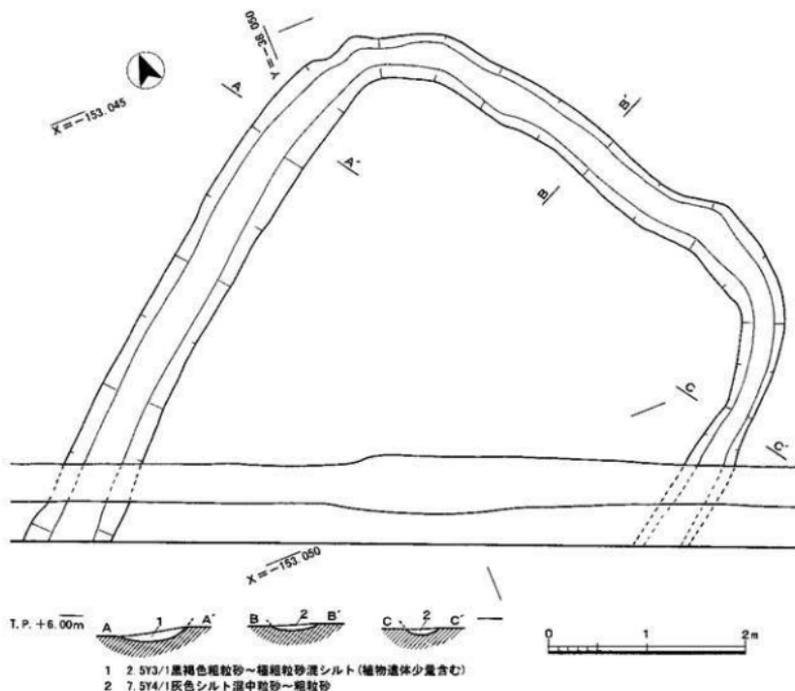
11調査区中央部のVI-5-5・6 E・F地区で検出した。東部墓域を構成する墳墓である。東周溝と南・北周溝の一部を検出した。第Ⅱ層をベースにつくられ、主軸は西側に近接するSD427と並行するもので、N-38°-Eをとる。墳丘規模は西周溝が調査区外に至るため確定はできないが、検出面で南北幅4.9m、東西幅5.2m以上で、平面形は東西に長い長方形が推測できる。墳丘盛土は削平されており、主体部は検出されていない。周溝は幅0.3~0.7m、深さ0.03~0.15mを残すのみである。周溝内埋土は、北周溝が植物遺体を含む2.5Y3/1黒褐色粗粒砂~極粗粒砂混シルト、東・南周溝が7.5Y4/1灰色シルト混中粒砂~粗粒砂である。遺物は西周溝内から土師器片が極少量出土しているが、時期を明確にし得るものはない。なお、406号墳は調査地の南東部に実



第128図 405号墳組合式木棺底板実測図



写真29 406号墳検出状況(西から)



第129図 406号墳平断面図

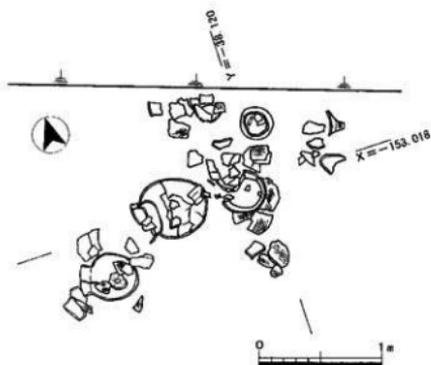
施された水処理施設に伴う調査の東部の一群(3～8号墳)、第28次調査の2基(301・302号方形周溝墓)、多目的広場調査地の久宝寺1号墳と同一の墓域を形成したものと考えられる。従って、構築時期については古墳時代初頭後半(庄内式新相)～前期前半(布留式古相)が推定される。

土器集積 (SW)

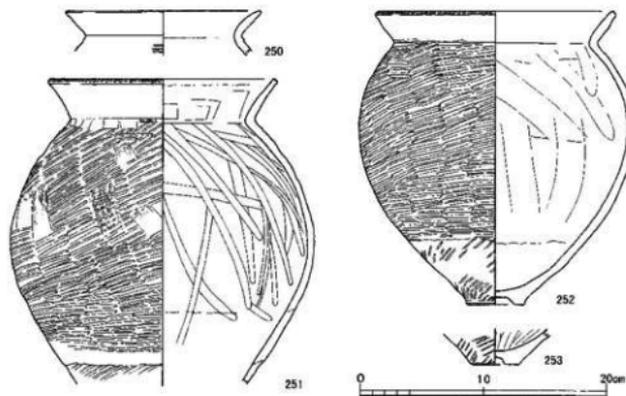
SW401 (第130・131図、図版三九・七七)

9調査区北東部のVI-4-2 H・I 地区で検出した。第Ⅱ層内に含まれる。弥生時代後期後半に比定される土器類が少量出土している。図化できたものは甕4点(250～253)である。250は甕の口縁部の小破片である。残存率は口縁部の1/4程度である。復元口径15.8cmを測る。色調は灰白色。非牛胸西産である。251の甕は体部下半以下を欠く。口径18.3cm、残存高23.7cmを測る。体部の形状は球形で体部最大径が中位にある。口縁部は「く」の字状でやや鋭く屈曲するもので、内傾する口縁端部に刻み目が施されている。体部外面のタタキ調整は分割成形に沿って行われており、上位が右上がり、下位が水平方向で、上位では板ナデにより一部のタタキ調整が消されている。体部内面は、単位幅の広いミガキ調整が中位から上位にかけて施されている。色調は淡褐

灰色。生駒西麓産。252は全体の1/2が
残存している。口径19.2cm、器高24.0
cm、底径4.6cm、体部最大径22.2cmを
測る。体部最大径が中位よりやや上部
に位置する球形の体部に「く」の字に
屈曲する口縁部が付くもので、251と
同様、口縁端部に刻み目が施されてい
る。底部は突出の小さい平底で、表面
はドーナツ底を呈する。体部は三分割
成形によるもので、外面のタタキ調整
は上位と下位が右上がり、中位が水平
方向である。体部内面の調整は中位が
板ナデ、上位が指ナデを施す。色調は
褐灰色。生駒西麓産。253は壺の底部
で完存している。突出平底で裏面はド
ーナツ底である。底径4.0cmを測る。
色調は淡褐灰色。生駒西麓産である。



第130図 SW401平面図



第131図 SW401出土遺物実測図

・第5面(弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)](第132～158図、図版四〇～四八、七七～八四)

調査地西部から中央部に位置する2調査区～10調査区で検出した。第Ⅲ層上面(T.P. +5.9～5.5m)で検出した遺構面である。時期的には、上部から切り込まれるS E 502(奈良時代前～中期)を除けば、弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)が中心である。検出した遺構には、井戸2基(S E 501・S E 502)、土坑12基(S K 501～S K 512)、溝131条(S D 501～S D 513)、小穴3個(S P 501～S P 503)、落ち込み1箇所(S O 501)、自然河川2条(N R 501・N R 502)がある。

井戸(S E)

S E 501 (写真30)

2調査区北西部のⅡ-22-8 E・F地区で検出した。北部は側溝掘削時に削平を受けている。検出状況から見て東西に長い隅丸方形を呈するものと考えられる。検出部分で東西長1.8m、南北長0.7m、深さ0.4m測る。掘方断面の形状は逆台形を呈する。埋土は、井戸側の痕跡の可能性がある中央部が10BG6/1青灰色細礫混シルト、掘方部分の上層が10BG6/1青灰色シルト～細粒砂、下層が10G4/1暗緑灰色粘土質シルトの3層に分層される。遺物が出土していないため構築時期は不明である。

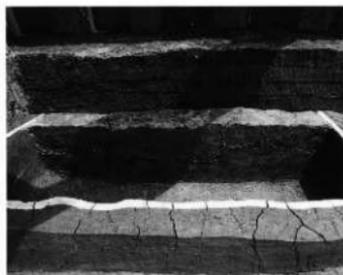
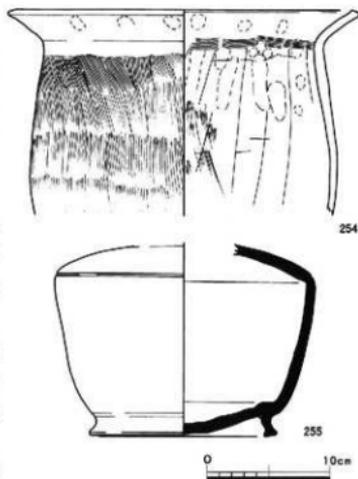


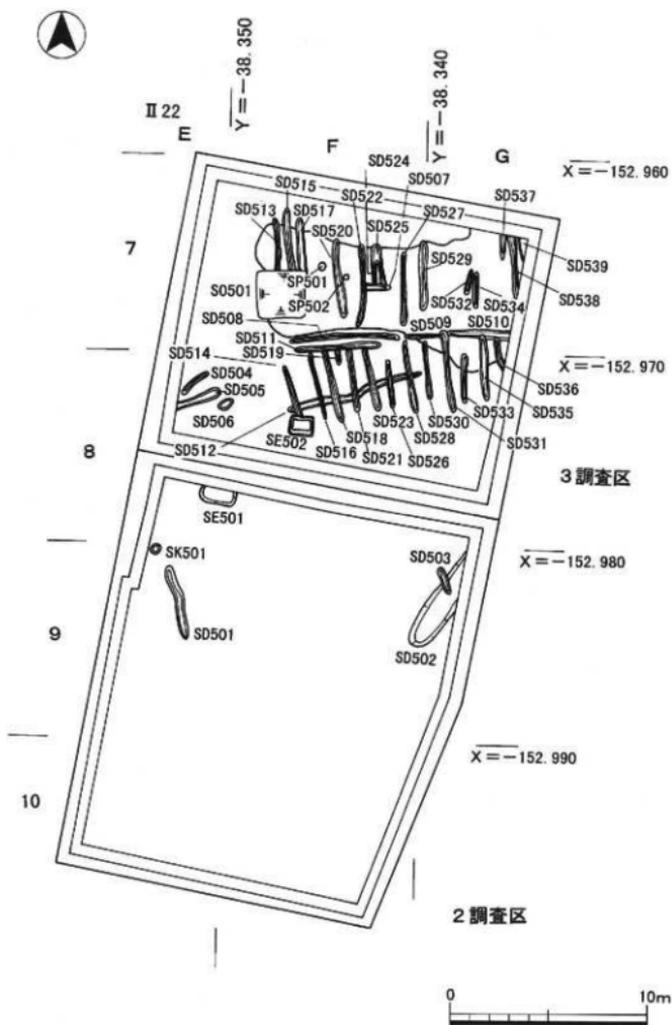
写真30 S E 501検出状況(南から)

S E 502 (第132・134図、図版四六)

3調査区南部のⅡ-22-8 F地区で検出した。縦板組横棧どめの木枠を井戸側とするものである。実際の掘り込み面については、上部が機械掘削により削平を受けているため不明である。しかし、西接する位置で実施された久宝寺遺跡第22次3調査区(KH97-22-3)の調査を参考にするとT.P. +6.0m前後において奈良～平安時代に比定される遺構が検出されており、本井戸についても構築面はその付近にあたるものと想定される。掘方の形状は東西に長い長方形を呈し、規模は検出部分で東西幅1.13～1.21m、南北幅0.94～1.03m、深さは0.67mを測る。掘方の断面状況は、垂直近くに掘り込まれ、底面は平坦になっている。井戸側(縦板組)は掘方内の中央に設置されており、規模は東西幅0.85m、南北幅0.45m、高さ0.9mを測る。井戸側として使用されている各縦板の法量は、幅10～20cm、長さ90cm前後、厚さ2cm前後のもので、

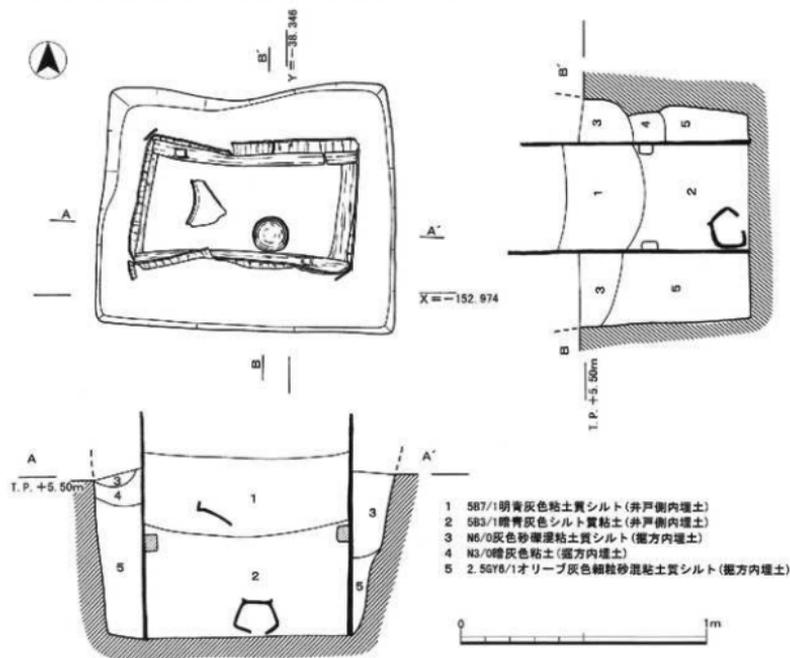


第132図 S E 502出土遺物実測図



第133図 第5面平面図(2・3調査区)

枚数にして20枚前後を数える。さらに縦板組の内側には、横棧材として長さ81cmと35cmで厚さ5cm前後の角材を2本ずつ縦板の中程あたりに組み込まれている。この角材については納や切り込みといった加工がみられることから、建築部材を転用したものと考えられる。埋土については、掘方内が上層から3層N6/0灰色砂礫混粘土質シルト、4層N3/0暗灰色粘土、5層2.5GY6/1オリブ灰色細粒砂混粘土質シルトである。井戸側内は上層が1層5B7/1明青灰色粘土質シルト、下層が2層5B3/1暗青灰色シルト質粘土である。遺物は井戸側内の1・2層から、奈良時代前期～中期に比定される土師器、須恵器が少量出土している。土師器壺C 1点(254)と須恵器壺1点(255)を図化した。254は土師器壺Cの小破片である。復元口径27.5cmを測る。口縁部は屈曲した後、端部が内傾する幅広の端面を形成している。体部は長胴形で張りが少ない。内外面の調整は全体に丁寧で、口縁部内外面がヨコナデ。体部外面は縦方向の密なハケ調整。体部内面は上位に横方向ハケ、以下縦方向の板ナデが行われている。色調は赤褐色で胎土には水蔵されたものが使用されている。255は須恵器の壺である。2層から出土した。口頸部および高台の半分を欠く。肩部が稜角をなす胴長の体部に内傾する重厚な高台が付く。体部高15.6cm、体部最大径21.3cm、高台径15.3cm、高台高1.5cmを測る。肩部と体部の境に沈線が1条巡る。色調は淡灰色で焼成は良好である。254・255共に奈良時代前期～中期に比定される。



第134図 S E 502平断面図

土坑 (SK)

SK 501

2調査区北西部のII-22-8・9E地区で検出した。SE 501から南西約4m地点に位置する。平面形は円形で、法量は径0.50m前後、深さ0.06mを測る。埋土はN2/O黑色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

SK 502

4調査区西部のII-23-8A地区で検出した。平面形は不整楕円形で、長径1.3m、短径0.5m、深さ0.12mを測る。埋土は10Y5/2オリーブ灰色粗粒砂で、7.5Y4/1灰色植物遺体混シルトがラミナ状に入る。遺物は出土していない。

SK 503

4調査区西部のII-23-8A地区で検出した。SK 502に北接する。平面形は不整楕円形で、長径0.8m、短径0.4m、深さ0.02mを測る。埋土は10Y5/2オリーブ灰色粗粒砂で、7.5Y4/1灰色植物遺体混シルトがラミナ状に入る。遺物は出土していない。

SK 504

4調査区西部のII-23-8A地区で検出した。SK 503に南接する。平面形は楕円形で長径0.8m、短径0.4m、深さ0.05mを測る。埋土は10Y5/2オリーブ灰色粗粒砂で、7.5Y4/1灰色植物遺体混シルトがラミナ状に入る。遺物は出土していない。

SK 505

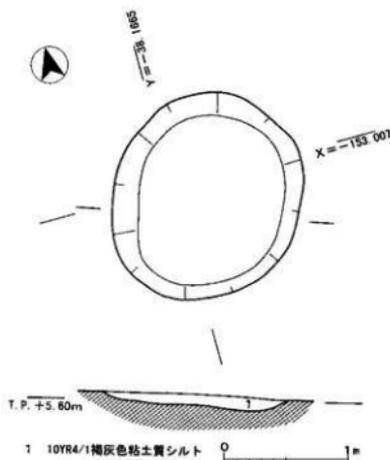
4調査区南部のII-23-8B地区で検出した。平面形は楕円形で長径0.9m、短径0.4m、深さ0.04mを測る。埋土は10Y5/2オリーブ灰色粗粒砂で、7.5Y4/1灰色植物遺体混シルトがラミナ状に入る。遺物は出土していない。

SK 506

4調査区南東隅のII-23-9E地区で検出した。東部と南部は調査区外に至る。検出部分で東西幅0.4m、南北幅1.0m、深さ0.07mを測る。埋土は10Y5/2オリーブ灰色粗粒砂で、7.5Y4/1灰色植物遺体混シルトがラミナ状に入る。遺物は出土していない。

SK 507 (第135図)

7調査区東部のVI-4-1D地区で検出した。SD 591～SD 593を切っている。平面形は円形で径1.6m、深さ0.1mを測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は10Y4/1褐灰色粘土質シルトの単一層である。遺構内からは弥生時代後期後半に比定される土器類が少量出土しているが図化できたものはない。



第135図 SK 507 平面断面図

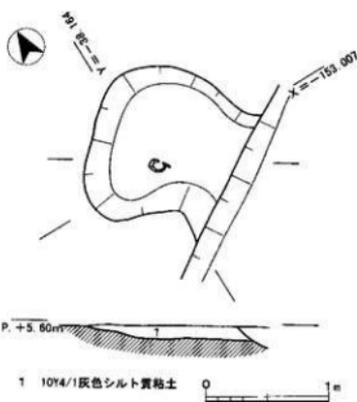
S K 508 (第137・138図、図版七七)

7調査区東部のVI-4-1D地区で検出した。南東部分はS D 594に切られている。検出部分で東西幅1.5m、南北幅1.1mを測る。断面は浅い逆台形を呈し、深さ0.1mを測る。埋土は10Y4/1灰色シルト質粘土の単一層である。遺構内からは弥生時代後期後半に比定される土器類が少量出土している。発見3点(256~258)を図化した。3点共に器高が15cm以下の小形品である。256は体部外面に縦方向のハケを施す甕である。復元口径14.0cmを測る。外面全体に煤の付着が認められる。色調は褐灰色である。生駒西麓産である。257は完形品である。口径12.6cm、器高14.2cm、底径4.0cmを測る。体部外面のタタキ調整の方向は三分割成形に沿って行われており、タタキ方向は上・下段が右上がり、中段が水平である。1線部は叩き出し技法によるものであるが、全体に雑な作りで粘土紐の痕跡が明瞭に残る他、端面も未成形のままで波状を呈している。色調は淡褐色。生駒西麓産である。258は球形の体部を持つ甕である。ほぼ完形品で口径14.0cm、器高15.0cm、底径3.2cmを測る。色調は淡褐灰色。生駒西麓産である。遺構の帰属時期としては、弥生時代後期後半が推定される。

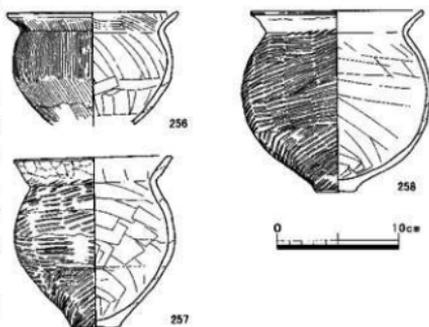
S K 509 (第139・140図、図版四七・七八・七九)

7調査区の北東部のVI-4-1D地区

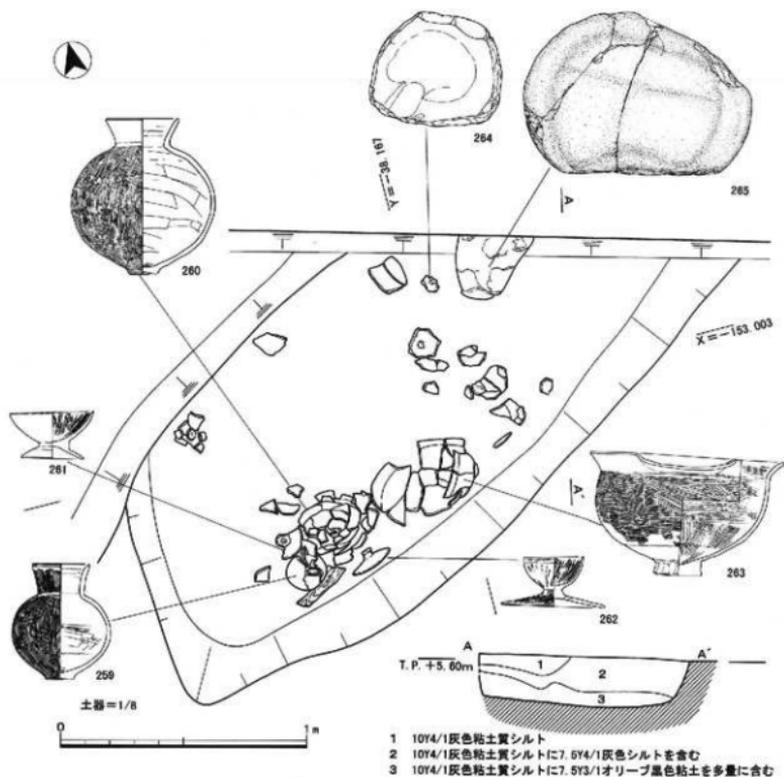
で検出した。北部を401号墳の西周溝に切られている。検出部分で東西幅4.0m、南北幅1.6mを測る。断面は浅い逆台形を呈し、深さ0.2mを測る。埋土は粘土質シルトを主体とする3層(1~3層)から成る。遺物は、2・3層から弥生時代後期後半に比定される土器類、石器類が多量に出土している。7点(259~265)を図化した。内訳は壺2点(259・260)、椀形高杯2点(261・262)、鉢1点(263)、台石2点(264・265)である。259は短頸直口壺で完形品である。口径9.2cm、器高18.6cm、体部最大径15.8cm、底径4.5cmを測る。外面の口頸部および体部は縦方向の密なヘラミガキを多用する他、体部上位に綾杉文状の文様が巡るが1周せず3箇所に分割して施文されている。色調は灰白色で胎土中に1mm大の長石が多数含まれている。生駒西麓産である。260は広口直口壺でほぼ完形である。口径11.8cm、器高25.8cm、体部最大径23.1cm、底径4.8cmを測る。体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は板ナデ調整を施す。色調は褐灰色で胎土中に1~2mm大の長石・角閃石を多



第137図 S K 508 平面断面図

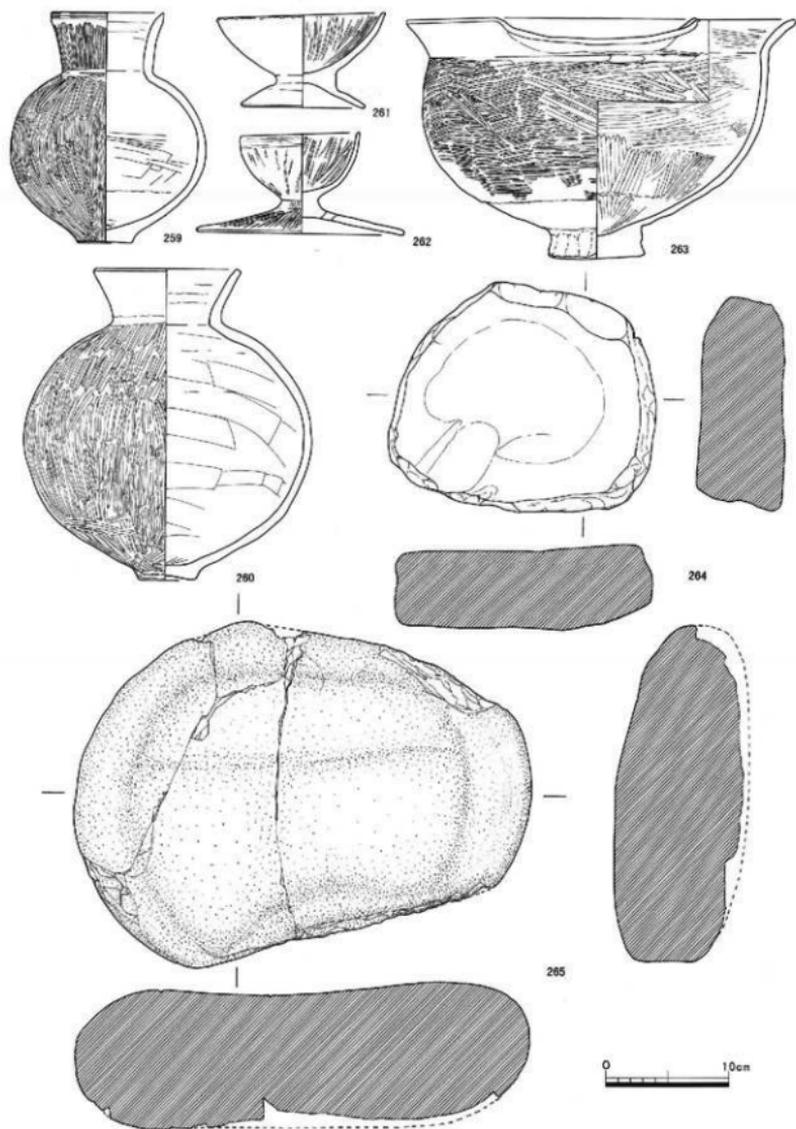


第138図 S K 508 出土遺物実測図



第139図 SK 509平面図

量に含む。生駒西麓産である。261は「ハ」の字に開く脚部に深めの杯部が付く椀形高杯である。完形品で口径14.0cm、器高7.5cm、裾部径10.2cmを測る。口縁端部は未成形部分を残しており、一部粘土紐の痕跡が残る。色調は赤褐色である。生駒西麓産である。262は椀形の杯部を持つ高杯である。深目の椀形杯部に大きく広がる脚部が付く。完形品で口径9.5cm、器高8.2cm、裾部径16.8cmを測る。杯部外面の調整は、口縁部外面に撈漕による沈線帯が廻る他は内面と同様縦方向のヘラミガキを行なう。脚部は外面が縦方向のヘラミガキ、内面は裾部端がヨコナデ、他はナデを施す。スカシ孔は3個を穿つ。色調は赤褐色～褐灰色。生駒西麓産である。263は流し口を有する大形の鉢である。ほぼ完形品で口径31.3cm、器高20.0cm、底径8.0cmを測る。器面調整は体部外面が水平方向のタタキの後、部分的にヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキを多用する。体部外面に煤の付着が認められる。色調は褐灰色。生駒西麓産である。264・265は台石である。共に扁平な石材で上下面に使用痕跡が認められる。共に火を受けたことを示す煤の付着が顕著で、265につい



第140図 S K 509出土遺物実測図

てはその影響を受けたためか脆くて大小に割れた状態で出土している。石材は264が花崗岩、265が和泉砂岩である。遺構の帰属時期は、弥生時代後期後半が推定される。

S K 510

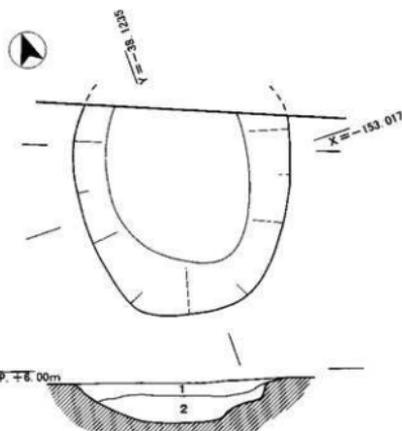
8調査区北部のVI-4-2F地区で検出した。平面形は楕円形で、長径0.8m、短径0.6m、深さ0.1mを測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト(植物遺体を極少量含む)の単一層である。遺物は出土していない。

S K 511

8調査区北部、VI-4-2G地区で検出した。平面形は楕円形で長径0.5m、短径0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色粘土の単一層である。遺物は出土していない。

S K 512 (第141図)

9調査区の北西隅のVI-4-2H地区で検出した。上面の形状は南北にやや長い楕円形で断面の形状は逆台形を呈する。法量は、東西幅1.7m、南北幅2.6m、深さ0.32mを測る。埋土は2層から成り、上層が10YR3/1黒褐色粘土質シルト、下層がN4/0灰色粘土質シルトである。遺物は上層から甕の小破片が2点出土している。



第141図 S K 512平面断面図

溝 (SD)

SD 501

2調査区北西部のII-22-9E地区で検出した。S K 501から南東約0.8m地点に位置する。北西-南東に伸びる溝で、全長3.8m、幅0.3~0.5m、深さ0.06mを測る。断面の形状は皿形を呈する。埋土はN2/0黒色粘土質シルトの単一層で、遺物は出土していない。

SD 502

2調査区北東部のII-22-8・9G地区で検出した。南西-北東に伸びるもので、南西部分については上部が後世の河川の氾濫等によって削平され、詳細については不明である。また、北肩の一部がSD 503によって切られている。検出部分で検出長5.5m、幅1.1~1.4m、深さ0.12mを測る。断面の形状は皿形を呈する。埋土は5Y7/1灰白色粗粒砂の単一層である。遺物は出土していない。

SD 503

2調査区北東部のII-22-9G地区で検出した。SD 502の北肩を切る。北西-南東に伸びるもので、全長1.5m、幅0.3~0.4m、深さ0.1mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土はN2/0黒色粘土質シルトの単一層で、遺物は出土していない。

S D504～S D539

3調査区のほぼ全域で検出した小溝群で、分布はやや中央に集中する。総数で36条を数えるが、後世の削平もあり、その中には同一の溝として捉えられるものもある。方向としては東-西に伸びるS D504～S D512の9条を除けば、南-北に直線的に並行して伸びるものがほとんどである。各溝の規模は、長さ0.72～7.04m、幅0.16～0.55m、深さ0.02～0.30mを測る。断面は楕円あるいは皿形を呈する。埋土についてはすべて単一層で、N3/O暗灰色粘土質シルトまたはそれに若干の砂礫を含む2種に大別される。遺物は、北東に位置する一部の溝内から弥生土器片が少量出土している。これらの小溝群の性格的は、周辺で実施された近畿自動車道関連の調査例から、畑作に関連した畝立て溝であったと考えられる。各溝の法量および詳細は第26表に示した。

第26表 S D504～S D539法量表(単位:m)

| 遺構名 | 地区 | 全長 (検出長) | 幅 (最大) | 深さ | 埋土 | 出土遺物 |
|--------|------------|-------------|-----------|------|---------------|------|
| S D504 | II-22-8E | 1.70 | 0.34 | 0.10 | N3/O暗灰色粘土質シルト | |
| S D505 | * | 2.42 | 0.52 | 0.03 | * | |
| S D506 | II-22-8E-F | 0.80 | 0.55 | 0.04 | * | |
| S D507 | II-22-7F | 1.22 | 0.30 | 0.05 | * | |
| S D508 | * | 6.12 | 0.26 | 0.07 | * | |
| S D509 | II-22-7F-G | 1.86 | 0.30 | 0.10 | * | |
| S D510 | II-22-7G | 3.20 | 0.50 | 0.30 | * | |
| S D511 | II-22-7F | 5.30 | 0.34 | 0.12 | * | |
| S D512 | II-22-8F | 7.04 | 0.44 | 0.04 | * | |
| S D513 | II-22-7F | 2.70 | 0.24 | 0.03 | * | |
| S D514 | II-22-8F | 2.50 | 0.26 | 0.07 | * | |
| S D515 | II-22-7F | 3.22 | 0.40 | 0.03 | * | |
| S D516 | II-22-8F | 3.50 | 0.22 | 0.04 | * | |
| S D517 | II-22-7F | 2.62 | 0.44 | 0.06 | * | |
| S D518 | II-22-8F | 3.80 | 0.34 | 0.06 | * | |
| S D519 | II-22-78F | 0.72 | 0.30 | 0.18 | * | |
| S D520 | II-22-7F | 4.10 | 0.41 | 0.05 | * | |
| S D521 | II-22-78F | 3.20 | 0.26 | 0.02 | * | |
| S D522 | II-22-7F | 4.24 | 0.30 | 0.04 | * | |
| S D523 | II-22-78F | 3.36 | 0.16 | 0.06 | * | |
| S D524 | II-22-7F | 2.10 | 0.54 | 0.07 | * | |
| S D525 | * | 2.10 | 0.54 | 0.07 | * | |
| S D526 | II-22-8F | 2.50 | 0.28 | 0.07 | * | |
| S D527 | II-22-7F | 3.80 | 0.30 | 0.03 | * | |
| S D528 | II-22-8F | 3.80 | 0.34 | 0.13 | * | |
| S D529 | II-22-7F-G | 3.50 | 0.40 | 0.04 | * | |
| S D530 | II-22-78G | 3.02 | 0.28 | 0.05 | * | |
| S D531 | * | 4.30 | 0.32 | 0.05 | * | |
| S D532 | II-22-7G | 1.38 | 0.30 | 0.04 | * | |
| S D533 | II-22-78G | 2.60 | 0.32 | 0.06 | * | |
| S D534 | II-22-7G | 1.82 | 0.28 | 0.04 | * | |
| S D535 | II-22-78G | 3.40 | 0.42 | 0.06 | * | |
| S D536 | * | 1.40 | 0.32 | 0.06 | * | |
| S D537 | II-22-7G | 1.34 | 0.30 | 0.07 | * | |
| S D538 | * | 3.20 | 0.40 | 0.05 | * | |
| S D539 | * | 1.10 | 0.40 | 0.05 | * | |

S D540～S D555

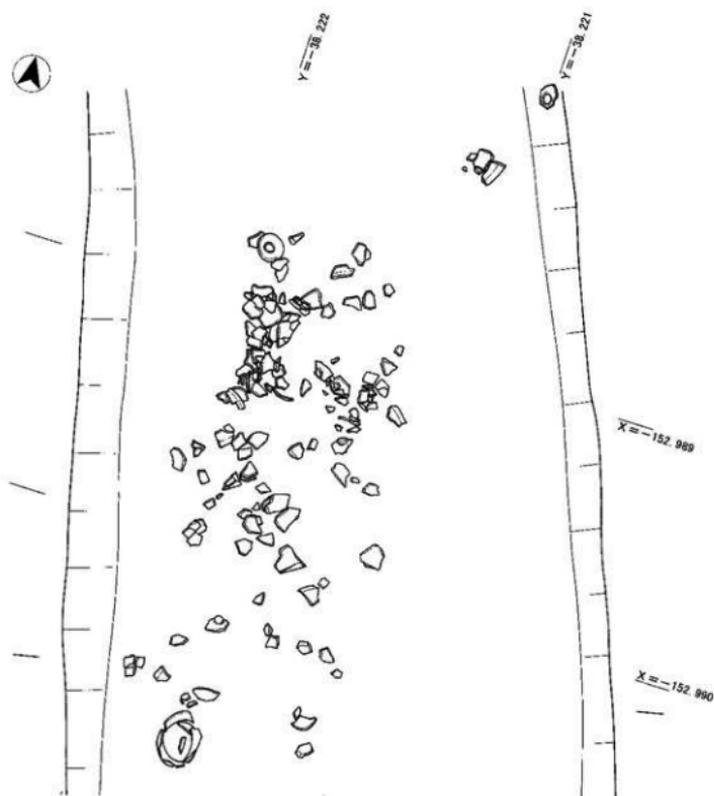
4 調査区全域で検出した小溝群である。S D540～S D542を除けば、概ね南西～北東方向に約2.0mの間隔を有して並行に伸びている。各溝の規模は、調査区外に至るものもあるため不明な要素を含むが、検出部分で長さ1.30m～7.00m、幅0.2～0.6m、深さ0.02m～0.08mを測り、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、各溝ともに植物遺体を含む7.5Y3/1オリーブ黒色粗粒砂混粘土の単一層である。遺物は出土していない。遺構の性格としては、畑作に関連した畝立て溝であったと考えられる。なお、各溝の法量・詳細については第27表に示した。

第27表 S D540～S D555法量表 (単位m)

| 遺構名 | 地区 | 全長 (検出長) | 幅 (最大) | 深さ | 埋土 | 出土遺物 |
|--------|--------------|-------------|-----------|------|---------------------|------|
| S D540 | Ⅱ-23-8A-B | 1.30 | 0.30 | 0.03 | 7.5Y3/1オリーブ黒色粗粒砂混粘土 | |
| S D541 | Ⅱ-23-8B | 1.50 | 0.50 | 0.03 | ＊ | |
| S D542 | ＊ | 4.00 | 0.20 | 0.05 | ＊ | |
| S D543 | Ⅱ-23-8A-B | 6.00 | 0.50 | 0.03 | ＊ | |
| S D544 | Ⅱ-23-8B | 4.70 | 0.30 | 0.03 | ＊ | |
| S D545 | ＊ | 7.00 | 0.60 | 0.08 | ＊ | |
| S D546 | ＊ | 7.00 | 0.40 | 0.07 | ＊ | |
| S D547 | ＊ | 7.00 | 0.40 | 0.05 | ＊ | |
| S D548 | Ⅱ-23-8B-C | 7.00 | 0.40 | 0.05 | ＊ | |
| S D549 | Ⅱ-23-8B-C-9E | 7.00 | 0.40 | 0.04 | ＊ | |
| S D550 | Ⅱ-23-8-9C | 7.00 | 0.30 | 0.06 | ＊ | |
| S D551 | ＊ | 5.30 | 0.30 | 0.03 | ＊ | |
| S D552 | ＊ | 2.20 | 0.20 | 0.02 | ＊ | |
| S D553 | ＊ | 3.00 | 0.20 | 0.03 | ＊ | |
| S D554 | Ⅱ-23-9E | 1.50 | 0.20 | 0.04 | ＊ | |
| S D555 | ＊ | 3.00 | 0.20 | 0.03 | ＊ | |

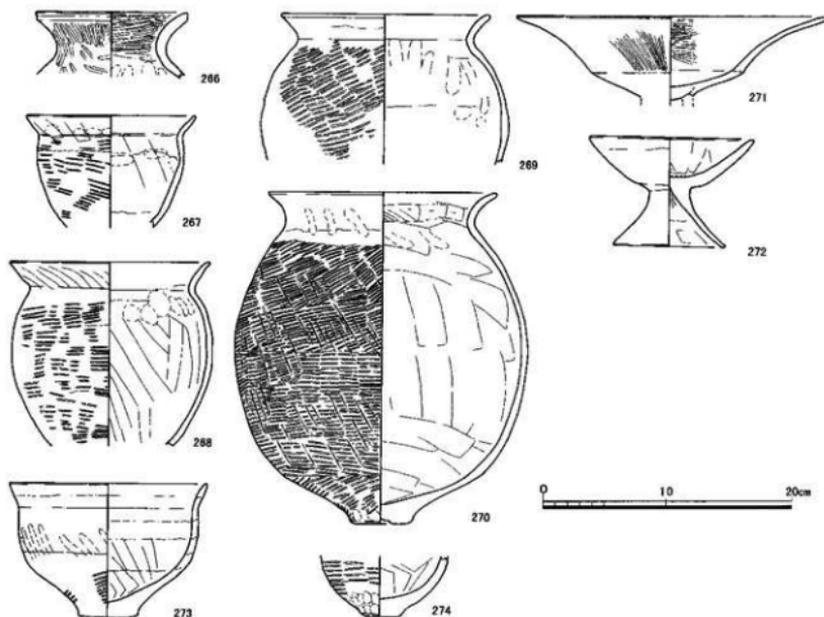
S D556 (第142・143図、図版四八・七九)

6 調査区西部のⅡ-23-9・10H・I地区で検出した。南～北に伸びるもので、検出長6.80m、幅2.2m、深さ0.15mを測る。埋土は10YR4/1褐灰色極細粒砂～細礫混シルトの単一層である。遺物は検出部分の中央西部を中心とした、南北2.8m、東西1.1mの範囲に集中して、古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される土器類が多量に出土している。小片化したものが大半で、そのうち9点(266～274)を図化した。内訳は壺1点(266)、甕4点(267～270)、高杯2点(271・272)、鉢2点(273・274)である。266は広口壺である。口縁端面に沈線が1条巡る。復元口径12.0cmを測る。生駒西麓産である。甕は4点(267～270)で、V様式系甕に分類される。全容を知り得たものは270のみである。267が小形品、268・269が中形品、270が大形品である。270は口径18.1cm、器高27.0cm、体部最大径23.6cmを測る。体部は長胴形で、外面のタタキ調整は4分割成形に沿ってそれぞれの方向を異にしている。体部最大径は中位にある。底部は突出しており、裏面はドーナツ底を呈する。色調は267・269・270が褐灰色系で268がにぶい橙色である。4点ともに生駒西麓産である。271は大きく外反する口縁部を有する。有稜高杯で、杯部分がほぼ完存している。口縁径24.9cmで、口縁比49.8、口縁比32.1を測る。口径比および口縁比の数値から原田2003年分類の有稜高杯Eにあたり、古墳時代初頭前半(庄内式古相)に盛行するものと考えられる。杯部内外面は、風化のため不明瞭であるが、外面が縦方向、内面が横方向のヘラミガキ調整が行なわれている。272は逆台形の杯部に「ハ」の字に開く短い脚部が付く小形高杯である。口径13.3cm、器高



第142図 S D 556平断面図

9.0cm、裾部径9.0cmを測る。色調は灰黄色である。スコープで角閃石の含有が確認される。生駒西麓産である。273は中形鉢、274は小形鉢である。273は1/2が残存している。口径15.6cm、器高11.0cm、底径4.5cmを測る。底部付近のタキ調整を除けば全体にやや雑な作りで、体部外面にクラックが認められる。274は体部中位以下の資料である。底部の側面に工具ないしは指ナデの痕跡が認められる。2点共に生駒西麓産である。遺構の帰属時期としては、271の有稜高杯の特徴から古墳時代初頭前半(庄内式古相)が推定される。



S D 557～S D 568

第143図 S D 556出土遺物実測図

6調査区中央部のⅡ-23-9・10Ⅰ・J地区で検出した。12条(S D 557～S D 568)の小溝である。北東-南西に並行に伸びるものが4条(S D 559・S D 563・S D 564・S D 566)と、北北東-南南西に伸びるものが3条(S D 560・S D 561・S D 568)、北西-南東に伸びるものが4条(S D 557・S D 562・S D 565・S D 567)、さらに弧状に曲がるS D 558などがあり複雑に切り合っている。幅広のS D 558・S D 559を除けば幅0.3～0.5m、深さ0.06～0.15m程度のもので、断面の形状は皿状を呈する。埋土は、植物遺体を含む10YR4/1褐灰色褐灰色極細粒砂～細礫混シルトの単層である。遺物はS D 559・S D 565・S D 566から弥生時代後期後半に比定される弥生土器の小片が出土している。小溝群の性格としては、畑作に関連した畝立て溝が考えられる。なお、各溝の法量・詳細については第28表に示した。

第28表 S D 558～S D 568法量表(単位m)

| 遺構名 | 地区 | 全長 (検出長) | 幅 (最大) | 深さ | 埋土 | 出土遺物 |
|---------|------------|-------------|-----------|------|-----------------------|------|
| S D 557 | Ⅱ-23-10Ⅰ | 1.00 | 0.35 | 0.06 | 10YR4/1褐灰色極細粒砂～細礫混シルト | |
| S D 558 | Ⅱ-23-10Ⅰ-J | 8.00 | 0.70 | 0.15 | + | |
| S D 559 | Ⅱ-23-10Ⅰ | 4.50 | 0.80 | 0.15 | + | 弥生土器 |
| S D 560 | + | 3.00 | 0.50 | 0.06 | + | |
| S D 561 | Ⅱ-23-10Ⅰ | 1.50 | 0.35 | 0.06 | + | |
| S D 562 | Ⅱ-23-9-10Ⅰ | 3.00 | 0.40 | 0.06 | + | |

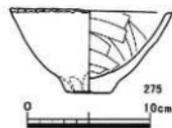
| 遺構名 | 地区 | 全長 (検出長) | 幅 (最大) | 深さ | 埋土 | 出土遺物 |
|---------|-------------|-------------|-----------|------|---------------------|------|
| S D 563 | II-23-10F-J | 5.50 | 0.50 | 0.06 | ◇ | |
| S D 564 | II-23-10J | 4.00 | 0.50 | 0.14 | 10YR4/1褐色凝結砂~細粒混シルト | |
| S D 565 | II-23-10F-J | 5.00 | 0.30 | 0.08 | ◇ | 弥生土器 |
| S D 566 | II-23-10J | 2.70 | 0.50 | 0.11 | ◇ | 弥生土器 |
| S D 567 | ◇ | 4.00 | 0.50 | 0.13 | ◇ | |
| S D 568 | ◇ | 1.50 | 0.45 | 0.15 | ◇ | |

S D 569～S D 588 (写真31、第144～149図、図版四八)

6調査区東部から7調査区西部にかけて検出した20条(S D 569～S D 588)の小溝群である。20条の溝のうち北東-南西方向に並行に伸びるものが13条、北西-南東に伸びるものが4条、東-西に伸びるものが1条、その他が2条である。規模は長さ1.1～7.3m、幅0.3～0.7m、深さ0.05～0.25mで、断面の形状は皿状あるいは逆台形である。埋土は植物遺体を含む2.5Y4/1黄灰色シルトおよび10Y4/1灰色粘土である。遺物はS D 571～S D 573、S D 576～S D 579、S D 581～S D 586、S D 588からそれぞれ弥生時代後期後半～古墳時代初期前半(庄内式古相)の土器類がまとまって出土している。これらの小溝群は、4調査区で検出されている小溝群と方向・形状が似ており、性格的には畑作に関連した畝立て溝と考えられるが、遺物が多く出土した溝については、7調査区の東部で検出した居住に関連した遺構との関わりが推定される。なお、各溝の法量・詳細については第29表に示した。

S D 576出土遺物 (第144図)

弥生時代後期後半に比定される土器類が少量出土している。鉢1点(275)を図化した。275は、逆台形の体部に平底の底部が付く小形鉢である。ほぼ完形で口径13.2cm、器高6.8cm、底径3.8cmを測る。口縁端部は未完成形で擬口縁を呈している。色調は褐灰色である。生駒西麓産である。



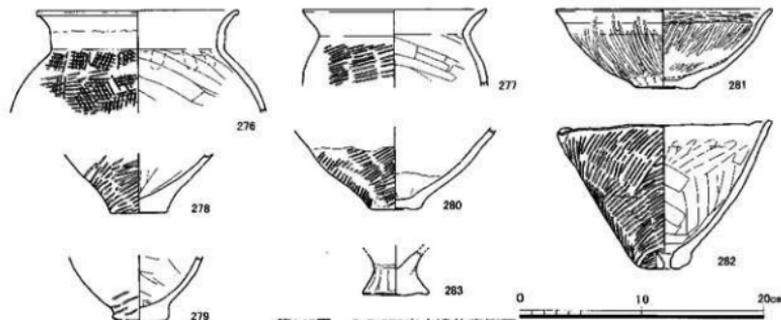
第144図 S D 576出土遺物

S D 577出土遺物 (第145図、図版八〇)

弥生時代後期後半に比定される土器類が少量出土しているが、大半が小破片である。8点(276～283)を図化した。内訳は甕5点(276～280)、鉢1点(281)、有孔鉢1点(282)、製塩土器1点(283)である。276・277は甕の口縁部の小破片である。口縁部が「く」の字に屈曲する277と上部に短く伸びた後外反する276がある。276の体部外面はタタキ調整をタテハケにより消している。共に生駒西麓産である。278～280は甕底部である。底部の形状は突出しない278・280と突出する279がある。底部裏面は280がドーナツ底、278・279は平底である。278・280が生駒西麓産、279は非生駒西麓産である。281は小形鉢で約1/2が残存している。口径12.5cm、器高6.5cm、底径5.0cmを測る。底部は小さく突出するもので、裏面はドーナツ底である。色調は灰白色で僅かに角閃石を含む。282は有孔鉢で完形近くに復元が可能である。口径



写真31 S D 577検出状況(東から)



第145図 S D577出土遺物実測図

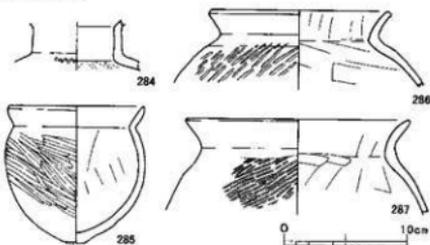
17.3cm、器高12.0cm、底径4.3cmを測る。口縁部分の成形が粗雑で口縁端部は波状を呈する。裸眼で確認できる大粒の角閃石が多量に含まれている。生駒西麓産である。283は逆三角錐形の体部に脚部が付く製塩土器の脚部と推定される。底径5.5cmを測る。色調は淡褐色で、胎土に1mm大の長石が散見される。

S D578出土遺物 (第146図、図版八一)

弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される土器類が少量出土している。2点(284・285)を図化した。284は二重口縁帯の頸部付近の小片である。体部外面の上位にヘラ先による山形文が施文されている。285は弥生時代後期後半に成立した短頸直口壺の系譜を引くものと考えられる。ほぼ完形に復元が可能で口径11.0cm、器高11.3cm、底径1.5cmを測る。口縁部は斜上方に短く伸びる。体部は張りの弱い球形で、小さな尖り気味底部を持つ。体部外面の調整はナデを多用している。色調は橙色で胎土には長石・チャートの小粒が多量に含まれている。2点共に古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される。

S D581出土遺物 (第146図、図版八一)

弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される土器類が少量出土している。2点(286・287)を図化した。286・287はV様式系壺の小破片である。共に口縁部の1/4程度が残存している。286は「く」の字に屈曲し端部が内傾する面を持つ。287は緩やかに外反する口縁部で端部は丸く終る。体部外面のタキ調整は右上がりでありタキの単位は286が2本/cm、287は3本/cmを測る。体部内面は板ナデが行われている。色調は共に赤橙色である。生駒西麓産である。

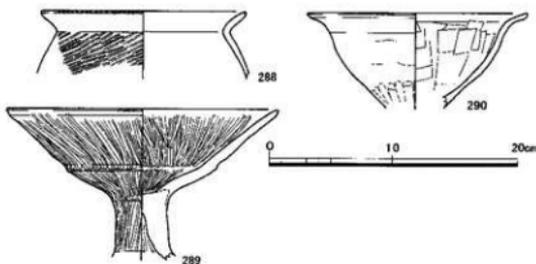


第146図 S D578 (284・285)、S D581 (286・287) 出土遺物実測図

S D582出土遺物 (第147図、図版八一)

弥生時代後期後半に比定される土器類が少量出土している。3点(288～290)を図化した。288は甕の小破片である。口縁部の約1/4が残存している。復元口径16.5cmを測る。口縁部は「く」

の字に屈曲するもので、端面にキザミ目が施されている。体部外面のタタキ調整は右上がりでありタタキの単位は3本/cmである。体部内面の調整は風化のため不明瞭である。色調は褐灰色で胎土中に0.1~1mmの長石・角閃石が多量に含まれている。生駒西麓産である。

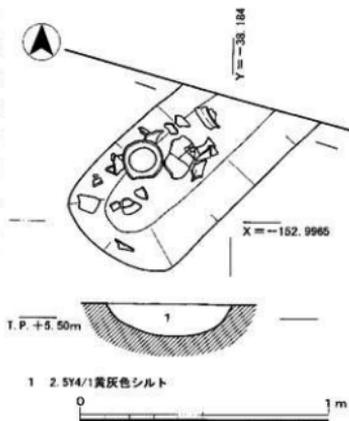


第147図 S D582出土遺物実測図

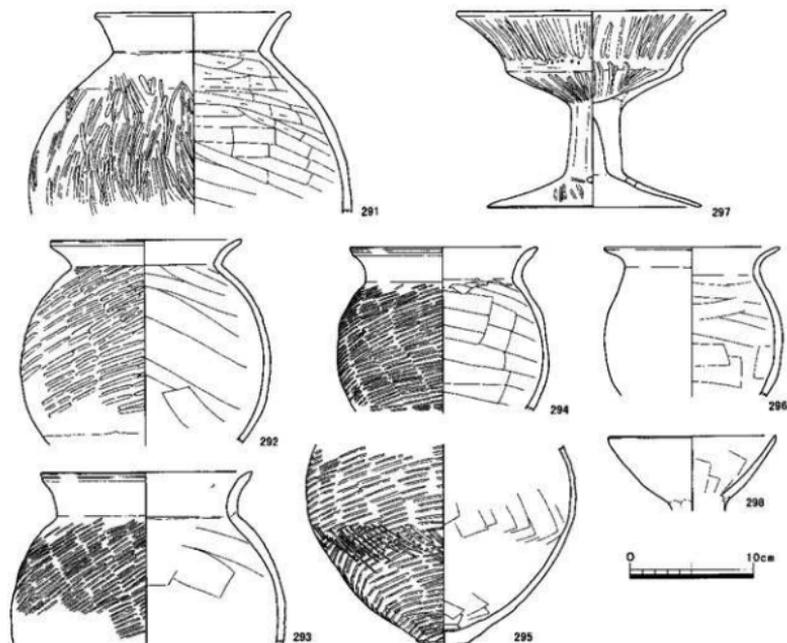
289は有稜高杯である。杯部は明瞭な稜を形成した後、斜上方に伸びるもので口径22.0cmを測る。杯部内外面および脚柱部外面は縦方向の密なヘラミガキ調整が行なわれている。脚柱部は直線的に伸びるもので中空である。口稜比54.5、口縁比31.8を測る。生駒西麓産である。原田2003年分類の有稜高杯D₂にあたり、数値や形態から中河内地域における弥生時代後期後半の最も新しい様相3にあたる。290は中形の鉢である。底部を欠き、約1/2が残存している。復元口径17.6cmを測る。色調は淡褐色である。生駒西麓産である。

S D583出土遺物 (第148・149図、図版八一・八二)

弥生時代後期後半に比定される土器類がコンテナ1箱程度出土している。8点(291~298)を図化した。内訳は壺1点(291)、甕5点(292~296)、高杯1点(297)、鉢1点(298)である。291は広口壺で、体部中位より上部が残存している。口径15.3cmを測る。体部外面の調整はヘラミガキが多用される他、体部内面では上半ヘラケズリ、中位に板ナデ調整が行なわれている。生駒西麓産である。292~296は甕である。体部外面調整ではタタキ調整を行なう292~295とナデ調整を行なう296がある。タタキ原体幅は3本/cmを測る293・294と太目で2本/cmの292・295がある。全ての体部外面に煤の付着が認められる。5点共に生駒西麓産である。297は有稜高杯であり、図上で完全に復元することが可能である。量法は、口径21.5cm、器高16.0cm、裾部径17.5cmを測る。杯部内外面は縦方向のミガキを多用している。脚柱部は中空でスカシ孔は4孔穿たれている。色調は橙色で、胎土中に長石・石英・角閃石の小粒が多量に含まれている。生駒西麓産である。なお、口稜比66.5、口縁比27.9で、原田2003年分類の有稜高杯D₁にあたり、弥生時代後期後半新相の様相3にあたる。298は小形の鉢で底部を欠く。口径13.5cmを測る。弥生時代後期後半に比定されよう。



第148図 S D583断面図



第149図 S D 583出土遺物実測図

第29表 S D 569～S D 588法量表 (単位m)

| 遺構名 | 地区 | 全長 (検出長) | 幅 (最大) | 深さ | 埋土 | 出土遺物 |
|---------|------------------------|-------------|-----------|------|---------------|---------------|
| S D 569 | II-24-10A | 3.90 | 0.30 | 0.13 | 2.5Y4/1黄灰色シルト | |
| S D 570 | 〃 | 2.30 | 0.70 | 0.19 | 〃 | |
| S D 571 | 〃 | 2.80 | 0.70 | 0.18 | 〃 | 弥生土器 |
| S D 572 | 〃 | 3.50 | 0.60 | 0.23 | 〃 | 弥生土器 |
| S D 573 | 〃 | 4.50 | 0.50 | 0.25 | 〃 | 弥生土器 |
| S D 574 | 〃 | 1.40 | 0.40 | 0.08 | 〃 | |
| S D 575 | II-24-10A-B | 5.00 | 0.50 | 0.11 | 〃 | |
| S D 576 | II-24-10B | 1.50 | 0.30 | 0.09 | 〃 | 弥生土器(275) |
| S D 577 | II-24-10A-B | 6.00 | 0.60 | 0.23 | 〃 | 弥生土器(276～283) |
| S D 578 | II-24-10A-B IV-4-1A | 7.30 | 0.50 | 0.15 | 〃 | 土師器(284・285) |
| S D 579 | II-24-10B IV-4-1B | 7.20 | 0.40 | 0.13 | 〃 | 弥生土器 |
| S D 580 | 〃 | 2.70 | 0.40 | 0.06 | 〃 | |
| S D 581 | IV-4-1B | 2.00 | 0.60 | 0.14 | 〃 | 弥生土器(286・287) |
| S D 582 | 〃 | 2.10 | 0.40 | 0.10 | 〃 | 弥生土器(288～290) |
| S D 583 | II-24-10B | 1.10 | 0.60 | 0.13 | 〃 | 弥生土器(291～298) |
| S D 584 | II-24-10B-C | 3.00 | 0.50 | 0.14 | 10Y4/1灰色粘土 | 弥生土器 |

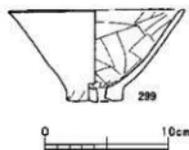
| 遺構名 | 地区 | 全長 (検出長) | 幅 (最大) | 深さ | 埋土 | 出土遺物 |
|---------|------------------------|-------------|-----------|------|------------|------|
| S D 585 | VI-4-1B-C | 2.00 | 0.50 | 0.10 | 10Y4/1灰色粘土 | 弥生土器 |
| S D 586 | 〃 | 3.00 | 0.50 | 0.19 | 〃 | 弥生土器 |
| S D 587 | II-24-10C VI-4-1B-C | 7.00 | 0.50 | 0.17 | 〃 | |
| S D 588 | VI-4-1C | 3.80 | 0.40 | 0.05 | 〃 | 弥生土器 |

S D 589

7調査区東部のVI-4-1D地区で検出した。東-西に伸びるもので、東端がS D 590に切られている。検出長1.5m、幅0.8m、深さ0.08mを測る。埋土は10Y4/1灰色粘土である。遺物は出土していない。

S D 590 (第150図、図版八二)

7調査区東部のVI-4-1D地区で検出した。北東-南西に伸びるもので、西肩がS D 589を切っている。検出長0.7m、幅0.8m、深さ0.06mを測る。埋土は10Y4/1灰色粗粒砂泥粘土である。遺物は弥生時代後期後半に比定される土器類が極少量出土した。有孔鉢1点(299)を図化した。299は完形品である。口径14.2cm、器高7.4cm、底径4.5cmを測る。体部外面の壁面調整はナデによるものであるが、口縁部付近はやや雑でクラックが認められる他、端部は未成形のまま終る。底部は突出する平底で、中心からずれた位置に径0.6cmを測る孔が上から下に向かって穿たれている。色調は褐灰色である。牛駒西甕産である。



第150図 S D 590出土遺物実測図

S D 591

7調査区東部のVI-4-1D地区で検出した。北東-南西に伸びるもので、東端がS K 507、西端がS D 590に切られている。検出長0.8m、幅0.4m、深さ0.07mを測る。埋土は10Y4/1灰色粘土である。遺物は出土していない。

S D 592

7調査区東部のVI-4-1D地区で検出した。南-北に伸びるもので、北端はS K 507に切られている。検出長0.6m、幅0.8m、深さ0.14mを測る。埋土は10Y4/1灰色粗粒砂泥粘土である。遺物は弥生時代後期後半に比定される土器片が極少量出土している。

S D 593

7調査区東部のVI-4-1D地区で検出した。南東-北西に伸びる溝である。本遺構の中央部分はS K 507に、南部分はS D 594に切られているため全容は不明である。検出長4.0m、幅0.7m、深さ0.12mを測る。断面は浅い逆台形を呈し、埋土は10Y4/1灰色粗粒砂泥シルトである。遺物は弥生時代後期後半に比定される土器片が極少量出土している。

S D 594

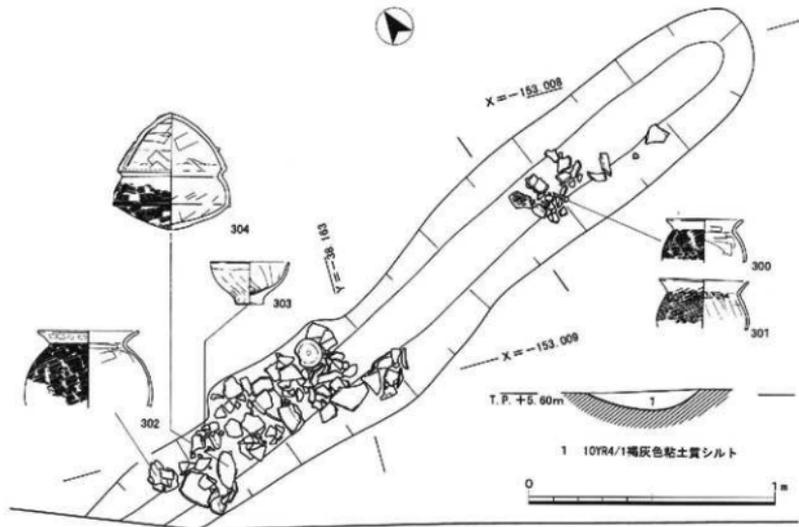
7調査区東部のVI-4-1D地区で検出した。北東-南西に直線的に伸びる。S K 508・S D 593・S D 595・S D 597を切り、S D 5102に切られている。検出長3.0m、幅0.5m、深さ0.07mを測る。浅い逆台形を呈し、埋土は10Y4/1灰色粘土質シルトである。遺物は弥生時代後期後半に比定される土器類が少量出土している。

S D 595

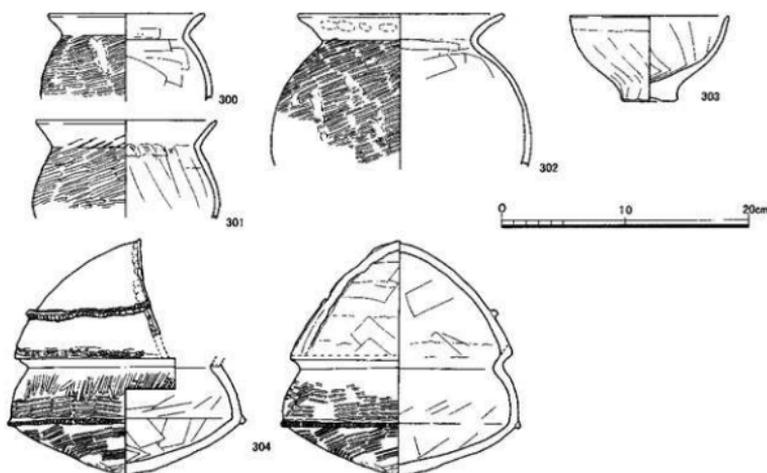
7調査区東部のVI-4-1D地区で検出した。南-北に伸びるもので、北端がS D 594、南端がS D 596に切られている。検出長0.5m、幅1.0m、深さ0.09mを測る。埋土は10Y4/1灰色粗粒砂混シルトである。遺物は弥生時代後期後半に比定される土器片が極少量出土している。

S D 596 (第151・152図、図版四八・八二・八三)

7調査区東部のVI-4-1D地区で検出した。北東-南西に伸びるもので、S D 597・S D 599・S D 5102を切っている。検出長3.0m、幅0.5m、深さ0.07mを測る。埋土は10Y4/1褐灰色粘土質シルトである。遺物は弥生時代後期後半に比定される土器類が少量出土している。5点(300~304)を図化した。300~302は甕である。3点共に口縁部は「く」の字に屈曲し端部は丸く終る。体部外面の調整は右上がりのタタキで、301は口縁部におよぶ。色調は300・301が赤褐色、302が褐灰色である。303は小形鉢である。口径12.8cm、器高7.0cm、底径4.5cmを測る。底部は突出した平底で裏面はドーナツ底である。色調は褐灰色。胎土中に0.5~2mm大のチャート、角閃石を含む。生駒西麓産である。304は手培形土器である。覆部と体部の一部を欠く。器高19.2cm、覆部高9.2cm、覆部最大幅17.6cm、体部高10.0cm、体部最大幅19.3cmを測る。体部下半は扁平な逆三角形形状で底部はヘラケズリにより成形されているが雑で平坦な部分が無い。体部上半は体部下半との境に刻み目を持つ突帯部分から内湾して伸びた後、外反している。体部外面は右上がりのタタキ調整の後、上半ではヘラミガキを施す。覆部は三角形形状を呈しており、覆部の中位よりやや下部に上下に刺突文を施した突帯が巡る他、覆部下半に刺突文が部分的に施されている。色調は淡橙色であ



第151図 S D 596平面図



第152図 S D 596出土遺物実測図

る。胎土中に0.1~2mm大の長石、チャートが散見される他、スコープで角閃石の含有が認められる。生駒西麓産。遺構の帰属時期は弥生時代後期後半が推定される。

S D 597

7調査区東部のVI-4-1D地区で検出した。S D 599と約1mの間隔を有して並行に伸びる溝である。北端をS D 594に、中央部分をS D 596に切られている。検出部分で検出長2.0m、幅0.5m、深さ0.09mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は10Y4/1灰色粗粒砂混シルトである。遺物は弥生時代後期後半に比定される土器片が極少量出土している。

S D 598

7調査区南東隅のVI-4-1D地区で検出した。北東-南西に伸びるもので、S D 597・S D 599を切っている。検出長1.5m、幅0.5m、深さ0.12mを測る。断面は「V」字形を呈し、埋土は10Y4/1灰色粗粒砂の単一層である。遺物は弥生時代後期後半に比定される土器片が少量出土している。

S D 599

7調査区東部のVI-4-1D地区で検出した。南-北に伸びる溝で、北端をS D 596に、南端をS D 598に切られている。検出部分で検出長さ0.7m、幅0.4m、深さ0.08mを測る。断面は浅い碗形を呈し、埋土は10Y4/1灰色粘土シルトである。遺物は弥生時代後期後半に比定される土器片が極少量出土している。

S D 5100

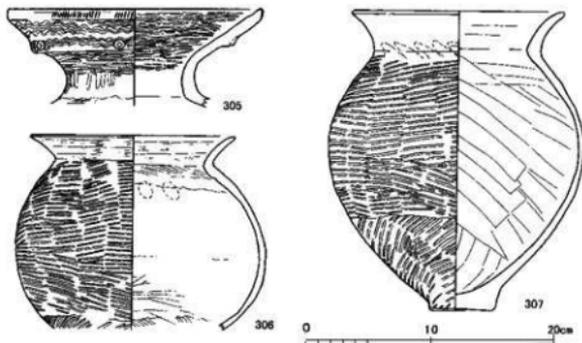
7調査区東部のVI-4-1D地区で検出した。南-北に伸びる溝である。北端をS D 5102に、中央部分をS D 5101に切られている。検出部分で検出長1.8m、幅0.2m、深さ0.04mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は10Y4/1灰色粗粒砂混粘土の単一層である。遺物は出土していない。

S D5101

7調査区東部のVI-4-1D地区で検出した。南西-北東に伸びる溝である。北端がS D5102に切られている。検出部分で検出長1.8m、幅0.3m、深さ0.05mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は10Y4/1灰色粗粒砂粘粘土の単一層である。遺物は弥生時代後期後半に比定される土器片が極少量出土している。

S D5102 (第153図、図版八三)

7調査区東部のVI-4-1D地区で検出した。南-北に伸びる溝である。南端がS D596に切られている他、S D594・S D5101・S D5103を切っている。検出部分で検出長4.5m、幅0.9m、深さ0.12mを測る。断面は浅い皿

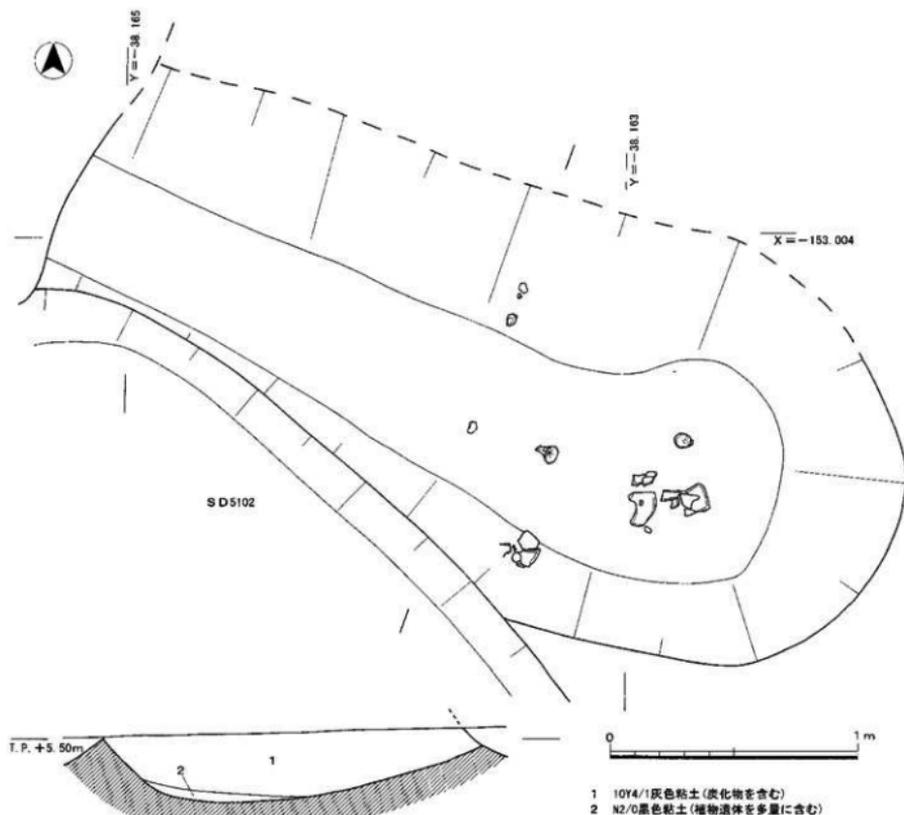


第153図 S D5102出土遺物実測図

状を呈し、埋土は10Y4/1灰色粘土(7.5Y4/1灰色粘土質シルトを含む)である。遺物は、弥生時代後期後半に比定される土器類などが少量出土している。3点(305~307)を図化した。305は二重口縁壺である。口頸部がほぼ完存している。口径20.0cm、頸部径10.1cmを測る。口縁端面外面に刻み目、口縁部外面に2条にわたる雑な波状文と下半に竹管押円形浮文が施文されているが、1個単独の部分と2個一対の部分がある。色調は褐灰色。胎土中に1~2mm大の長石、角閃石が多く含まれている。生駒西麓産。306・307は甕である。306は底部を欠く。307は全体の1/2が残存している。306は口径16.4cmを測る。307は口径16.8cm、器高24.8cmを測る。色調は306が淡橙色、307が淡褐灰色である。共に生駒西麓産である。遺構の帰属時期は弥生時代後期後半である。

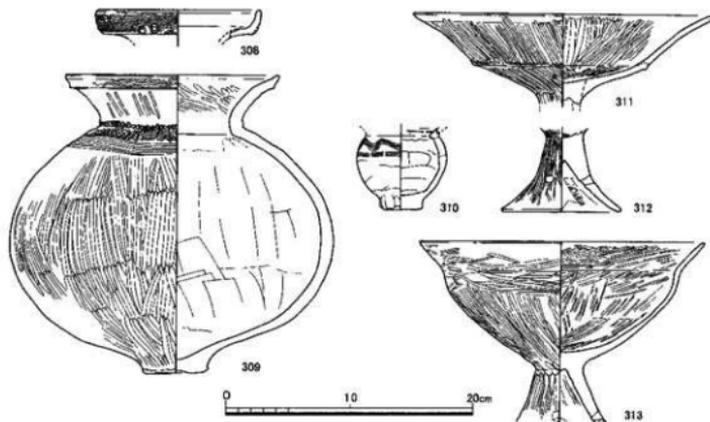
S D5103 (第154・155図、図版八三)

7調査区北東部のVI-4-1D地区で検出した。遺構の大部分は401号墳の北周溝に切られているため全容は不明である。検出部分で検出長8.0m、幅1.5m、深さ0.27mを測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は2層から成り、上層が1層10Y4/1灰色粘土、下層が2層N2/0黒色粘土である。遺物は1層から古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される土器類が少量出土している。6点(308~313)を図化した。308は二重口縁壺の口縁部の小破片である。復元口径13.0cmを測る。口縁部外面に雑な波状文と下部に貼り付けの円形浮文がある。火熱を受けており煤の付着と器面剥離が著しい。色調は淡褐灰色。胎土は粗く1~2mm大の長石が散見される他、スコープにより角閃石の含有が認められる。生駒西麓産。309は口縁部に加鉤がある広口壺である。口径16.9cm、器高25.1cm、体部最大径25.8cm、底径5.2cmを測る。扁球形を呈する体部上位に5本を単位とする波状文と6本を単位とする直線文が施文されている他、頸部の下位に刺突文が巡る。外反して斜上方に伸びる口縁部の上位に幅広の端面を形成し、その部分に波状文が施文されている。底部



第154図 S D5103 平面断面図

は突出する平底で裏面はドーナツ底を呈する。色調は褐灰色。生駒西麓産。310は小形の壺で口縁部を欠く。体部上位に波状文と直線文が施文されている。色調は淡褐灰色。生駒西麓産である。311は有稜高杯である。杯部の1/2が残存している。口径24.0cmを測る。全体に丁寧な作りで杯部内外面ともに縦方向のヘラミガキを多用している。色調は淡橙色。胎土中に1~2mm大の長石、チャートが散見される他、スコープにより角閃石の含有が認められる。口稜比58.3、口縁比29.2の数値を示す。原田2003年分類の有稜高杯Eにあたり、古墳時代初頭前半(庄内式古相)に盛行する高杯の特徴を有している。312は高杯の脚部である。やや小振りのもので、裾部径9.3cmを測る。スカシ孔3個。色調は淡褐色。生駒西麓産。313は脚台付きの鉢である。杯部は1/3が残存している。復元口径22.8cm、杯部高10.0cmを測る。体部は内外面共に口縁部が横方向、体部が縦方

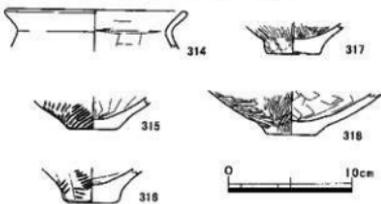


第155図 S D 5103出土遺物実測図

向のヘラミガキが多用されている。脚部は裾部を欠く。柱状部は外面が縦方向のヘラミガキ、内面にシボリ目を認める。スカシ孔は4個。色調は褐灰色。生駒西麓産。遺構の帰属時期は古墳時代初頭前半(庄内式古相)が考えられる。

S D 5104～S D 5131 (第156図)

8調査区東部から9調査区のほぼ全域で検出した。28条の小溝である。溝の伸びる方向としては南-北、北東-南西、北西-南東の他、屈折して途中から方向を変えるものがある。各溝間の切り合い関係等については、特に9調査区内で検出したものについて、識別し難いところがある。各小溝の法量は、幅0.15～0.74m、深さ0.03～0.11mを測る。断面の形状は、皿形あるいは碗形を呈する。埋土は、暗灰色系の粘土質シルトの単一層がほとんどで、一部炭化物を含んでいるものもある。遺物は、各溝内から弥生時代後期後半に比定される土器類が出土している。出土土器の器種は主として壺、壺の口縁部や底部の小破片が中心である。そのうち、図化し得た遺物が出土したものはS D 5112(314)、S D 5117(315)、S D 5120(317)、S D 5123(316)、S D 512(318)である。314～316は甕で、314が口縁部、315・316が底部である。314の復元口径は14.7cmを測る。色調は314・315が褐灰色、316が黒褐色である。3点ともに生駒西麓産である。317・318は壺の底部である。共に底部が完存しており、底径は317が4.5cm、318が4.0cmを測る。色調は共に淡褐灰色。生駒西麓産である。なお、各溝の法量・詳細については第30表に示した。



第156図 S D 5112(314)、S D 5117(315)、S D 5120(317)、S D 5123(316)、S D 512(318)出土遺物実測図

第30表 S D5104～S D5131法量表(単位m)

| 遺構名 | 地区 | 全長 (検出長) | 幅 (最大) | 深さ | 埋 土 | 出土遺物 |
|---------|---------------|-------------|-----------|------|------------------|-----------|
| S D5104 | Ⅵ-4-2F-G | 8.70 | 0.30 | 0.10 | 10YR4/1灰色シルト | |
| S D5105 | Ⅵ-4-2G | 3.00 | 0.60 | 0.05 | ＊ | |
| S D5106 | ＊ | 3.00 | 0.30 | 0.05 | ＊ | |
| S D5107 | ＊ | 1.50 | 0.30 | 0.05 | ＊ | |
| S D5108 | ＊ | 5.80 | 0.30 | 0.05 | ＊ | |
| S D5109 | Ⅵ-4-2G-H | 5.80 | 0.50 | 0.07 | ＊ | |
| S D5110 | Ⅵ-4-2H-I | 8.40 | 0.70 | 0.05 | 10YR3/1暗灰色粘土質シルト | |
| S D5111 | Ⅵ-4-23H | 3.10 | 0.40 | 0.06 | 5B2/1青黒色粘土質シルト | |
| S D5112 | Ⅵ-4-3H | 2.70 | 0.36 | 0.05 | ＊ | 弥生土器(314) |
| S D5113 | ＊ | 3.30 | 0.40 | 0.11 | ＊ | 弥生土器 |
| S D5114 | ＊ | 3.40 | 0.65 | 0.03 | ＊ | 弥生土器 |
| S D5115 | Ⅵ-4-23I | 4.60 | 0.40 | 0.06 | ＊ | 弥生土器 |
| S D5116 | Ⅵ-4-3I | 5.00 | 0.48 | 0.08 | ＊ | 弥生土器 |
| S D5117 | ＊ | 6.60 | 0.60 | 0.06 | ＊ | 弥生土器(315) |
| S D5118 | ＊ | 2.80 | 0.32 | 0.05 | N3/0暗灰色粘土質シルト | 弥生土器 |
| S D5119 | ＊ | 5.80 | 0.51 | 0.06 | ＊ | |
| S D5120 | ＊ | 5.50 | 0.40 | 0.04 | ＊ | 弥生土器(317) |
| S D5121 | Ⅵ-4-3I-J | 5.80 | 0.40 | 0.09 | ＊ | |
| S D5122 | Ⅵ-4-3I | 1.60 | 0.25 | 0.03 | 5B4/1暗青灰色粘土質シルト | |
| S D5123 | Ⅵ-4-3J | 6.20 | 0.74 | 0.08 | ＊ | 弥生土器(316) |
| S D5124 | ＊ | 8.30 | 0.38 | 0.09 | ＊ | 弥生土器 |
| S D5125 | ＊ | 1.80 | 0.30 | 0.06 | ＊ | |
| S D5126 | ＊ | 1.80 | 0.15 | 0.09 | N3/0暗灰色粘土質シルト | 弥生土器 |
| S D5127 | ＊ | 6.50 | 0.62 | 0.08 | ＊ | |
| S D5128 | Ⅵ-4-3J-N-3-3A | 9.90 | 0.60 | 0.11 | ＊ | 弥生土器(318) |
| S D5129 | Ⅵ-4-3J | 9.70 | 0.60 | 0.10 | ＊ | |
| S D5130 | ＊ | 3.20 | 0.46 | 0.11 | ＊ | |
| S D5131 | Ⅵ-4-3J-N-3-3A | 2.20 | 0.40 | 0.06 | ＊ | |

小穴(S P)

S P 501

3調査区北部のⅥ-22-7F地区で検出した。平面形状は円形を呈する。法量は、径0.35m、深さ0.17mを測る。断面形状は碗形で、埋土はN3/0暗灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

S P 502

3調査区北部のⅥ-22-7F地区で検出した。S P 501から南東約1m地点に位置する。西部の一部がS D520によって切られるが、形状および埋土についてはS P 501と同一である。法量は、径0.30～0.32m、深さ0.09mを測る。遺物は出土していない。

S P 503

7調査区南部のⅥ-4-1C地区で検出した。平面形は円形で径約0.3mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は10Y4/1灰色粘土の単一層である。遺物は出土していない。

落ち込み (SO)

SO501 (第157図、図版八三)

3調査区のⅡ-22-7・8E~G地区で検出した。逆「コ」の字状を呈する遺構で、調査区の約1/3の広がりを持つ。小溝群との切り合い関係ではその下層にあたる。検出部分での規模は、東西幅15.8、南北幅13.0m、深さ0.05~0.2mを測る。埋土は5G4/1暗緑灰色~5G2/1緑黒色粘土質シルトが堆積する。埋土内からは、弥生時代後期後半に比定される土器類が少量出土している。3点(319~321)を図化した。319は壺の口縁部の小破片である。復元口径16.8cmを測る。色調は淡灰色。320は台付き壺でほぼ完形である。扁球形の体部から緩やかに外反する口縁部を持つ壺に「ハ」の字状の形態を持つ脚部が付く。口径15.5cm、器高20.3cm、脚部高5.0cm、裾部径9.7cmを測る。器面調整は体部外面の上位にタキ調整を施す、以下はハケ調整が多用されている。体部中位を中心に煤の付着が認められる。色調は淡褐灰色である。生駒西麓産である。321は壺底部である。底部は突出した平底で裏面はドーナツ底である。体部の調整は外面がヘラミガキ、内面は板ナデである。色調は褐灰色である。生駒西麓産である。遺構構築時期は弥生時代後期である。



第157図 SO501出土遺物実測図

自然河川 (NR)

NR501 (写真32)

10調査区西部のⅥ-5-3・4A地区で検出した。西屑は調査区外に至る。規模は検出長6.0m、幅2.2m~3.8m、深さ0.2m~0.6mを測る。埋土はN8/O灰白色細粒砂が堆積する。さらに河川底には、幅0.8m前後、深さ0.1mを測る溝状のものが並行して伸びている。埋土は10BG7/1明青灰色極細粒砂が堆積する。遺物は出土していない。



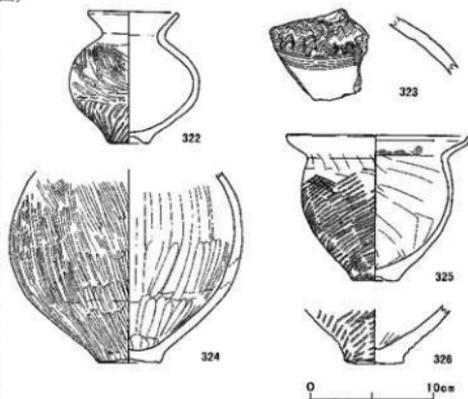
写真32 NR501検出状況(南から)



写真33 NR502検出状況(南西から)

NR502 (写真33、第158図、図版八四)

10調査区中央よりやや東寄りのVI-5-4 B・C、5 C地区で検出した。南西-北東に伸びる河川で、幅9.0m、深さは最深部で1.2m前後を測る。埋土については、概ね上層の青灰色系のシルトと下層の灰白色系の細粒砂～粗粒砂の2種に分層され、さらに最下層部分においてはラミナ状に薄く植物遺体が堆積する。遺物は下層内から、弥生時代後期後半に比定される土器類、サヌカイト片が少量出土している。5点(322～326)を図化した。322は小形の広口壺で口縁部の一部を欠く。口径



第158図 NR502出土遺物実測図

最大径10.4cmを測る。底部は突出した平底で裏面はドーナツ底である。体部外面の器面調整は下位がタタキ、上位がヘラミガキとハケを施す。色調は褐灰色。胎土中に0.5～2mm大の長石を多く含む。生駒西麓産。323は二重口緑壺の体部片と推定される。残存部分で波状文2条と直線文1条が認められる。色調は褐灰色。生駒西麓産である。324は中形の壺体部以下の資料である。底部は突出した平底で裏面は窪み底である。体部外面は縦方向の密なヘラミガキ、体部内面は縦方向の指ナデが施されている。色調は淡褐灰色。胎土は0.5mm大の長石が散見される程度の精良な粘土が使用されている。生駒西麓産。325は小形の甕である。口径14.8cm、器高11.9cm、底径3.6cmを測る。底部は突出が小さい平底で裏面はドーナツ底を呈する。326は甕の底部である。底径4.9cmを測る。底部内面に炭化物の付着が認められる。325・326共に色調は褐灰色で、胎土は生駒西麓産である。遺構の帰属時期は弥生時代後期後半である。

・第6面〔弥生時代後期前半〕(第159・160図、図版四九～五一、八四)

調査地中央部の8・9調査区、11～13調査区で検出した。第Ⅴ層上面(T.P.+5.6～5.0m)が検出面である。湿地状地形に展開する遺構群で、検出した遺構には小穴6個(S P 601～S P 606)、自然河川1条(N R 601)、足跡群8箇所(足跡群601～足跡群608)がある。

小穴(S P)

S P 601～S P 606 (写真34)

8調査区西部のⅥ-4-1・2E地区で検出した6個の小穴である。平面的な広がりには散発的であるが、S P 301とS P 302のように2個の小穴が接近した位置に構築されている。平面形状は全て円形で、規模は0.15～0.2m、深さ0.03～0.41mを測る。柱根はS P 603(径0.1m、長さ0.14m)とS P 606(径0.12m、長さ0.52m)から検出されている。なお、S P 302とS P 304、S P 304とS P 306の柱間が2.8m前後を測る。このため掘立柱建物を構成した柱穴であるとも考えられるが、小穴群より東部が無数の足跡を残す湿地状の地形であり、また明瞭な包含層が形成されていないことから、湿地内に設けられた歩行のための板橋を支えるための土台となった柱であった可能性がある。小穴の法量・詳細は第31表に示した。



写真34 8調査区 S P 601～S P 606検出状況(南から)

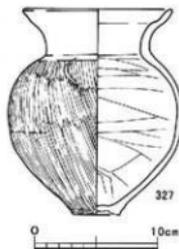
第31表 S P 601～S P 606法量表(単位m)

| 遺構名 | 地区 | 平面形 | 長径 | 短径 | 深さ | 埋土 | 出土遺物 |
|---------|--------|-----|------|------|------|---------------------------------|------|
| S P 601 | Ⅵ-4-1E | 円形 | 0.18 | 0.18 | 0.05 | 7.5Y4/3オリブ灰色極細粒砂 | |
| S P 602 | ◇ | ◇ | 0.15 | 0.15 | 0.03 | 7.5Y4/2灰オリブ色シルト | |
| S P 603 | ◇ | ◇ | 0.18 | 0.18 | 0.14 | 7.5Y4/1灰色粘土 | |
| S P 604 | ◇ | ◇ | 0.20 | 0.20 | 0.20 | 10Y4/1灰色粗粒砂 10Y4/1灰色シルト | |
| S P 605 | Ⅵ-4-2E | ◇ | 0.20 | 0.20 | 0.15 | 7.5Y3/1オリブ黒色極細粒砂 7.5Y4/1灰色粘土 | |
| S P 606 | ◇ | ◇ | 0.17 | 0.17 | 0.41 | 7.5Y4/2灰オリブ色シルト | |

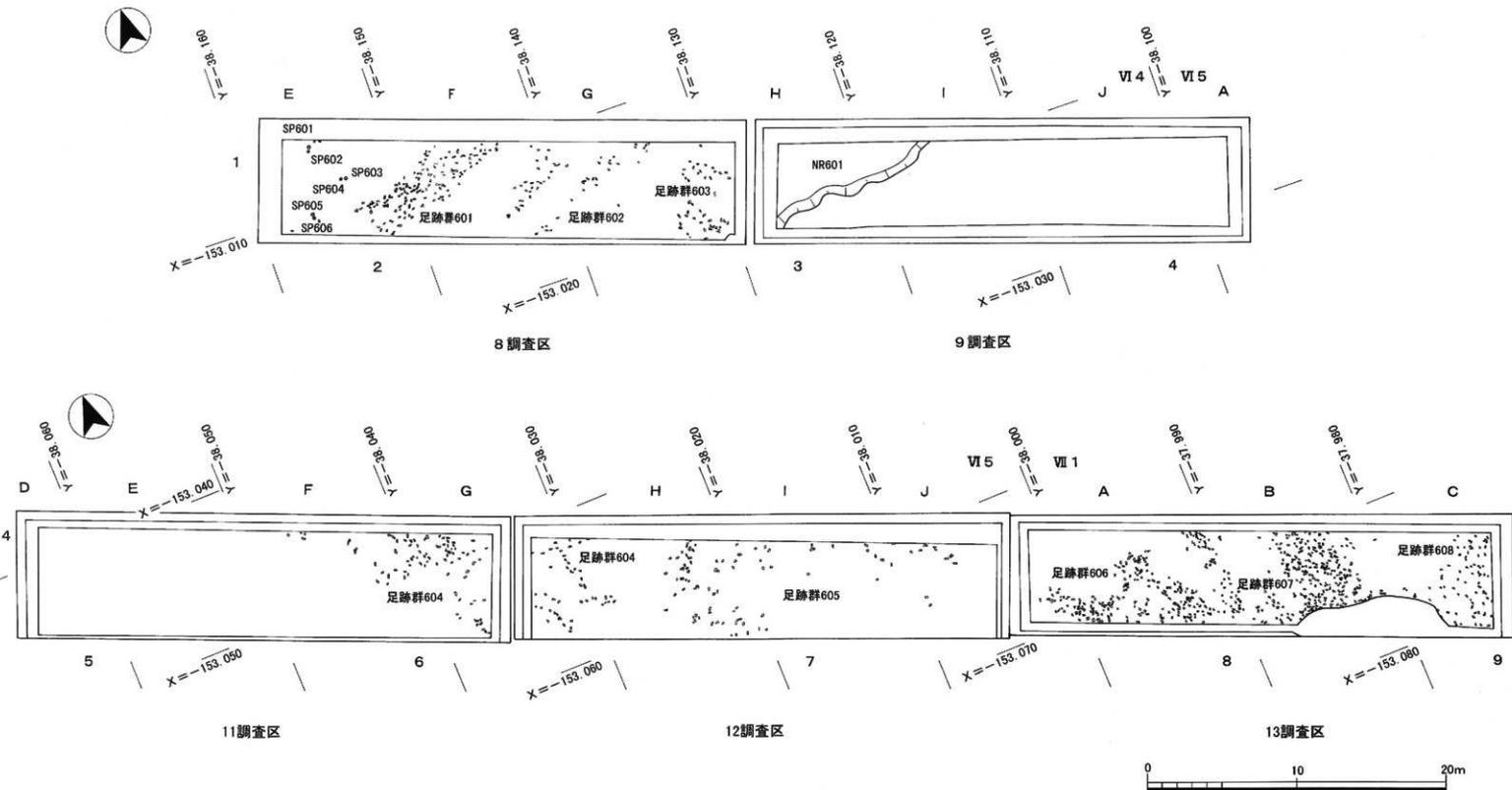
自然河川(N R)

N R 601 (第159図、図版五一・八四)

9調査区西部のⅥ-4-2・3H・I地区で検出した。河川の南岸のみの検出で、北岸については8調査区でも検出されていないことから、おそらく8・9調査区の境付近にあったものと推定される。検出部分で長さ12.0m、最大幅5.0m、深さ0.5～0.6mを測る。埋土は上層がN8/0灰白色細粒砂～中粒砂、下層がN8/0灰白色極細粒砂とN6/0灰色シルトの互層で構成されている。また、上層には斜行ラミナが顕著に見られ、下層には植物遺体の薄層が数条観察される。遺物は弥生時代後期前半に比定される中形の広口壺1点(327)が出



第159図 N R 601出土遺物実測図



第160図 第6面平面図 (8調査区・9調査区・11調査区~13調査区)

土している。327は底部表面の一部を欠く以外はほぼ完形に復元可能である。受口状の口縁部を有する広口壺で体部はやや肩の張る球形である。口径11.7cm、器高17.9cm、体部最大径14.2cm、底径3.9cmを測る。体部上半に「く」の字状に記されたヘラ記号が施されている。色調は褐色色。生駒西麓産である。

足跡群（足跡群）

8・11～13調査区の第Ⅴ層上面でヒトの足跡を検出した。足跡は、分布範囲や分布内での粗密があるが便宜上8グループ(足跡群601～足跡群608)に区分している。足跡は一様に上層に堆積するシルト～極細粒砂を主体とする第Ⅴ層の河川堆積物(層厚0.4～1.25m)で充填されている。足跡群の中には、一定歩行の方向が明瞭で大人、子供の区別ができるものがある。足跡群の性格としては、水田に関連した遺構が認められないことや、一部荷重痕(ロードキャスト)といった堆積構造が見られることから自然河川周辺の湿地帯に動植物の狩猟・採集のために侵入した人間活動の痕跡と理解される。

足跡群601

8調査区西～中央部のⅥ-4-1F、2E・F地区のT.P.+4.9～5.1m付近で検出した。総数は163個。北東～南西の歩行方向が推定される。

足跡群602

8調査区中央部のⅥ-4-2F・G地区のT.P.+4.9～5.0m付近で検出した。総数は71個。分布範囲は中央部を挟んで二分されている。北東～南西の歩行方向が推定される。

足跡群603(写真35)

8調査区東部のⅥ-4-2G地区のT.P.+4.7～4.8m付近で検出した。総数は50個。南～北に分布を認める。足跡群301や足跡群302に比べて歩行方向に規則性が認められない。荷重痕(ロードキャスト)が顕著に見られる。

足跡群604(写真36)

11調査区東側から12調査区西部のⅥ-5-5・6F～H地区のT.P.+5.2m付近で検出した。総数は98個。列状に並んでいるものが3箇所程度あるが、その他は全体的に散らばった状況である。その大きさから子供の足跡と推定できるものもある。



写真35 8調査区 足跡群603検出状況(南西から)



写真36 11調査区 足跡群604検出状況(北から)

足跡群605 (写真37)

12調査区中央部のⅥ-5-6H・I、7H~J地区のT.P.+5.2~5.5mで検出した。散発的な分布を示している。総数は154個。大局的には西部、東部の2グループに分かれており、西側では北東-南西、東側では北-南に列状に並ぶ部分があるが、全体的に散らばった状況である。その大きさから子供の足跡と推定できるものもある。

足跡群606 (写真38)

13調査区の西部から中央部のⅥ-5-7J、Ⅶ-1-7・8A・B地区のT.P.+5.4m付近で検出した。総数は313個。区別は難しいが概ね、西部、中央部、東部の3グループに区別できる。歩行方向は、西側が不規則であるが、中央部、東部については南-北が推定される。

足跡群607 (写真39)

13調査区中央部のⅦ-1-7・8B地区のT.P.+5.4m付近で検出した。総数は302個。全体に集密度が高い。歩行方向としては、南-北のものが多。

足跡群608 (写真40)

13調査区東部のⅦ-1-8・9C地区のT.P.+5.4m付近で検出した。総数は94個。分布状況はやや粗く、歩行方向は不規則である。



写真37 12調査区 足跡群605検出状況(南から)

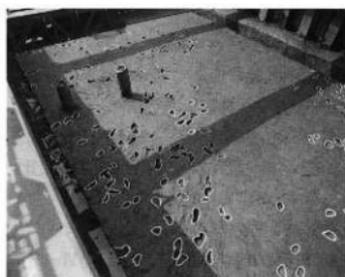


写真38 13調査区 足跡群606検出状況(東から)



写真39 13調査区 足跡群607検出状況(東から)



写真40 13調査区 足跡群608検出状況(北から)

・第7面〔弥生時代前期新段階～弥生時代後期前半〕(第161～168図、図版五二～五四、八四)
調査地中央部の8～13調査区で検出した。第Ⅷ層上面(T.P.+4.9～4.7m)で検出した。検出した遺構には、弥生時代前期新段階～弥生時代後期前半に比定される土坑5基(S K 701～S K 705)、溝12条(S D 701～S D 712)、小穴22個(S P 701～S P 722)、自然河川3条(N R 701～N R 703)がある。

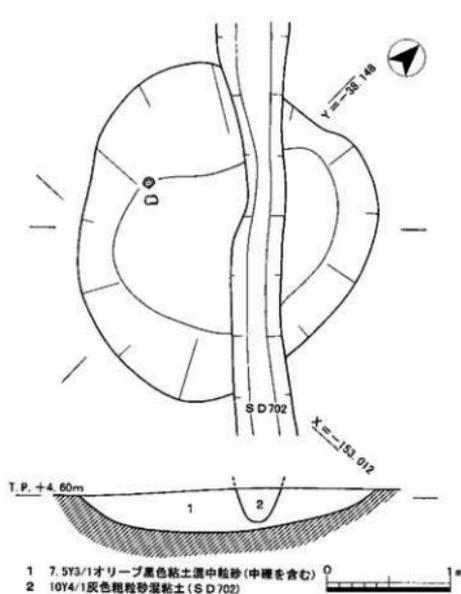
土坑(S K)

S K 701 (第161図、図版五五)

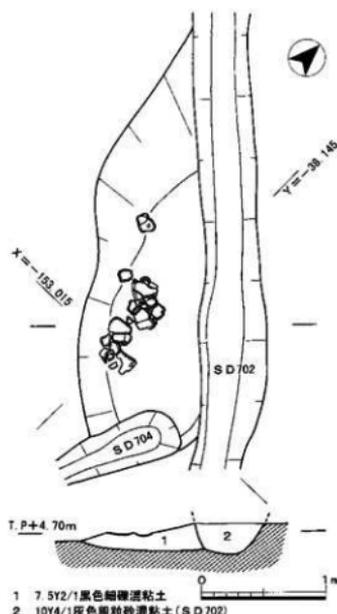
8調査区中西部のVI-4-2F地区で検出した。S D 702に切られている。平面形状は不定形で、東西長2.5m、南北長2.5m、深さ0.4mを測る。断面は浅い皿状で、埋土は7.5Y3/1オリブ黒色粘土混中粒砂の単一層である。遺物は弥生時代前期に比定される弥生土器片が極少量出土しているが、図化できたものはない。

S K 702 (第162・163図、図版五五・八四)

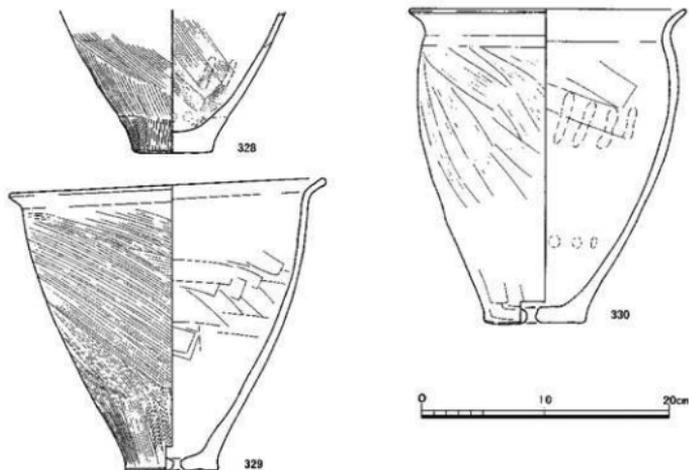
8調査区中央部のVI-4-2F地区で検出した。S D 702とS D 704に切られている。検出部分で長辺3.4m、短辺0.8mを測る。断面は浅い皿状で、深さは0.2mである。埋土は7.5Y2/1黒色細礫混粘土上の単一層である。遺構内からは、弥生時代前期新段階に比定される甕を中心とする弥生



第161図 S K 701 断面図



第162図 S K 702 断面図



第163図 S K 702出土遺物実測図

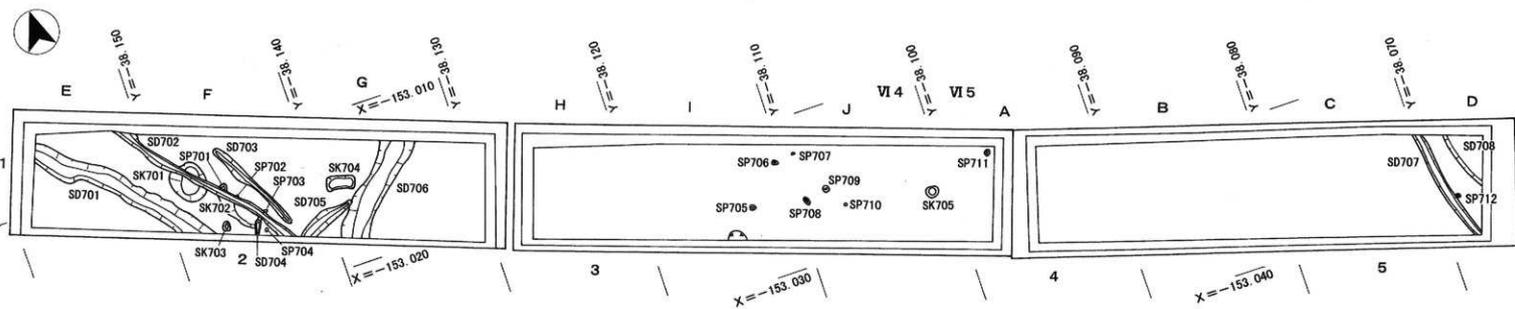
土器類が出土している。壺1点(328)、底部有孔壺2点(329・330)を図化した。328は壺の体部下
 半から底部にかけての資料である。底部は完存しており、底径6.4cmを測る。体部外面はハケ調
 整。体部内面は大半がナデで、一部ハケ調整が認められる。色調は褐灰色。胎土に1～2mm大の
 長石の他、0.5mm以下の角閃石が含まれている。生駒西麓産。329・330は丈高の体部に如意形口
 縁を持つ底部有孔壺で、共に焼成後、底部に円孔が穿たれている。共に倒鐘形を呈するが、330
 は体部上半で内湾して体部幅を減じている。共に完形に近くに復元が可能で、329が口径25.2cm、
 器高23.5cm、底径7.5cm、330が口径21.8cm、器高26.0cm、底径8.1cmを測る。体部外面の器面調
 整は、共にハケ調整が多用されている。329・330共に体部下位の上部から口縁部にかけて煤の付
 着が認められる。色調は329が淡褐色、330が褐灰色である。胎土は328が1～3mm大の長石、チ
 ャートの他、スコープで角閃石の含有が認められる。330の胎土は1～2mm大の長石、角閃石が
 多量に含まれている。329が在地産、330が生駒西麓産である。遺構の帰属時期は、弥生時代前期
 新段階が考えられる。

S K 703

8調査区南部のVI-4-2F地区で検出した。平面形は南北に長い楕円形を呈する。東西長
 0.5m、南北長0.65m、深さは0.14mを測る。断面は浅い皿状で、埋土は10Y4/1灰色細礫混粘土
 の単一層である。遺物は出土していない。

S K 704 (第165・166図)

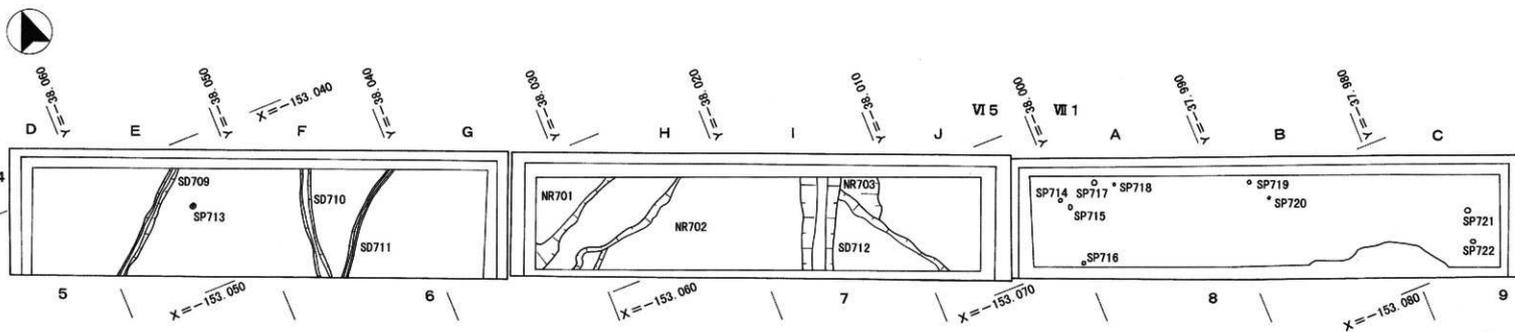
8調査区中東部のVI-4-2G地区で検出した。S D 706の西、S D 705の北に位置する土坑で
 ある。平面形は長方形で、長辺1.8m、短辺0.9m、深さは0.11mを測る。断面は浅い逆台形で、埋土
 は5Y3/1オリーブ黒色極粗粒砂混シルトの単一層である。遺構内からは弥生時代前期新段階に比
 定される弥生土器類が少量出土している。4点(331～334)を図化した。331は大きく張った体部



8調査区

9調査区

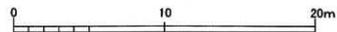
10調査区



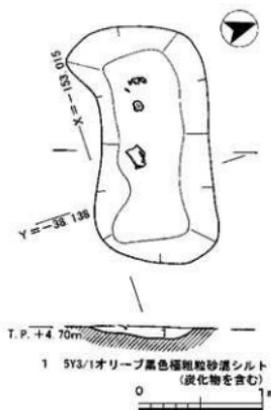
11調査区

12調査区

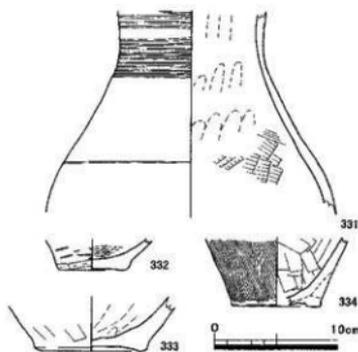
13調査区



第164図 第7面平面図(8調査区~13調査区)



第165図 S K 704断面図



第166図 S K 704出土遺物実測図

から頸部が内傾して伸びた後、外反して大きく開く広口壺の頸部から体部の破片である。頸部外面にヘラ描による直線文を2帯以上施文するもので、確認できた下段では11本を数えた。その他、頸部と体部の境に1条の沈線が巡る。色調は暗褐色。生駒西麓産。332・333は壺の底部である。332が底径5.5cm、333が底径9.9cmを測る。2点共に上げ底を呈するもので、332の底部外側面にはヘラケズリが認められる。色調は褐色。生駒西麓産。334は甕の底部である。復元底径7.2cmを測る。底部外面に縦方向の密なハケ調整が認められる。外面に煤の付着が認められる。色調は褐灰色。生駒西麓産である。遺構の帰属時期は弥生時代前期新段階である。

S K 705

9調査区東部のVI-4-3J地区で検出した。円形を呈するもので、径0.85m、深さ0.29mを測る。埋土は5GY2/1オリーブ黒色粘土である。遺物は出土していない。

溝(SD)

S D 701 (第167図)

8調査区西部のVI-4-1E、2E・F地区で検出した。北西-南東に伸び、両端は調査区外に至る。検出長13.0m、幅1.4m、深さ0.2~0.3mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は10Y3/1オリーブ黒色中礫泥粘土~7.5Y4/1灰色極粗粒砂泥粘土である。遺物は弥生時代前期新段階を中心とする弥生土器類が少量出土している。広口壺の小破片1点(335)を図化した。335は広口壺の頸部から体部上半にかけての破片である。頸部と体部の境に沈線が巡る。色調は淡橙色。生駒西麓産である。



第167図 S D 701出土遺物実測図

S D 702

8調査区中央部のVI-4-1E・F、2F地区で検出した。S D 701の東に並行して伸びるもので、S K 701・S K 702、S P 701～S P 703を切っている。検出部分で検出長14.0m、幅0.5m、深さ0.25mを測る。断面は逆台形状を呈し、埋土は10Y4/1灰色中礫混粘土である。遺物は弥生時代中期に比定される弥生土器類の小破片が極少量出土しているが図化石ではない。

S D 703

8調査区中央部のVI-4-1・2F地区で検出した。北西-南東に伸びる。規模は、全長7.3m、幅0.6m、深さ0.15mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は10Y4/1灰色中礫混粘土である。遺物は出土していない。

S D 704

8調査区南部のVI-4-2F地区で検出した。南-北に伸びるもので、南部分は調査区外に至る。検出部分で長さ1.0m、幅0.3～0.4m、深さ0.05mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は10Y3/1オリーブ黒色中礫混粘土である。遺物は出土していない。

S D 705

8調査区南部のVI-4-2F・G地区で検出した。北東-南西に伸びるもので北東端はS D 706に接し、南西端は調査区外に至る。検出部分で長さ3.5m、幅0.3～0.8m、深さ0.18mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は10Y4/1灰色極粗粒砂混粘土質シルトである。遺物は弥生時代後期の土器類、サヌカイト片が極少量出土している。

S D 706

8調査区東部のVI-4-2G地区で検出した。北東-南西に伸びる。検出部分で、検出長6.5m、幅1.6m、深さ0.3mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は10Y4/1灰色極粗粒砂混シルトである。遺物は弥生時代前～中期に比定される土器類が極少量出土している。

S D 707

10調査区東部のVI-5-4・5D地区で検出した。南-北に伸びる溝である。検出部分で長さ8.1m、幅0.4m、深さ0.05～0.08mを測る。断面形状は碗形を呈し、埋土はN5/0灰色シルトの単一層である。遺物は出土していない。

S D 708

10調査区の北東隅のVI-5-4D地区で検出した。西屑のみを検出しており、東屑については調査区外に至るため不明である。検出部分で南北長3.4m、東西長2.2m、深さ0.05m～0.1mを測る。埋土はN5/0灰色シルトの単一層で、炭化物がブロック状に混入する。遺物は出土していない。

S D 709

11調査区西部のVI-5-5E地区で検出した。北東-南西に伸びるもので、南北端ともに調査区外に至る。検出長7.7m、幅0.6m、深さ0.11mを測る。埋土は植物遺体を含む2.5Y3/1～4/1黒褐色中粒砂～粗粒砂混シルトである。遺物は出土していない。

S D 710

11調査区中央部のVI-5-5・6F地区で検出した。やや蛇行して南-北に伸びるもので、南北両端ともに調査区外に至る。検出長7.0m、幅0.7m、深さ0.09mを測る。埋土は植物遺体を含む2.5Y3/1～4/1黒褐色中粒砂～粗粒砂混シルトである。遺物は出土していない。

S D 711

11調査区東部のVI-5-5・6F地区で検出した。北東-南西に伸びるもので、南北両端ともに調査区外に至る。検出長7.7m、幅0.3m、深さ0.23mを測る。埋土は植物遺体を含む2.5Y3/1~4/1黒褐色中粒砂~粗粒砂混シルトである。

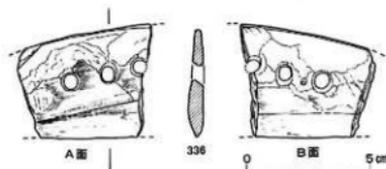
遺物は出土していない。

S D 712 (写真41、第168図、図版八四)

12調査区中央部のVI-5-6・7I区で検出した。北東-南西に伸びるもので、南北両端は調査区外に至る。検出長6.2m、幅1.9~2.6m、深さ0.5mを測る。埋土は2.5Y3/2黒褐色極粗粒砂混シルトである。石包丁1点(336)が出土している。336は直線刃半月形を呈するもので刃部は片刃である。約1/3が残存しており、残存部分で長さ5.2cm、幅4.5cm、厚さ0.6cmを測る。身幅がやや狭い形態で紐孔は3孔が両面から穿孔されている他、B面に未貫通穿孔1個がある。刃縁は直線的で刃稜は不明瞭である。A面の肩部付近に剥離痕がある他、A・B面共に肩部付近の研磨は雑で一部敲打痕が残る。石材は緑泥片岩である。



写真41 12調査区 S D 712検出状況(南から)



第168図 S D 712出土遺物実測図

小穴 (S P)

S P 701

8調査区中央部のVI-4-2F地区で検出した。南部がS D 702に切られているため全容は不明である。検出部分で東西幅0.5m、南北幅0.5mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは0.15mを測る。埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色細礫混粘土の単一層である。遺物は出土していない。

S P 702

8調査区中央部のVI-4-2F地区で検出した。大部分がS D 702に切られているため全容は不明である。検出部分で東西幅0.20m、南北幅0.18mを測る。断面は逆台形で、深さは0.12mを測る。埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色細礫混粘土の単一層。遺物は出土していない。

S P 703

8調査区中央部のVI-4-2F地区で検出した。S P 702同様、大部分がS D 702に切られている。検出部分で東西幅0.2m、南北幅0.2mを測る。断面は楕形で、深さは0.08mを測る。埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色細礫混粘土の単一層。遺物は出土していない。

S P 704

8調査区南部のVI-4-2F地区で検出した。平面形は円形を呈するもので、径0.2mを測る。断面は楕形で、深さは0.12mを測る。埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色極粗粒砂混粘土の単一層。遺物は出土していない。

S P 705～S P 711 (写真42)

9調査区の中央部以東で、総数7個の小穴を検出した。そのうちS P 705～S P 710の6個は調査区のはほぼ中央に集中するが、建物を構成するような規則性は見られない。平面の形状では、円形、楕円形、不定形がある。各小穴の規模は、径0.2～0.5m、深さ0.12～0.6mを測る。埋土はすべて5GY2/1オリープ黒色シルト質粘土の単一層である。どの小穴からも遺物は出土していない。なお、各小穴の法量・詳細等については、第32表に示した。



写真42 9調査区 小穴検出状況(北東から)

第32表 S P 705～S P 711法量表 (単位m)

| 遺構名 | 地区 | 平面形 | 長径 | 短径 | 深さ | 埋土 | 出土遺物 |
|---------|---------|-----|------|------|------|--------------------|------|
| S P 705 | VI-4-3I | 円形 | 0.37 | 0.37 | 0.12 | 5GY2/1オリープ黒色シルト質粘土 | |
| S P 706 | ☆ | 楕円形 | 0.42 | 0.34 | 0.60 | ☆ | |
| S P 707 | VI-4-3J | 円形 | 0.24 | 0.24 | 0.15 | ☆ | |
| S P 708 | ☆ | 楕円形 | 0.50 | 0.28 | 0.07 | ☆ | |
| S P 709 | ☆ | 不定形 | 0.40 | 0.35 | 0.08 | ☆ | |
| S P 710 | ☆ | 円形 | 0.20 | 0.20 | 0.08 | ☆ | |
| S P 711 | VI-5-3A | 楕円形 | 0.40 | 0.35 | 0.12 | ☆ | |

S P 712

10調査区東部のVI-5-4D地区で検出した。S D 707の東肩部分に近接している。平面形状は円形、断面形状は皿形を呈する。規模は径0.3m、深さ0.05mを測る。埋土はN5/0灰色シルトの単一層で、遺物は出土していない。

S P 713

11調査区中央部のVI-5-5E地区で検出した。ほぼ正円形で、径0.3m、深さ0.16mを測る。埋土は植物遺体を含む10YR3/1黒褐色中粒～粗粒砂混シルトである。遺物は出土していない。

S P 714～S P 722 (写真43)

13調査区全域で検出した。分布位置で区別すれば、西部で5個(S P 714～S P 718)、調査区の中央やや北よりの所で2個(S P 719・S P 720)、調査区の東部で2個(S P 721・S P 722)の計9個である。これらの小穴は、建物を構成するような規則性は認められない。また、遺構構築面の堆積土層を見ても、沼沢地のような湿地帯の様相を示す

2.5GY4/1暗オリープ灰色粘土(5Y3/1オリープ黒色粘土が混入する)であることから、居住域に関連した遺構と考えるよりは、西接して検出されている自然河川(N R 701～N R 703)を対象とした狩猟・採集に伴う何らかの遺構の一つであったと考えられよう。なお、各小穴の法量・詳細等については第33表に示した。



写真43 13調査区 小穴検出状況(南から)

第33表 SP714～SP722測量表(単位m)

| 遺構名 | 地区 | 平面形 | 長径 | 短径 | 深さ | 埋土 | 出土遺物 |
|-------|--------|-----|------|------|------|-------------------|------|
| SP714 | Ⅵ-1-7A | 円形 | 0.25 | 0.25 | 0.10 | 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土 | |
| SP715 | ◇ | ◇ | 0.30 | 0.25 | 0.20 | | ◇ |
| SP716 | Ⅵ-1-8A | 楕円形 | 0.40 | 0.30 | 0.14 | ◇ | |
| SP717 | Ⅵ-1-7A | 円形 | 0.15 | 0.15 | 0.09 | ◇ | |
| SP718 | ◇ | ◇ | 0.25 | 0.25 | 0.07 | ◇ | |
| SP719 | Ⅵ-1-7B | 正方形 | 0.25 | 0.25 | 0.07 | ◇ | |
| SP720 | Ⅵ-1-8B | 不定形 | 0.15 | 0.10 | 0.07 | ◇ | |
| SP721 | Ⅵ-1-8C | 円形 | 0.40 | 0.40 | 0.12 | ◇ | |
| SP722 | ◇ | ◇ | 0.30 | 0.30 | 0.11 | ◇ | |

自然河川(NR)

NR701

12調査区西部のⅥ-5-6G・H地区で検出した。東岸のみの検出で全容は不明であるが、検出規模は長さ7.9m、幅4.0m、深さ0.2mを測る。埋土はN6/O灰色細粒～極粗粒砂泥シルトである。遺物は出土していない。

NR702

12調査区中央部のⅥ-5-6G～I、7H～J地区で検出した。南北方向に伸びるもので、南から北へ向かって幅が狭くなっていく。検出規模は長さ6.4m、幅11.0～25.0m、深さ0.2mを測る。埋土は5GY5/1オリーブ灰色シルト混極粗粒砂である。遺物は出土していない。

NR703

12調査区北部のⅥ-5-6・7I地区で検出した。南北方向に伸びると考えられるが、NR702に切られているため、東岸のみの検出で平面規模は不明である。深さは0.2mを測る。埋土は2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質粘土である。遺物は出土していない。

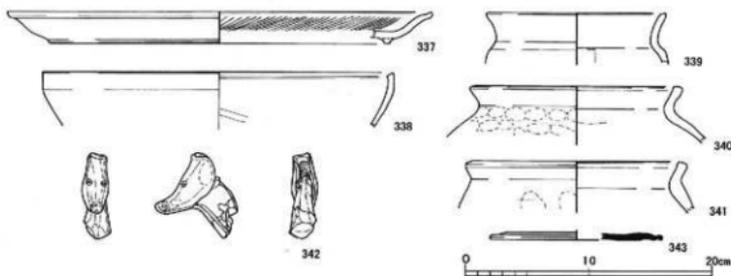
2) 遺構に伴わない遺物

・第Ⅲ層出土遺物 (第169図、図版八五)

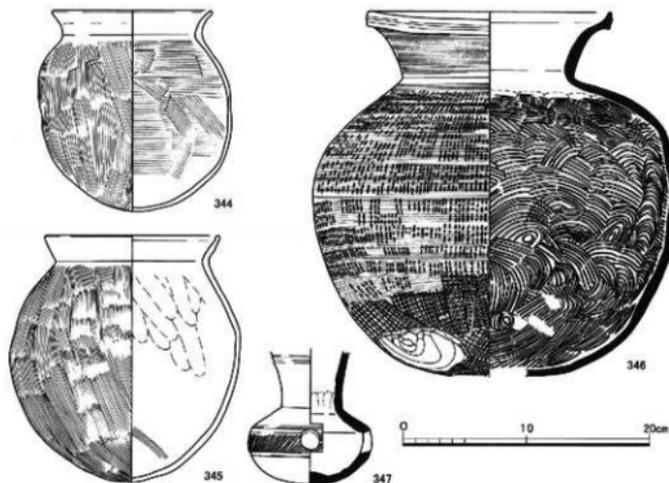
土師器・須恵器・土製品の7点(337~343)を図化した。時期的には、奈良時代前期中葉~平安時代前期の資料である。337は高台を有する土師器皿で平城宮分類の皿Bにあたる。口縁部の約1/6が残存している。復元口径34.3cm、器高2.5cmを測る。a手法によるもので、体部内面には放射状に暗文が施文されている。色調は赤褐色。胎土は精良である。平城宮Ⅲ期に比定される。25調査区Ⅶ-14-4 D地区出土。338は土師器鉢Aの小破片である。復元口径28.4cmを測る。口縁端部は内傾し平坦面を呈する。色調は淡褐色~黒灰色。胎土には1mm以下の長石・石英・赤色酸化土粒が含まれている。奈良時代に比定されるが、小片のため時期は限定できない。24調査区Ⅶ-14-1 E地区出土。339は土師器壺Aの小破片である。復元口径14.5cmを測る小形品で、口縁部と体部の境には強いヨコナデにより明瞭な段を形成している。色調は赤褐色。胎土中に1~3mm大の長石を含む。平城宮Ⅳ期に比定される。25調査区Ⅶ-14-4 D地区出土。340・341は土師器甕で共に口縁部から体部にかけての小破片である。復元口径は340が16.8cm、341が16.6cmを測る。共に肉厚の器壁を有し、口縁部が「く」の字に屈曲するもので、口縁端部は水平な340と外傾する341がある。色調は340が褐色、341が淡褐色である。胎土は340がやや粗く2mm以下の長石・雲母・角閃石を多く含む。341は精良であるがスコープで角閃石の含有が認められる。共に河内産である。帰属時期は共に、佐藤編年の平安時代Ⅱ期古(9世紀第1四半期)にあたる。17調査区Ⅶ-8-5 A地区出土。342は土師器の土馬である。頭部から頸部の上半にかけて残存している。顔部は、頸部の上端に耳をつけた後に円形の粘土板を折り曲げて頸部に挟み込む形に作られている。顔面には眼が細い竹管の押圧で表現されている他、鼻孔が竹筒状工具の刺突により表現されている。色調は赤褐色。胎土は精良である。土馬の形式は分類については、小笠原好彦氏編年(小笠原1975)による裸馬の段階とされる第Ⅱ段階のE形式にあたる。時期的には、奈良時代中期~後期が推定されている。25調査区Ⅶ-14-5 D地区出土。343は須恵器杯B蓋である。復元口径14.0cmを測る。色調は淡青灰色。焼成は良好である。奈良時代末~平安時代前半に比定される。24調査区Ⅶ-14-1 E地区出土。

・第Ⅳ層出土遺物 (第170図、図版八五)

土師器・須恵器の4点(344~347)を図化した。時期的には古墳時代後期中葉(6世紀中葉)を中心とした資料である。344・345は土師器甕である。共に図上で完形で復元が可能である。344は口径12.8cm、器高16.5cm。345は口径14.0cm、器高20.3cmを測る。口縁部は共に「く」の字に屈曲するもので、口縁端部が丸く終る344と肥厚気味に終る345がある。器面調整は体部外面がハケを多用する他、体部内面はハケを行う344と中位から上位にかけて指ナデを行う345がある。色調は共に淡赤褐色を呈する。胎土は344が精良であるが、345は1mm以下の長石が多量に含まれている。焼成は共に良好であるが、345については一部器面の風化が認められる。時期的には、6世紀代のものと推定される。344が22調査区Ⅶ-4-1 D地区、345が24調査区Ⅶ-14-2 D地区出土。346は須恵器甕である。口径19.8cm、残存高30.0cmを測る。口縁部が外反して伸びるもので、口縁端部は上下に肥厚し、凹面を成す外端面を作っている。体部外面の器面調整は外面が平行タタキ後カキメ、内面は青海波タタキを施す。体部外面下位に焼成時に溶着した須恵器片が付く。色調は灰白色。焼成は堅緻で口縁部内面および体部上面に暗緑灰色の自然釉が降着している。TK10



第169図 第Ⅲ層出土遺物実測図



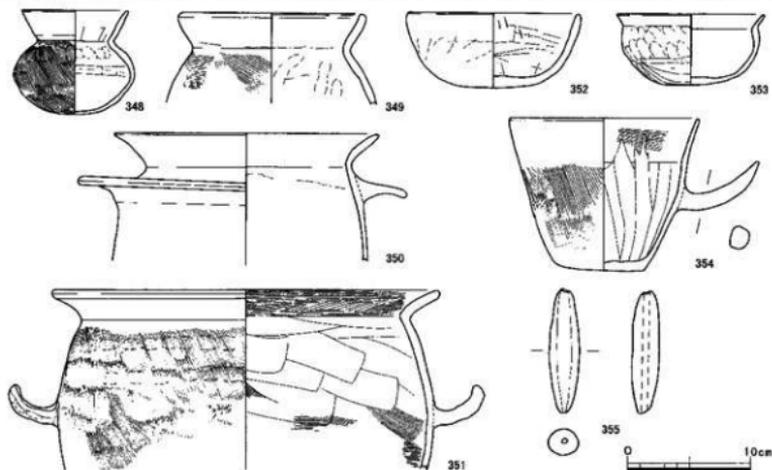
第170図 第Ⅳ層出土遺物実測図

型式(6世紀中葉)に比定される。23調査区Ⅶ-14-1D地区出土。347は須恵器感である。体部はほぼ完存しており、体部径10.0cm、体部高6.4cmを測る。体部外面中位の上下を画する沈線間に列点文が施文されている。円孔は径1.7cmを測るもので、斜上方から内側に向かって穿たれている。346と同様、TK10型式(6世紀中葉)に比定される。23調査区Ⅶ-14-1D地区出土。

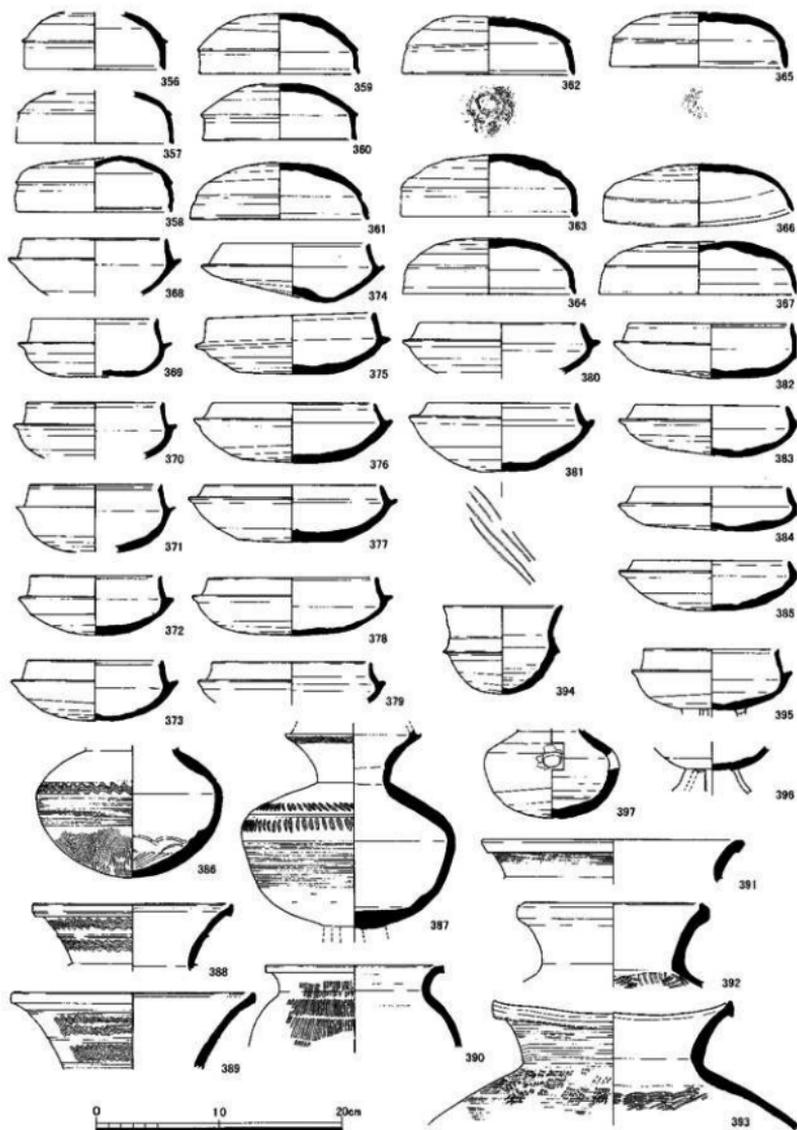
・第Ⅵ層出土遺物(第171・172図、図版八六～八九)

50点(348～397)の土師器・須恵器を図化した。时期的には、古墳時代前期後半(布留式新相)～古墳時代後期中葉(6世紀中葉)の資料である。その内訳は、土師器7点(348～355)、須恵器42点(356～397)である。348は扁球形の体部に直口の口縁部が付く土師器の小形丸底壺である。ほぼ完形で、口径8.5cm、器高8.6cm、体部最大径9.8cmを測る。体部外面の器面調整はハケを多用している。色調は黄橙色。胎土は良好で、0.5mm以下の長石・石英・赤色酸化土粒を含む。古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される。25調査区Ⅶ-14-5D地区出土。349はやや厚めの器壁を持つ

土師器甕の小破片である。復元口径14.6cmを測る。口縁部が「く」の字に屈曲するもので、口縁端部付近で小さく内湾し丸味のある端部を形成する。体部は外面がハケ調整、内面は指頭圧成形後ナダを行う。色調は褐灰色。胎土はやや粗で1mm以下の長石・石英・雲母を多量に含む他、スコップで角閃石の含有が観察される。5世紀代のもものと推定される。23調査区Ⅶ-14-1E・F地区出土。350は土師器の羽釜で、口縁部および鋳部は完存している。口径21.3cm、鋳径26.8cmを測る。「く」の字状に屈曲する口縁部を持つもので、体部上位に鋳が貼り付けられている。鋳は幅広く貼り付け角度はやや斜下方に向く。色調は褐灰色。河内産のもので、胎土には1~4mmを測る長石と0.5mm以下の角閃石が多量に含まれている。6世紀後半前後のものか。23調査区Ⅶ-9-10D地区出土。351は把手付鍋である。復元口径31.0cmを測る。把手は体部の中位に貼り付けられており、舌状を呈する。器面調整は外面口縁部がヨコナダ、体部外面が指頭圧成形後タテハケ、内面は口縁部がヨコハケ、体部は上位が板ナダ、中位以下がハケを施す。色調は褐灰色。胎土には1mm以下の長石・石英が散見される。6世紀前半のものか。23調査区Ⅶ-9-10E地区出土。352・353は小形鉢で、共に3/4以上が残存している。口縁部が直口を呈する352と小さく屈折する353がある。352は口径13.7cm、器高6.2cm。353は口径11.8cm、器高5.8cmを測る。色調は352が浅黄橙色、353が橙色である。胎土は353が精良であるが352は0.5mm以下の長石・赤色酸化土粒が散見される。帰属時期は共に5世紀後半~6世紀前半が推定される。352が23調査区Ⅶ-9-10E地区出土。353が22調査区Ⅶ-9-10C地区出土。354は片方に牛角状の把手が付く把手付鉢である。完形品で口径15.2cm、器高12.5cm、底径7.0cmを測る。器面調整のうち口縁部内外面については、内面の一部のハケを除けば幅広くヨコナダが行われている。体部は外面がタテハケ、内面は板ナダが施されている。色調は明赤橙色で、胎土、焼成共に良好である。6世紀中葉前後のものか。23調査区Ⅶ-9-10D地区出土。355は管状土鉢である。完形品で長さ10.1cm、最大幅2.5cm、紐



第171図 第Ⅵ層出土遺物実測図-1



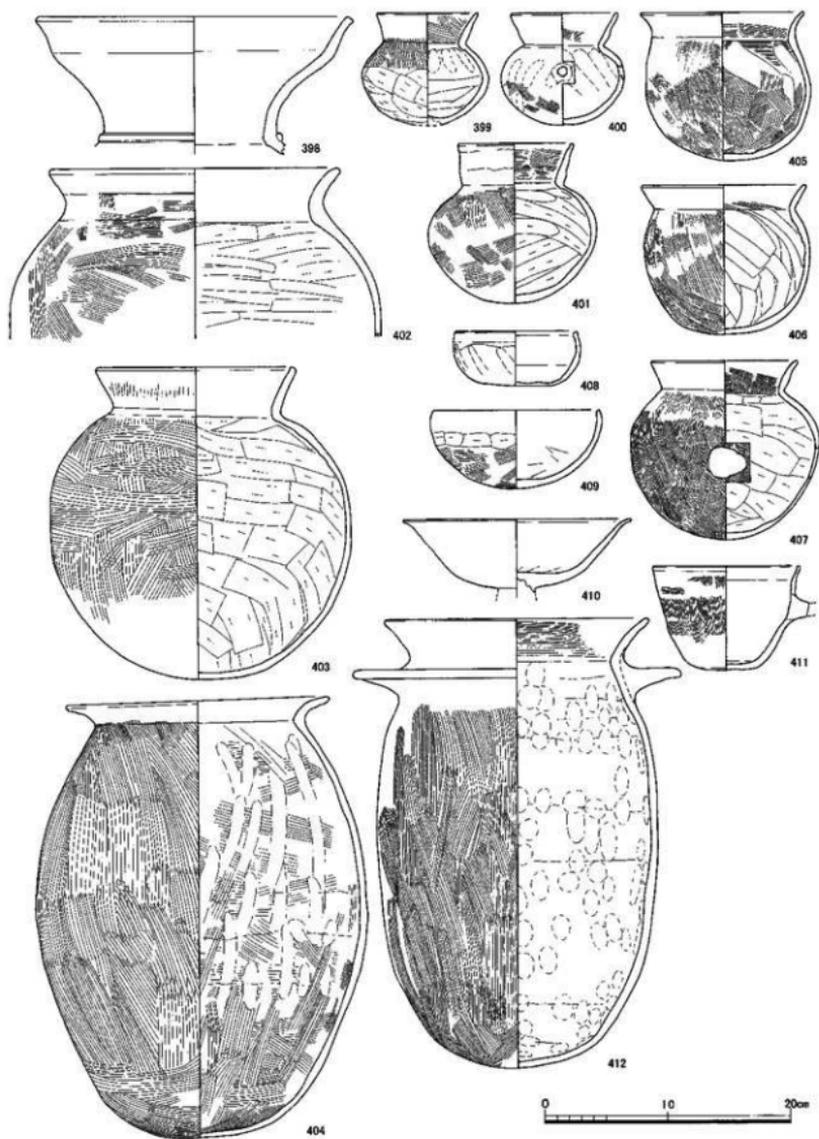
第172図 第VI層出土遺物実測図一2

孔径0.5cmを測る。色調は浅黄褐色で胎土は精良である。25調査区Ⅶ-14-5C・D地区出土。須恵器杯蓋は12点(356~367)を図化した。残存率は356・357の1/4、358・364の1/2を除けば完形ないしは完形に近い。そのうち、356~360が丸味のある天井部に鋭い稜が付くもので、口径11.4~13.2cm、器高4.5~4.9cmを測る。一方、361~367は口径の増加と稜が退化から消滅した段階のもので、口径13.9~15.6cm、器高4.0~5.7cmを測る。前者がTK23型式~TK47型式(5世紀後半)、後者がMT15型式~TK10型式(6世紀前半~中葉)に比定される。なお、366に焼き歪みがある他、362・365の天井部内面には、362に同心円文タタキ、365に青海波文タタキが認められる。色調は淡灰青色~青灰色。焼成は堅緻で356・359・365の天井部と366の内外面に灰かぶりが認められる。356・357が24調査区Ⅶ-14-2D地区、358・363・367が23調査区Ⅶ-9-10D地区、359が23調査区Ⅶ-14-1D地区、360が24調査区Ⅶ-14-2E地区、361・365・366が23調査区Ⅶ-14-1E地区、362が23調査区Ⅶ-9-10D・E地区、364が25調査区Ⅶ-14-5C・D地区出土。須恵器杯身は18点(368~385)を図化した。残存率は1/2以下の368~371、379・380・385を除けば完形ないしはほぼ完形である。そのうち、368~374が口径10.2~12.1cm、器高4.8~5.0cmを測る小振のもので、深く丸味を持つ体底部からたちあがり内傾して高く伸びるもので、口縁端部は丸く終る368と内傾し段を有する369~374がある。375~385は口径12.2~14.4cm、器高3.6~4.9cmを測る大形品である。体底部は381を除けばやや浅く平らないしは平らに近いものが多い。受部の方向は水平ないしは外上方に短く伸びるもので、たちあがりは強く内傾し端部が内傾する面を持つものと丸味を持って終るものがある。381の底部外面に4本を1単位とする平行線文が施文されている。368~374がTK23型式~TK47型式(5世紀後半)、375~385がMT15型式~TK10型式(6世紀前半~6世紀中葉)に比定される。色調は灰白色~青灰色。焼成は堅緻である。368~371が24調査区Ⅶ-14-2D地区、372が24調査区Ⅶ-14-3E地区、373・382が22調査区Ⅶ-9-10C地区、374・377~380が23調査区Ⅶ-14-1E地区、375が23調査区Ⅶ-14-1F地区、376が23調査区Ⅶ-9-10E地区、381・384が23調査区Ⅶ-9-10D地区、383が23調査区Ⅶ-14-1D地区、385が25調査区Ⅶ-14-5C・D地区出土。386・387は須恵器壺である。386は口頸部を欠損し、体部の1/2が残存している。残存部分で体部最大径15.0cm、残存高10.5cmを測る。体部外面の中位に波状文とその下部に約3.5cm幅でカキメが施文されている。底部は外面がハケ、内面は工具により押圧された痕跡を残す。色調は青灰色。焼成は堅緻。型式は特定できないが、初期須恵器の範疇のものである。24調査区Ⅶ-14-2D地区出土。387は有蓋付壺で、口縁部および脚部を欠く。体部は完存しており、体部高11.8cm、体部最大径17.5cmを測る。口頸部は大きく反した後、小さな受部から内傾して伸びるたちあがり形成されている。頸部外面上端に波状文が施文されている他、肩部外面の中位に1本の沈線を挟んで列点文と体部にカキメが施されている。脚部のスカシ孔は3方に穿たれている。色調は暗灰色。色調は堅緻である。類別に乏しく不明な点があるが、有蓋付壺としては初期須恵器の中でも最古級に位置付けられるON231号壺に存在が認められているが、本例はそれよりは後出のものと考えられる。23調査区Ⅶ-9-10D地区出土。須恵器壺は6点(388~393)を図化した。393の壺の口頸部が完存する以外は口頸部の小破片である。388・389共に斜上方に長く伸びる口頸部を持つ。388は下方に拡張された端面下部に段を有する。復元口径16.3cmを測る。頸部外面は凸帯を挟んで波状文が施文されている。色調は淡灰色であるが、頸部外面には黒褐色の釉が塗布されている他、内面に自然釉が降着してい

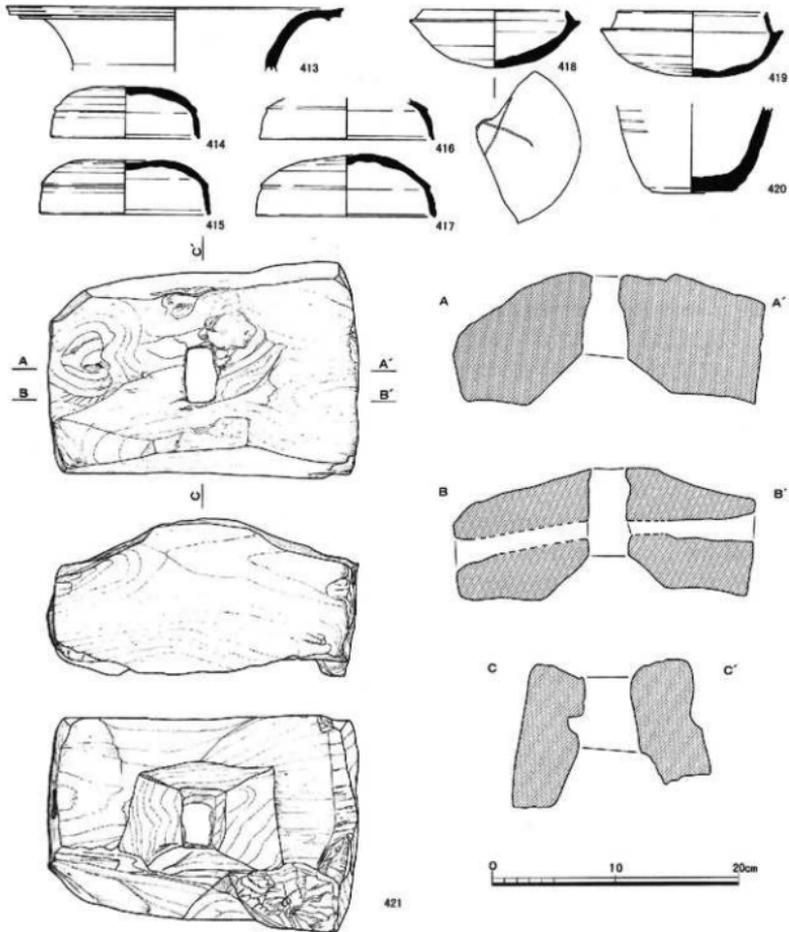
る。24調査区Ⅶ-14-2 E地区出土。399の口頸部外面には、沈線間に波状文が施文されている。色調は暗灰色で器壁面は紫灰色を呈する。22調査区Ⅶ-9-10 C地区出土。390は口頸部が外反して伸びた後、垂直方向に伸びる端面を形成している。体部外面に平行タタキが行われている。色調は青灰色。焼成は堅緻。TK216型式(5世紀前半)に比定される。25調査区Ⅶ-14-4 D地区出土。391は短く伸びる口頸部の端部に幅広く内傾する端面が形成されている。口頸部外面にカキメが施されている。24調査区Ⅶ-14-2 D地区出土。392・393は共に口頸部が外反して伸びるもので、端部が水平方向ならびに上方に肥厚する392と下方に肥厚し幅広い端面を形成する393がある。口径は392が14.6cm、393が19.3cmを測る。器面調整は392の体部内面が青海波タタキ、393は口縁部外面カキメ、体部外面は平行タタキの後カキメ、体部内面は青海波タタキが施文されている。色調は391・393が淡灰色、392が灰色を呈する。3点共に焼成は堅緻。393がMT15型式(6世紀前半)、391・392がTK10型式(6世紀中葉)に比定される。392が24調査区Ⅶ-14-2 D地区、393が24調査区Ⅶ-14-2 E地区出土。394は丸底の底部を有するもので、体部中位に明瞭な稜を形成した後、斜上方に伸びる口頸部が付く小形の須恵器鉢である。完形品で口径9.6cm、器高7.2cm、体部最大径9.5cmを測る。色調は灰色～黒灰色。焼成は堅緻で、内外面に灰かぶりが認められる。類例が乏しいもので、帰属時期は明確でない。22調査区Ⅶ-9-10 D地区出土。395・396は須恵器高杯である。395は有蓋高杯で脚部を欠く。口径11.6cm、杯部高4.9cm、受部径13.2cmを測る。スカシ孔は3方に穿たれている。色調は青灰色。色調は堅緻。TK23型式(5世紀後半)に比定される。24調査区Ⅶ-14-2 D地区出土。396は小破片のため形式は不明。色調は青灰色で器壁面は紫灰色。焼成は堅緻。5世紀後半の所産である。24調査区Ⅶ-14-2 D地区出土。397は處で口頸部を欠く。体部中位に径1.5cmを測る円孔が穿たれている。色調は青灰色。焼成は堅緻。TK23型式(5世紀後半)に比定される。23調査区Ⅶ-14-1 E地区出土。

・第Ⅶ層出土遺物(第173・174図、図版八九～九一)

図化したものは総数24点(398～421)で土師器、須恵器、台状木製品がある。時期的には古墳時代前期後半(布留式新相)～古墳時代後期前半(6世紀前半)までの資料である。398～412は土師器でその内訳は、壺4点(398～401)、甕6点(402～407)、杯2点(408・409)、高杯1点(410)、把手鉢1点(411)、羽釜1点(412)である。398は土師器の大形二重口縁壺で口頸部と体部の境に凸帯を有する。口頸部は完存しており、口径25.3cm、口頸部高10.0cmを測る。ローリングを受けており調整は不明瞭である。色調は橙色。胎土には、1～5mm大の長石・角閃石が多く含まれている。古墳時代前期後半(布留式新相)のものか。26調査区Ⅶ-14-7 C地区出土。399～401は扁球形の体部に斜上方に伸びる直口の口縁部が付く小形丸底壺で、3点共にほぼ完形である。399・400が口径8.2～8.5cm、器高9.1cmを測る小形品、401が口径9.3cm、器高13.1cmを測る中形品である。3点共に体部最大径が口径を凌駕している。器面調整については、体部外面の中位以下にヘラケズリを行う以外はハケ調整が多用されている。内面については、口縁部がハケ調整、体部は指ナデを行う400とヘラケズリを行う401がある。なお、400の体部中位には焼成後に穿たれた径0.8cmを測る円孔がある。色調は400・401が淡赤褐色、399が褐色である。胎土は3点共にやや粗く1mm以下の長石・石英・チャート・角閃石を多量に含む。399・400が古墳時代前期後半(布留式新相)、401が5世紀後半に比定される。399が26調査区Ⅶ-14-7 C地区、400がⅦ-14-7 B地区、401がⅦ-14-6 C地区出土。402～407は土師器甕である。402は口縁部の1/3が残存しており、復元



第173图 第七层出土遗物实测图一



第174図 第Ⅷ層出土遺物実測図-2

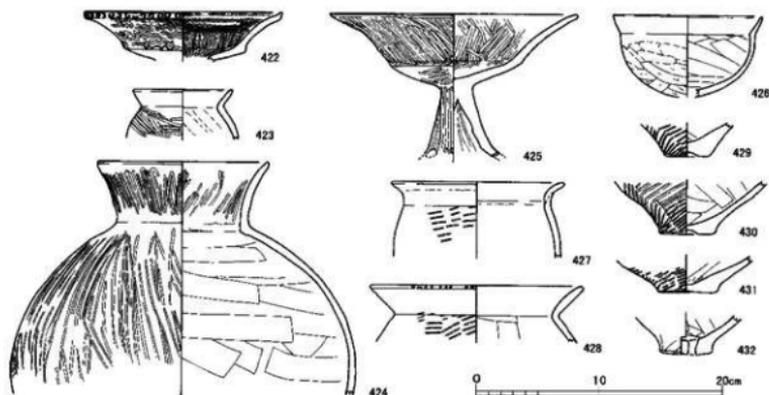
口径23.4cmを測る。緩やかに外反する口縁部を有するもので、特に口縁部付近の器壁が厚い。体部外面はハケ調整、体部内面は上位がヘラケズリと板ナアが行われている。体部外面に煤が付着している。色調は淡灰褐色。胎土中に1mm大の石英・長石が散見される。古墳時代前期後半(布留式新相)のものか。20調査区Ⅶ-8-8H・I地区出土。403は球形の体部から口縁部が外反して斜上方に伸びる甕である。ほぼ完形で、口径15.8cm、器高25.4cm、体部最大径24.5cmを測る。

器面調整は体部外面の上位から下位にかけて単位幅の広いハケが使用されており、概ねタテハケ後、ヨコハケが施されている。体部内面のケズリは特に上位部分が深く削られており、ケズリにより生じた凹凸面が顕著である。体部の上位下半に煤が付着。色調は褐灰色。胎土中に1~2mm大の長石・石英・赤色酸化土粒が散見される。古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される。20調査区Ⅶ-8-8G地区出土。404は長胴形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付く土師器の長胴甕である。口径21.1cm、器高35.6cm、体部最大径27.0cmを測る。器面調整は、体部外面については底部付近がヨコハケである以外はタテハケ、体部内面はハケ後縦方向の指ナダが行われている。色調は淡褐灰色。胎土は精良である。21調査区Ⅶ-9-9A地区出土。405~407は小形の甕である。3点共に図上で完形に復元できる。口径が体部径を凌駕する405・406と体部径が口径を凌駕する407がある。法量は405が口径13.4cm、器高12.1cm。406が口径13.3cm、器高12.2cm。407が口径11.8cm、器高14.6cmを測る。器面調整は体部外面および口縁部内面についてはハケが多用されている他、体部内面は405にハケ、406に板ナダ、407にヘラケズリが行われている。色調は淡赤褐色~黄褐色である。胎土は405・406が精良、407には1~3mm大の長石・石英が散見される。407の体部中位には焼成後の穿孔が認められる。時期的には、407が古墳時代前期後半(布留式新相)、405・406が古墳時代中期中葉(5世紀中葉)のものとして推定される。405が20調査区Ⅶ-8-8H・I地区、406が22調査区Ⅶ-9-10D地区、407が26調査区Ⅶ-4-7C地区出土。408・409が土師器杯で共に完形である。408が口径10.0cm、器高4.4cm。409が口径13.5cm、器高6.5cmを測る。色調は共に赤褐色。胎土は408が精良、409に1mm以下の長石・赤色酸化土粒が多く含まれている。時期的には、408が5世紀中葉~後半、409が6世紀前半~中葉のものか。408が20調査区Ⅶ-8-8・9I地区、409が22調査区Ⅶ-9-10D地区出土。410は土師器高杯の杯部で、杯部は完存している。杯部径18.4cm、杯部高5.6cmを測る。丸味を持つ杯体部から口縁部が斜上方に直線的に伸びるもので、端部付近で小さく外反して丸味のある端部を形成している。色調は赤褐色。胎土中に1~2mm大の長石・石英を多量に含む。古墳時代前期後半(布留式新相)の所産である。24調査区Ⅶ-4-2D地区出土。411は土師器の把手付き鉢である。約1/2が残存している。口径11.9cm、器高8.5cm、底径3.2cmを測る。体部外面は縦方向の細いハケ調整を行う。色調は淡灰褐色。胎土は精良。6世紀前半の所産。20調査区Ⅶ-8-8H・I地区出土。412は長胴形の体部の上位に水平方向に伸びる鋳が付く土師器の羽釜である。約1/2が残存している。口径21.2cm、器高36.7cm、鋳径26.9cmを測る。器面調整は口縁部外面および鋳部ヨコナダ、体部外面はタテハケ、口縁部内面ヨコハケ、体部内面に指頭圧痕が認められる。色調は褐灰色。胎土中に1~5mm大の長石・石英・角閃石が散見される。河内産である。20調査区Ⅶ-9-10C地区出土。須臾器は8点(413~420)を図化した。その内訳は、甕1点(413)、杯蓋4点(414~417)、杯身2点(418・419)、椀1点(420)である。413は甕の小破片で、復元口径27.4cmを測る。口頸部が斜上方に直線的に伸びた後、口縁部付近で外折するもので、口縁端部は上部が尖り気味で終わる他、口縁端部に近接する位置に凸帯が1条巡る。色調は青灰色、器壁面は紫灰色を呈する。焼成は堅緻。TK216型式(5世紀前半)に比定される。22調査区Ⅶ-9-10C地区出土。杯蓋は4点(414~417)で、残存率は414が1/4、他は約1/2である。法量は414が口径11.9cm、器高4.1cmを測る。415・416については、414に比して口径が大きいもので、口径13.8~14.6cm、器高4.2~5.0cmを測る。色調は416が灰白色、414・415・417が青灰色~灰色である。焼成は堅緻。414がTK47型式(5世紀後半)、415~

417がMT15型式(6世紀前半)に比定される。414が20調査区Ⅶ-8-8G・I地区、415・417が20調査区Ⅶ-8-8H・I地区、416が3調査区Ⅱ-22-7G地区出土。418・419は須恵器杯身である。418は1/3が残存している。復元口径11.8cm、器高4.8cm、受部径13.9cmを測る。体部は深日で、水平方向に短く伸びた受部からたちあがり内傾して短く伸びる。底部外面にヘラ描きによる「×」の記号がある。色調は青灰色。焼成は堅緻で、体部外面に自然釉が降着している。受部およびたちあがりの形態においては、新しい様相を示すものの、本例については器壁が厚いほか、器壁面が紫灰色を呈することから初期須恵器の範疇に含まれるものと推定される。20調査区Ⅶ-8-8G・H地区出土。419は完形品で口径12.2cm、器高5.4cm、受部径13.9cmを測る。色調は灰色。焼成は堅緻。MT15型式(6世紀前半)に比定される。20調査区Ⅶ-8-8H・I地区出土。420は碗の破片である。底部は完存しており、底径6.8cmを測る。色調は灰色。焼成は良好で、体部外面に自然釉が降着している。5世紀代のものであるが、型式は不明。22調査区Ⅶ-9-10B地区出土。421は台状木製品である。真横からみて山形を呈するもので、中央部分に縦方向に貫通する長方形の孔がある他、横方向に貫通する小孔がある。法量は長辺25.3cm、短辺17.2cm、高さ12.5cmを測る。中央部部分を縦方向に貫通する孔は、上部が2.1×4.5cmを測る長方形であるが、下部については8.5×12.0cmを測る上部より大きい孔を上部に向かって台形状に4.0cm程度を穿った後に上部と貫通させている。樹種は広葉樹である。類例としては、久宝寺南(その1)の第2遺構面河川-2(古墳時代後期)から出土しており、ねずみ返しと報告されているが、上原真人氏分類の「木器集成図録近畿原始篇」(上原1993)での再検討の結果、糸のもつれを防ぐため、総を掛ける器具である櫛の台とされており、本報告ではそれに従った。時期的には古墳時代中期～後期前半が推定される。20調査区Ⅶ-8-9H地区出土。

・第Ⅶ層出土遺物(第175図、図版九二)

11点(422-432)の土師器類を図化した。時期的には古墳時代初頭前半(庄内式古相)を中心としている。422・423は土師器壺である。422は口縁部内外面に加飾を加えた二重口縁壺の口縁部ではほぼ完存している。口径16.0cmを測る。口縁部の加飾については、端面に竹管文と外面全体に雑な波状文、内面は上位から中位まで小さい波長の波状文、中位以下に縦方向の密なヘラミガキが行われている。色調は浅黄橙色。胎土には1mm以下の長石・石英・赤色酸化土粒が少量含まれている。4調査区Ⅱ-23-9D地区出土。423は「く」の字に屈曲する口縁部を持つ小形の壺である。復元口径8.0cmを測る。色調は褐色。胎土中にスコープで確認できる角閃石が含まれている。生駒西麓産である。9調査区Ⅵ-4-2・3I地区出土。424は短頸直口壺で、口縁部から体部中位までの約1/2が残存している。口径13.7cm、体部最大径27.9cmを測る。外面は口縁部から体部にかけて縦方向のヘラミガキ。内面は口縁部がヨコナデの後、縦方向のヘラミガキ、体部は板ナデを施す。色調は赤褐色で体部外面に大きな黒斑がある。胎土は精良である。12調査区Ⅵ-5-6G地区出土。425は有稜高杯で裾部を欠く。口径19.8cmを測る。杯部の口縁が長く伸びる形態をとるもので、口縁比53.0、口縁径30.3を測る。杯口縁部内外面は縦方向のミガキ、杯体部外面は横方向のヘラミガキが行われている。脚柱部外面は縦方向のミガキ、内面はシボリ目を残す。スカシ孔は3方に穿たれている。色調は褐色。胎土中に0.1～0.3mm大の長石・石英・角閃石を含む。9調査区Ⅵ-4-2・3I地区出土。426は半球形の体底部に斜上方に短く伸びる口縁部が付く。約1/2が残存しており、口径12.0cm、器高6.7cmを測る。体部外面の中位

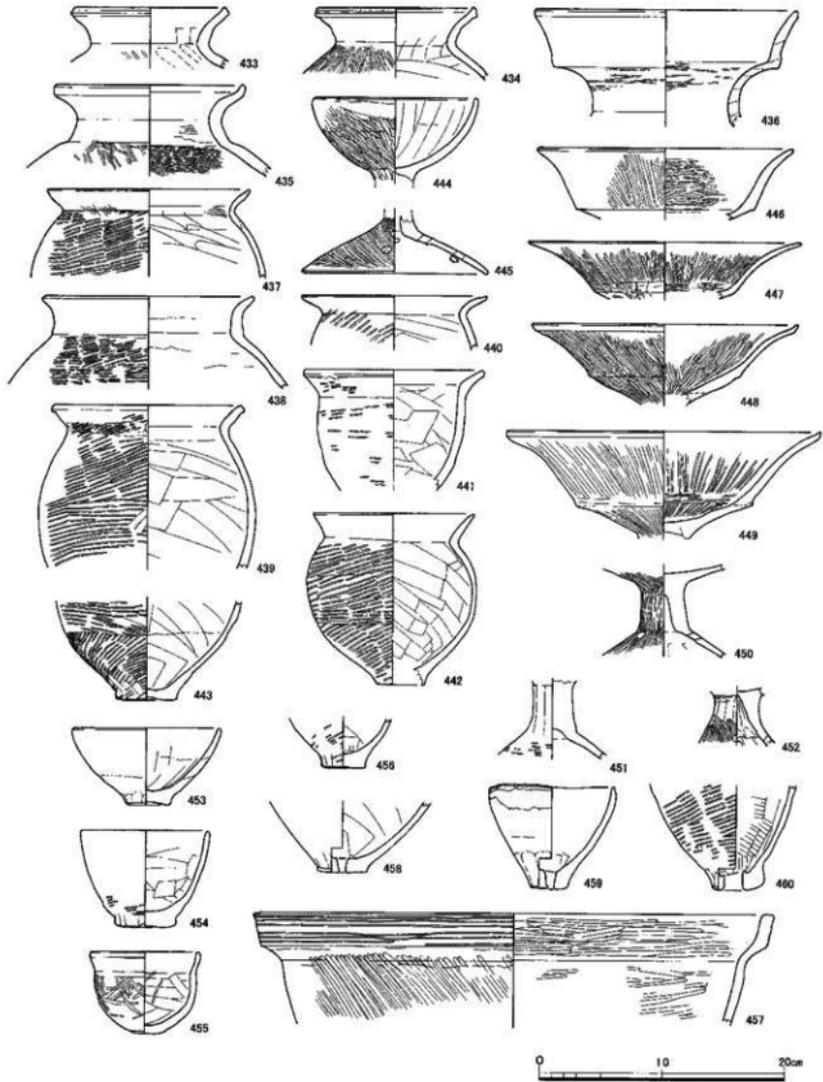


第175図 第Ⅱ層出土遺物実測図

以下が鱗状にヘラケズリが行われている。色調は赤褐色。胎土は精良で庄内式期の土器の特徴である精製化を志向した器種の一つである。12調査区Ⅵ-5-6 G地区出土。427~431は庄内式古相の土器と共伴するV様式系甕である。427・428が口縁部から体部、429~431は底部である。口縁部の形状は427が外反、428が「く」の字状に屈曲する。底部の429~431は突出しない平底で、裏面は3点共にドーナツ底である。色調は褐灰色~橙色である。5点共に生駒西麓産である。427が5調査区Ⅱ-23-9 E地区、428が9調査区Ⅵ-4-2・3 I地区、429・430が9調査区Ⅵ-4-2 H地区、431が10調査区Ⅵ-5-3 B地区出土。432は底部有孔土器である。底部裏面と体部外面下半の2箇所にも粉の圧痕が認められる。色調は淡褐灰色。胎土中に1~4mm大の長石・石英・チャート・角閃石が多量に含まれている。生駒西麓産である。9調査区Ⅵ-4-3 J地区出土。

・第Ⅳ層出土遺物（第176図、図版九二~九四）

弥生土器28点(433~460)を図化した。時期的には弥生時代後期後半(畿内第V様式後半)~古墳時代初頭前半(庄内式古相)の資料を主体としている。内訳は壺4点(433~436)、甕7点(437~443)、高杯9点(444~452)、鉢5点(453~457)、有孔鉢3点(458~460)である。433~435は広口壺の小破片である。433・434は共に口縁部が外反して伸びるもので、外傾する端面の外面に沈線が1条巡る。復元口径は433が12.1cm、434が12.7cmを測る。色調は共に灰白色。胎土中に1mm大の長石・石英の他、スコープで角閃石の含有を認める。生駒西麓産。433が6調査区Ⅱ-24-10A地区、434が6調査区Ⅱ-24-10B地区出土。435は外反して伸びる口縁部から斜上方に肥厚し、幅広い端面を形成する壺である。復元口径15.0cmを測る。色調は淡灰色褐色。胎土は粗く1~3mm大の長石・石英・チャートを多量に含む他、スコープで極少量の角閃石の含有が認められる。6調査区Ⅱ-24-10A・B地区出土。436は二重口縁壺の口頸部である。1/2が残存している。復元口径21.3cmを測る。全体に丁寧な作りであるが、風化が著しく調整が不明瞭である。色調は褐灰色で、胎土中に0.1~0.5mm程度の角閃石を含む。生駒西麓産。6調査区Ⅱ-24-10B地区出土。437~441は甕で、口縁部から体部にかけての資料である。体部の形態から437~439が中形、440・441が小形に区別される。口縁部の形態は直上に短く伸びた後に外折する438以外は「く」の字形を呈する。



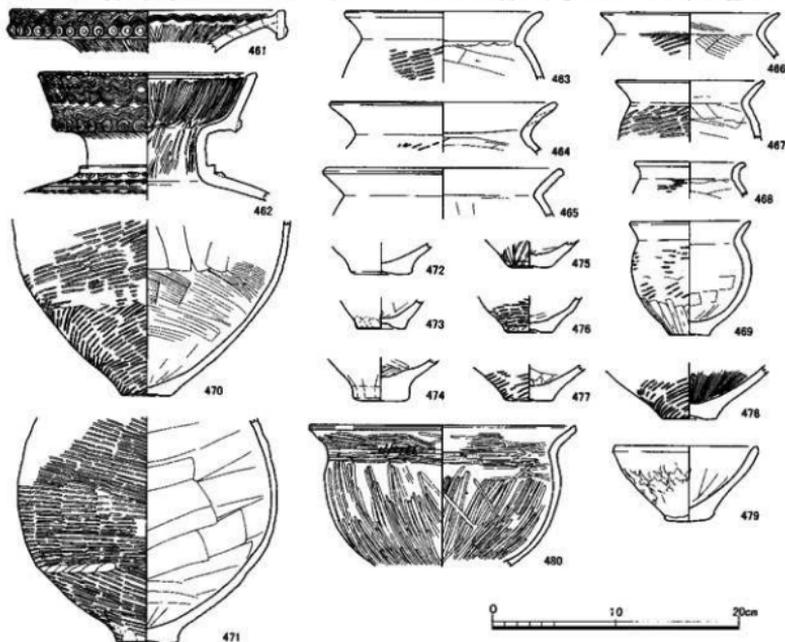
第176図 第Ⅳ層出土遺物実測図

体部外面はタタキ、体部内面は板ナデを施す。色調は褐灰色である。全て生駒西麓産である。442は小形の甕である。口径13.0cm、器高14.0cm、底径3.9cmを測る。体部は二分割成形で、体部外面のタタキは上段下段共に右上がりである。色調は灰白色。胎土中に長石・石英・チャートが散見される。437・438が6調査区Ⅱ-24-10A地区、439・441が6調査区Ⅱ-24-10B地区、440が6調査区Ⅱ-23-9・10I地区、442が7調査区Ⅵ-4-1D・E地区出土。443は甕の体底部で底部表面はドーナツ底である。外面全体に煤の付着が認められる。生駒西麓産。6調査区Ⅱ-24-10B地区出土。444・445は椀形高杯である。444は椀形高杯の脚部で、復元口径13.3cm、杯部高6.2cmを測る。杯部内外面は縦方向のヘラミガキが多用されている。色調は淡褐灰色である。胎土中に0.5~4mm大の長石・石英・チャートが散見される。非生駒西麓産。445は椀形高杯の脚部である。ほぼ完形で裾部径15.0cmを測る。スカシ孔は二段にわたって穿たれており、上段が4個、下段が3個である。色調は赤褐色。胎土中に1mm以下の長石・石英・石英・角閃石を含む。生駒西麓産。444・445共に7調査区Ⅱ-24-10B・C地区出土。446~449は有稜高杯の杯部で、449がほぼ完形の他は1/4程度が残存している。口径は446~448が20.7~22.2cm、449がやや大きく25.4cmを測る。446を除けば杯部の口縁長が増加した形態のもので、447~449の口縁比は51.8~57.3、口縁比29.4~32.2で原田2003年分類の有稜高杯E₁に区別される。色調は447が淡褐色、448・449が赤褐色である。3点共胎土には1~3mm大の長石・石英・チャートとスコープで確認できる微細な角閃石が含まれている。446が7調査区Ⅵ-4-1D地区、447が6調査区Ⅱ-24-10B地区、448が6調査区Ⅱ-24-10A・B地区、449が6調査区Ⅵ-4-1B地区出土。450~452は高杯の脚部片である。450・452が中空、451が中実で、451については原田2003年分類の有稜高杯D₂とされたものにあたる。色調は3点共に淡灰褐色。3点共に胎土中に1~2mm大の長石・石英・チャート粒が多量に含まれている他、スコープで角閃石の含有が確認できる。450が6調査区Ⅵ-4-1B地区、451が6調査区Ⅱ-24-10B地区、452が6調査区Ⅱ-24-10A地区出土。453・454は直口の口縁部を有する小形鉢である。共に1/2以上が残存している。453が口径11.8cm、器高6.0cm、底径3.5cm。454が口径10.1cm、器高7.8cm、底径4.8cmを測る。底部は共に小さく突出するもので、453の底部側面には指頭による圧痕が明瞭に残る。底部裏面は453が上げ底、454がドーナツ底である。色調は共に淡灰褐色。胎土中に1~2mm大の長石・石英・チャートの他、スコープで角閃石の含有が確認できる。453が7調査区Ⅵ-4-1D・E地区、454が6調査区Ⅱ-24-10A・B地区出土。455は平底で半球形の体部に上外方に内湾気味に伸びる口縁部が付く小形鉢である。口径8.8cm、器高6.7cm、底径2.7cmを測る。口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ヘラミガキ、体部内面は板ナデを施す。色調は褐灰色。胎土は精良。生駒西麓産。7調査区Ⅵ-4-1D・E地区出土。456は小形鉢の底体部。底部は完存しており底径3.7cmを測る。色調は褐灰色。生駒西麓産である。6調査区Ⅱ-24-10A地区出土。457は体部上半から外反した後、斜上方へ伸び幅広の口縁部を形成する大形鉢。復元口径42.0cmを測る。口縁部外面の上下段に3本を1単位とする沈線巡らせるが下段は雑で途切れる部分がある。色調は褐灰色で角閃石を多量含む生駒西麓産であるが、同形態のものは類例が少なく他地域からの影響が考えられる。6調査区Ⅱ-24-10B地区出土。458~460は有孔鉢でそのうちの459が完形である。459は口径10.0cm、器高8.2cm、底径3.1cmを測る。459は口縁部付近の成形が雑で粘土紐の痕跡が残り波状口縁を呈する。円孔は全て焼成前に上から下に向かって穿たれており、上部の径が大きく下部が

小さくなっている。色調は灰灰褐色。胎土は459に1mm程度の長石が多く含まれているが458・460は精良である。3点共に生駒西麓産。458が6調査区Ⅱ-24-10A・B地区、459が6調査区Ⅱ-24-10B地区、460が6調査区Ⅵ-4-1B地区出土。

・第Ⅳ層出土遺物(第177図、図版九四・九五)

弥生土器20点(461~480)を図化した。时期的には弥生時代後期後半(畿内第V様式後半)に比定される。461・462は体部の上位から口縁部にかけて加飾が施された壺である。461は口縁端部を垂下させ幅広の端面を作る広口壺で、端面の外面に1条の波状文と竹管押圧円形浮文が施文されている他、口縁部の内面に1条の波状文が巡る。復元口径22.2cmを測る。色調は浅黄橙色~橙色。胎土はやや粗く1mm以下の長石・石英・チャート・角閃石を多く含む。9調査区Ⅵ-5-3A地区出土。462は二重口縁壺で口頸部が完存している。口径17.6cm、口頸部高8.3cmを測る。口縁部は斜上方に直線的に伸びるもので、外面には上からキザミ目、3条の波状文と下端に竹管押圧円形浮文が施文されている。頸部と体部を両する凸帯より下部には、上から直線文+竹管押圧円形浮文、波状文、直線文、波状文の順に施文が行われている。なお、461とは色調、胎土が共通する他、製作技法や施文等にも類似した点が認められ、同一人による製作の可能性がある。9調査区Ⅵ-4-3J地区出土。463~469は甕である。463~469は口縁部が残存するもので、口径16.8~18.9cmを測る大形の463~465、口径11.9~14.6cmを測る中形の466・467、口径8.8~



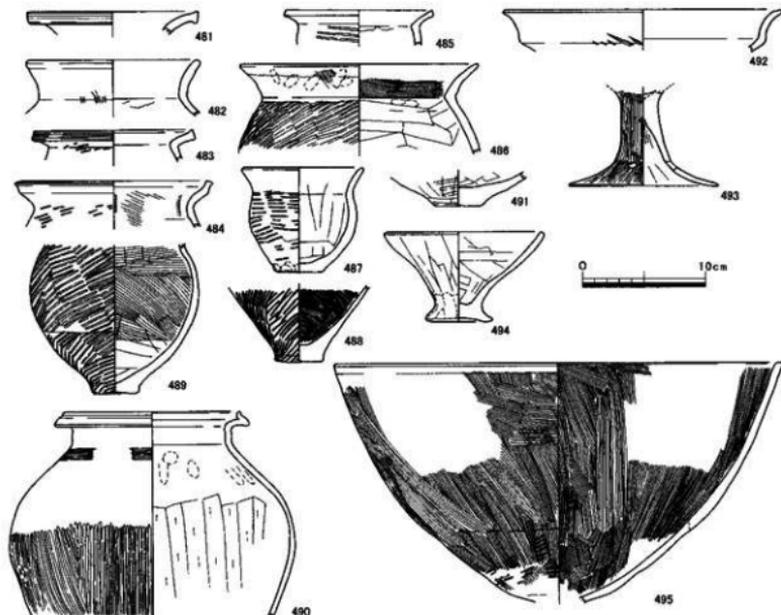
第177図 第Ⅳ層出土遺物実測図

9.8cmを測る小形の468・469がある。463～468の色調は褐灰色～赤褐色。全て胎土中に角閃石を含む生駒西麓産である。469は小形の甕で1/2が残存している。口径9.8cm、器高9.4cm、底径3.3cmを測る。体部は二分制成形で上段が水平方向のタタキ、下段が右上がりのタタキと板ナアが認められる。色調は淡褐灰色。胎土中に1～5mm大の長石・チャートの他、スコープで角閃石の含有を認める。生駒西麓産。463が10調査区VI-5-4A地区、464が9調査区VI-4-3J地区、465が3調査区II-22-7F・G地区、466が9調査区VI-5-3A地区、467・468が10調査区VI-5-4C地区、463が4調査区II-23-8C地区出土。470・471は甕の体部中位から底部にかけて残存している。体部成形は分割によるもので、471の下段と中段の繋ぎ部分には幅1cm前後の補足粘土が帯状に巡る。底部の形状は471が突出、470が突出しない平底で裏面は共にドーナツ底である。471の体部下半から底部に炭化物の付着が認められる。色調は470が赤褐色、471が褐灰色である。胎土中に1～3mm大の長石・石英・角閃石を多く含む。472～478は底部片である。472が壺、473が鉢の他は甕の底部である。底部形状は突出する472～474以外は突出しないもので、裏面は474が平底で他はドーナツ底である。色調は473が赤褐色で、他は淡褐灰色～褐灰色である。胎土中に内眼およびスコープで確認できる角閃石が含まれている。生駒西麓産である。470～472・475が9調査区VI-4-2・3I地区、473・476が10調査区VI-5-4C地区、477が10調査区VI-5-4D地区、478が10調査区VI-5-3A地区出土。479は小形鉢で約1/2が残存している。口径11.6cm、器高4.0cm、底径4.0cmを測る。器壁が厚く全体に雑な作りのもので、体部外面に多数のクラックが認められる。色調は淡灰褐色。胎土中に1mm以下の石英・長石・チャート・角閃石を含む。生駒西麓産。9調査区VI-4-3H地区出土。480は中形鉢で口縁部の約1/2が残存している。口径21.4cmを測る。器面調整はI緑部内外面が横方向のヘラミガキ、体部内外面が縦方向のヘラミガキを行う。色調は浅黄橙色である。胎土中に1mm以下の石英・長石が散見される他、スコープで角閃石の含有が認められる。4調査区II-23-8C地区出土。

・第XV層出土遺物（第178図、図版九五）

15点(481～495)の弥生土器を図化した。時期的には弥生時代後期前半(畿内第V様式前半)を中心としている。器種の内訳は壺3点(481・482・491)、甕8点(483～490)、鉢2点(494・495)、高杯2点(492・493)である。481は広口壺の小破片で、復元口径13.7cmを測る。端部に2条の擬凹線が巡る。色調は淡褐灰色。胎土には1mm以下の長石・角閃石を含む。生駒西麓産。3調査区II-22-7G地区出土。482は口頸部が外反して伸びる直口の広口壺の小破片である。復元口径13.7cmを測る。色調は橙色。胎土にはスコープにより長石・角閃石の含有が観察される。生駒西麓産。10調査区VI-5-3A地区出土。491は壺の底部で裏面はドーナツ底を呈する。色調は淡褐灰色。生駒西麓産。3調査区II-22-7F・G地区出土。483～486は甕の口縁部の小破片である。口縁部の形態では、外傾する端面に2条の擬凹線を持つ483や受け口状を呈する484、外傾し平坦な面を持つ485、丸く終る486がある。体部外面には、タタキ調整が行われている。色調は483～485が褐灰色、486が黄橙色。4点共に角閃石を含む生駒西麓産である。483が11調査区VI-5-5・6F地区、484が11調査区VI-5-5G地区、485が3調査区II-22-7G地区、486が10調査区VI-5-3A地区出土。487は小形甕である。1/2以上が残存しており、口径9.7cm、器高8.0cm、底径4.1cmを測る。体部は二分制成形で上段が水平方向、下段が右上がりのタタキを施す。色調は褐灰色。胎土中に3mm程度の長石が散見される他、0.5mm以下の角閃石が多量に含ま

れている。生駒西麓産である。10調査区VI-5-4A地区出土。488・489は甕の体底部片である。底部は共に突出する平底で、表面は488がドーナツ底、489は表面中央に工具先による刺突の痕跡がある。色調は488が褐灰色、489が赤褐色である。共に生駒西麓産である。488が11調査区VI-5-5・6F地区、489が2調査区II-22-10F地区出土。490は吉備地方を中心に分布する甕である。口縁部から体部下半にかけての約1/2が残存している。復元口径14.2cmを測る。肩部が張る形態の体部から頸部が垂直方向に短く伸び屈折した後、折返して口縁部が作られている。口縁端部は小さく外反し、丸味を持って終る。口頸部内外面はヨコナデ。体部外面は上位がナデ、中位以下は縦方向のミガキ。体部内面は上位がナデ、中位以下は縦方向のヘラケズリを行う。外面全体に煤の付着が認められる。色調は褐灰色。胎土には1mm以下の長石・石英・角閃石の含有が認められる。2調査区II-22-7F地区出土。なお、河内地域においては巨摩・瓜生堂遺跡の沼状遺構上層から類例が出土しており、寺沢・森井氏編年では「河内V-0様式」に位置付けられている。492・493は有稜高杯である。492は杯部の小破片で、復元口径22.3cmを測る。杯口縁部は緩やかに外反して伸びる。口縁比89.2、口縁径13.5を測る。11調査区VI-5-5・6F地区出土。493は高杯の脚部である。裾部径12.0cmを測る。脚部外面は縦方向の密なヘラミガキが施されている。スカシ孔は3個穿たれている。色調は492・493共に褐灰色。胎土中に2mm以下の長石・角閃石を含む。生駒西麓産。11調査区VI-5-6G地区出土。494は台付き鉢である。

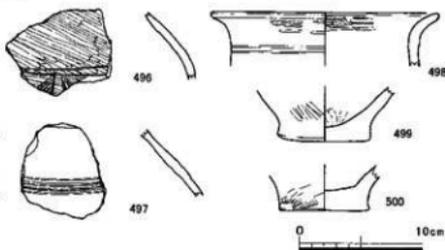


第178図 第Ⅳ層出土遺物実測図

る。口径12.4cm、器高7.1cm、裾部径5.3cmを測る。色調は褐灰色。胎土は精良でスコープにより長石・角閃石の含有を認める。生駒西麓産。10調査区VI-5-4 A地区出土。495は大形の鉢で口縁部は直口を呈する。口縁部の1/3程度が残存しており、復元口径36.1cmを測る。器面調整は体部外面下半にタタキを施す以外は、内外面共にハケを多用している。色調は浅黄橙色。胎土は1mm以下の長石・雲母・角閃石を多量に含む。生駒西麓産。12調査区VI-5-6 H地区出土。

・第Ⅻ層出土遺物（第179図、図版九五）

5点(496~500)の弥生土器を図化した。弥生時代前期(畿内第Ⅰ様式中段階)を中心としている。496・497は広口壺の体部から頸部にかけての小破片である。496は体部の中位に2本のヘラ描き沈線文と木葉文の一部が確認できる。497は体部と頸部の境に3条の削出突帯文が施文されている。496・497共に色調は淡褐灰色、胎土中に0.5mm以下の長石・チャート・角閃石を多く含む。496



第179図 第Ⅻ層出土遺物実測図

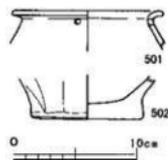
が8調査区VI-4-2 F・G地区、497が8調査区VI-4-1・2 F地区出土。498は広口壺の口頸部の小破片である。復元口径18.2cmを測る。頸部は上半に2条の沈線が巡る。色調は淡褐灰色。胎土中に1mm以下の長石・石英・チャート・角閃石を多量に含む。生駒西麓産。8調査区VI-4-1・2 F地区出土。499・500は底部で、499が壺、500が甕と推定される。共に底部が完存しており、499が底径7.5cm、500が底径7.2cmを測る。色調は褐灰色、500が淡褐灰色である。胎土は共に粗く1~4mm大の長石・石英・角閃石が多く含まれている。生駒西麓産。499・500は共に8調査区VI-4-1・2 F地区出土。

・第Ⅻ層出土遺物（第180図）

弥生土器甕1点(501)を図化した。口縁部が強く外反し内傾する端面を形成している。口縁直下に紐孔が穿たれている。色調は褐灰色。胎土中に0.1~2mm大の長石・角閃石が多く含まれている。時期は弥生時代中期前半に比定される。12調査区VI-5-6 I地区出土。

・第Ⅻ層出土遺物（第180図）

弥生土器の1点(502)を図化した。甕の底部と推定される。色調は褐灰色。胎土中に0.5~3mm大の長石・石英・角閃石が含まれている。生駒西麓産。時期は弥生時代前期後半に比定される。9調査区VI-4-3 J地区出土。



第180図 第Ⅻ層(501)、第Ⅻ層(502)出土遺物実測図

註記

- 註1 松岡良志他 1987『久宝寺南(その1)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 註2 上原真人 1993『木器集成図録 近畿原始篇』『奈良国立文化財研究所 史料第36冊』奈良国立文化財研究所
- 註3 堀江門也他 1981『巨摩・瓜生堂』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター

参考文献

・弥生土器・土師器

- 寺沢 薫・森井貞雄 1989「1河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社
- 原田昌則 1993「第5章まとめ 3)中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」『Ⅱ久宝寺遺跡(第1次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告37(財)八尾市文化財調査研究会
- 原田昌則 2003「第5章 遺構・遺物の検討 第1節 中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器編年試案について」『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書—大阪電筆都市拠点地区電筆東西線4工区に伴う—』(財)八尾市文化財調査研究会報告74 (財)八尾市文化財調査研究会

・須恵器

- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 1981『須恵器大成』角川書店

・古代～中世の土師器

- 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」奈良国立文化財調査研究所学報第32冊
- 古代の土器研究会編 1992『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』
- 古代の土器研究会編 1993『古代の土器Ⅱ 都城の土器集成』
- 佐藤 隆 1992「第2節 平安時代における長原遺跡の動向 ii)長原遺跡における平安時代の土器編年」『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告Ⅴ 市営長吉住宅建設に伴う発掘調査報告書 後編』(財)大阪市文化財協会

・緑釉陶器

- 森 隆 1991「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」『考古学雑誌 第76巻第4号』日本考古学会

・瓦器椀

- 川越俊一 1982「大和地方の瓦器をめぐる二三の問題」『文化財論叢 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』同朋舎

・土馬

- 小笠原好彦 1975「土馬考」『物質文化 考古学民俗学研究』物質文化研究会

・近世井戸

- 河内一浩 1995「讀・近世農耕井戸試考」『関西近世考古学Ⅲ』関西近世考古学研究会

第4章 自然科学的分析

第1節 久宝寺遺跡第22次調査(KH97-22)、第23次調査(KH97-23)に伴う花粉分析

総合科学株式会社 水谷陸彦

1. 調査概要

1) 業務名

久宝寺遺跡第22次調査(KH97-22)、第23次調査(KH97-23)に伴う花粉分析

2) 目的

八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業に先立って行われた、上記の発掘調査地点周辺の環境変化を花粉分析で確認される植生から推定する。なお、花粉分析は弥生時代中期以降に堆積した地層を対象とした。

3) 調査地点

大阪府八尾市大字亀井、渋川

4) 履行期間

平成10年1月7日～平成10年9月30日

5) 分析試料の数量

花粉分析：124点

6) 分析試料の採取位置

分析試料の採取位置を図-2～5の断面図と図-6～9の柱状図に示す。

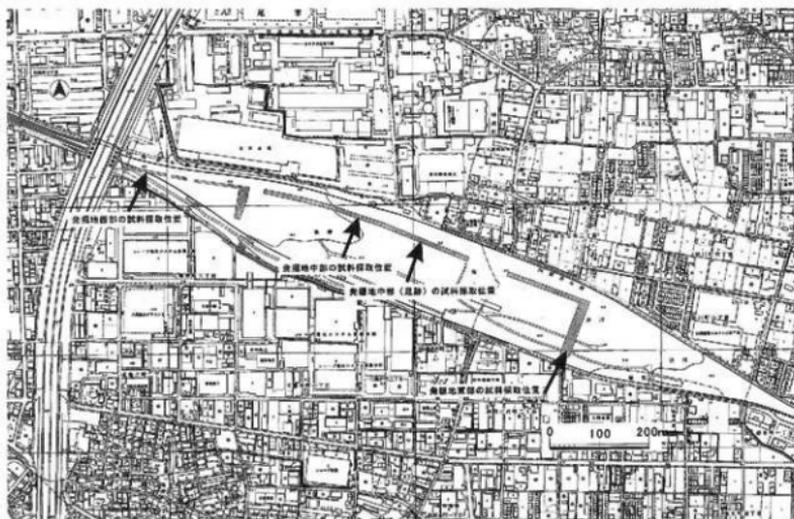


図-1 試料採取位置図

T.P. +5.5m

T.P. +1.5m

T.P. +6.5m

T.P. +5.5m

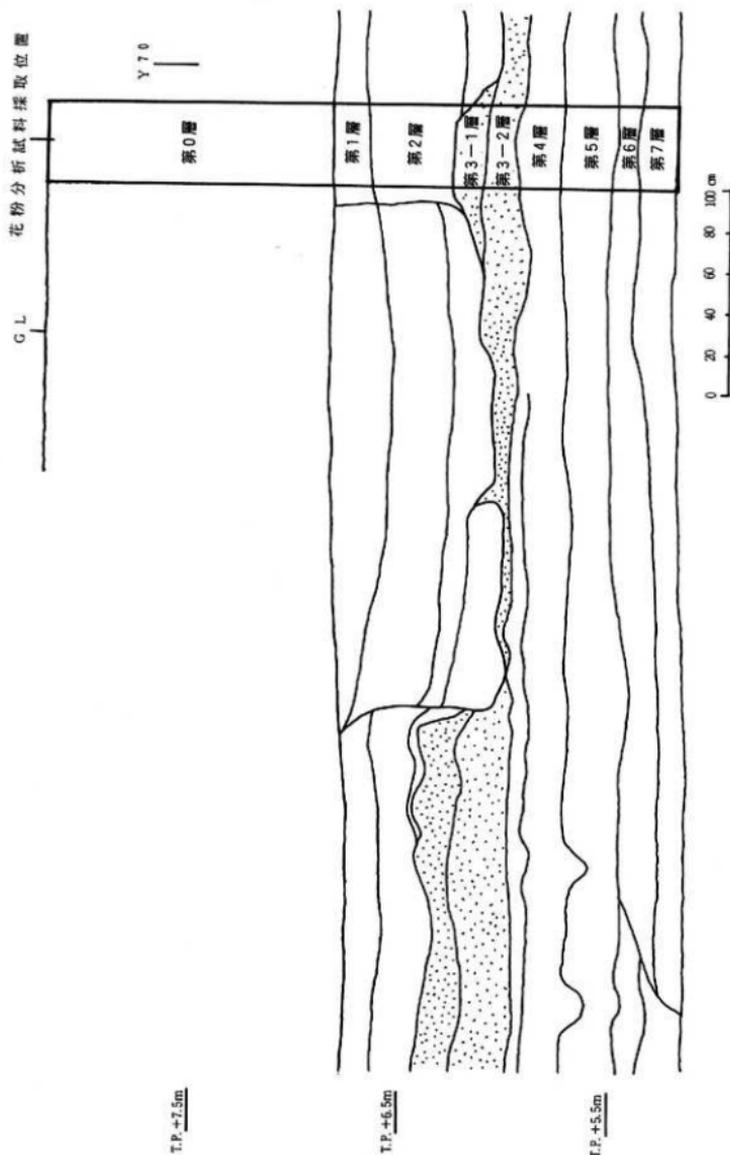


图-2 試料採取位置壁面図(第22次-1調査区 I-25-3G区北壁)、発掘地西部

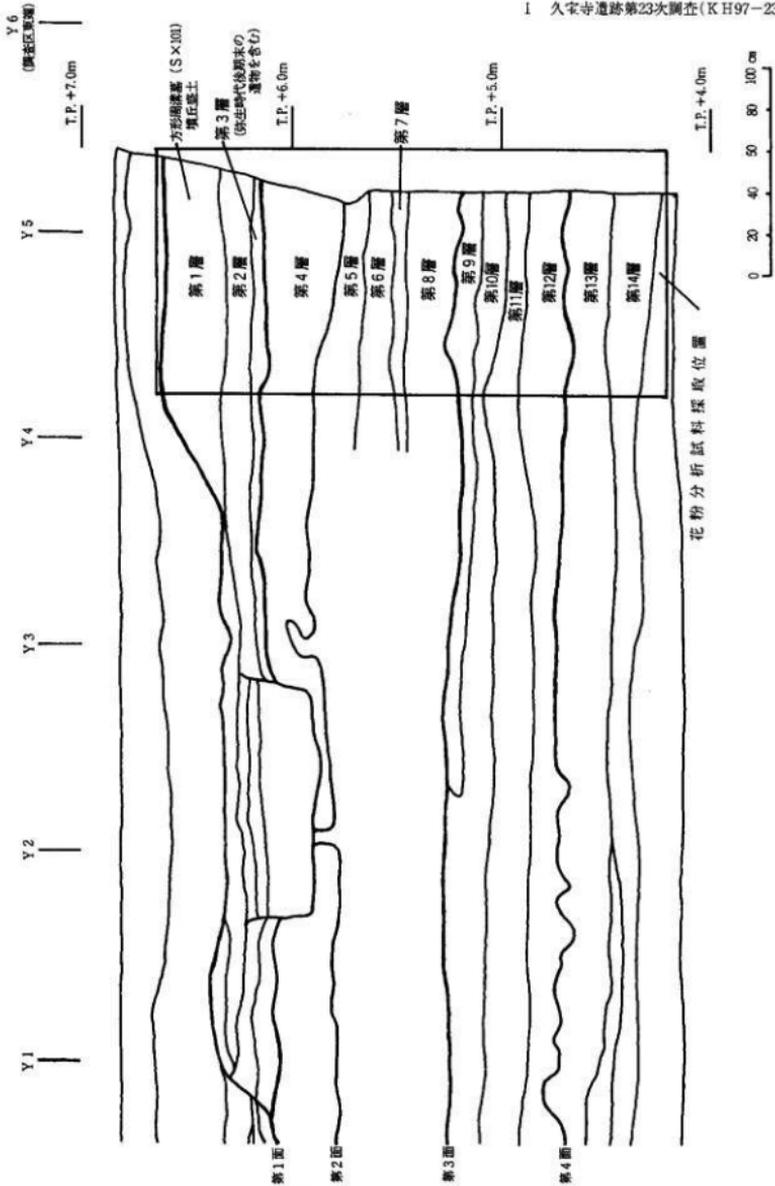


図-3 試料採取位置壁面図(第23次-9調査区 VI-5-3A区北壁)、発掘地中部

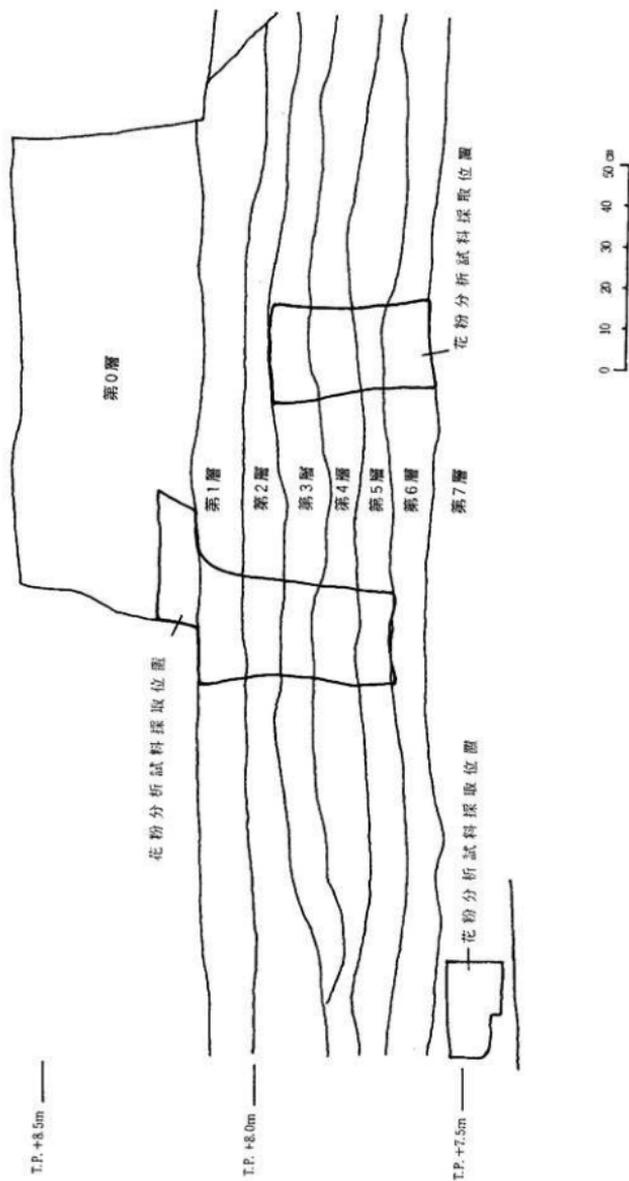


图-4 試料採取位置壁面图(第23次-26調査区 VI-14-7 B区西壁)、発掘地東部

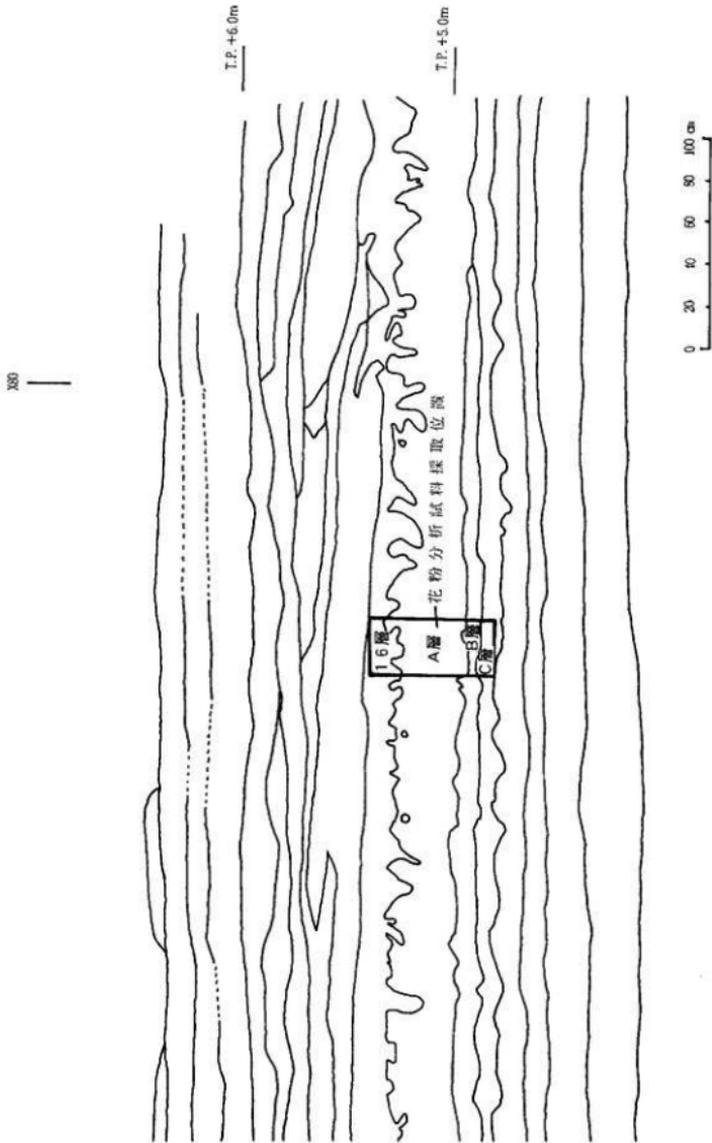
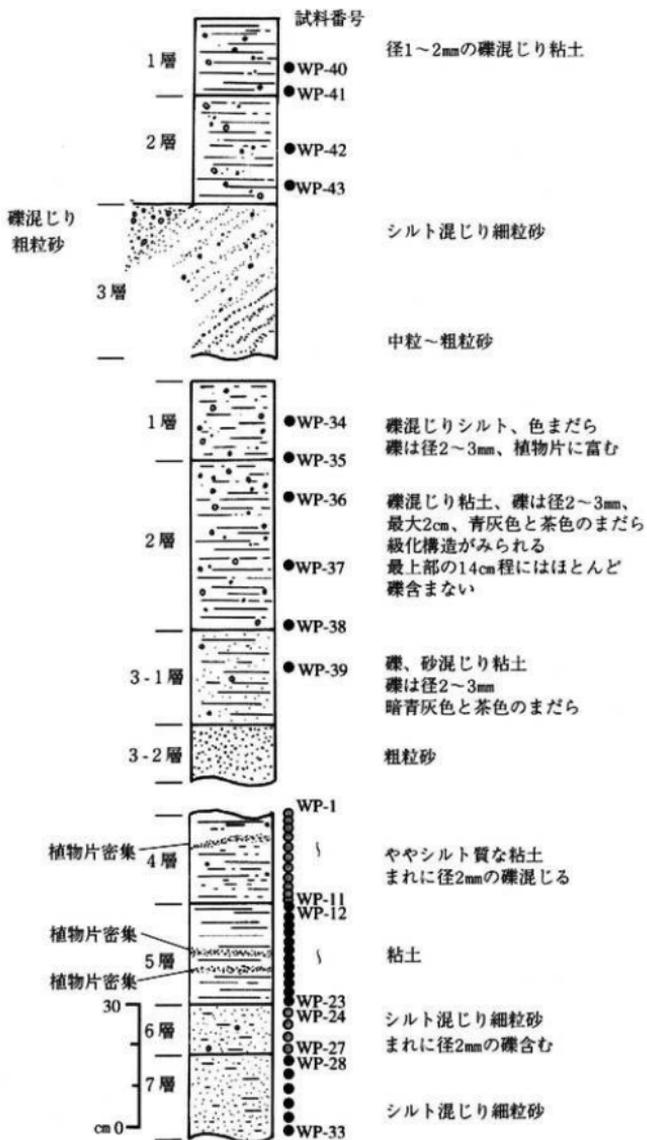
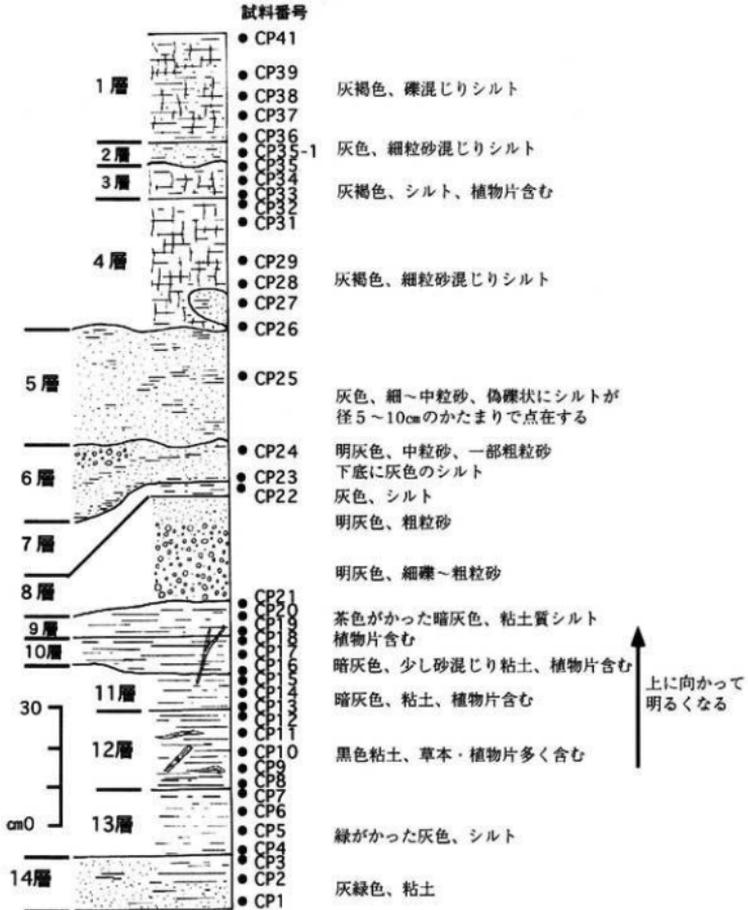


図-5 試料採取位置断面図(第23次-13調査区 VI-1-8 C区東壁)、発掘地中部(足跡)



図一六 試料採取位置柱状図(発掘地西部)



図一七 試料採取位置柱状図(発掘地中部)

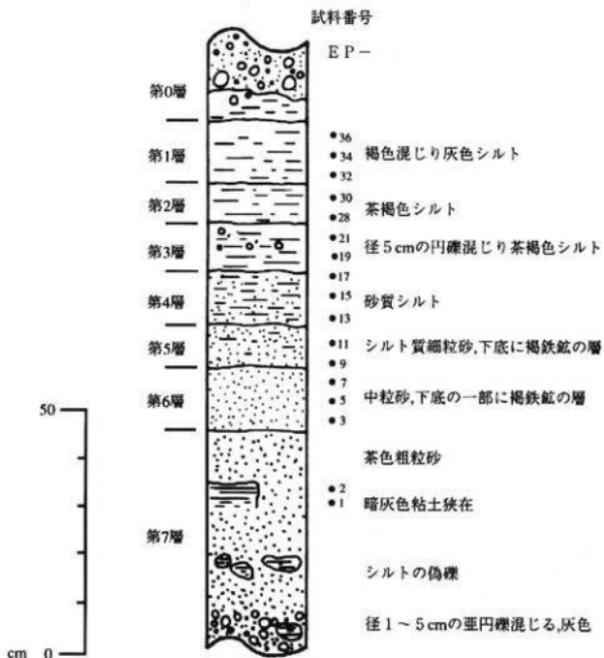


図-8 試料採取位置柱状図(発掘地東部)

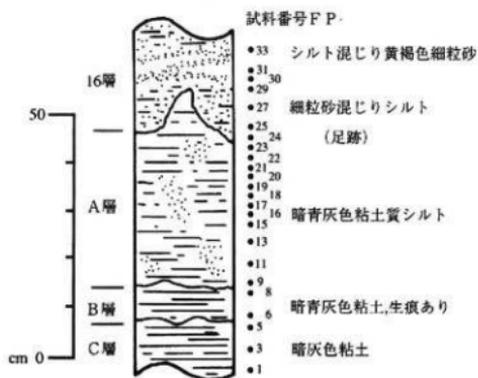


図-9 試料採取位置柱状図(発掘地中部、足跡)

2. 分析方法

試料からの花粉化石抽出およびプレパラートの作成は、以下の手順で行った。

- (1) 湿潤重量を秤量し、約30～50gの試料を10%水酸化カリウム水溶液に室温で1日浸す。
- (2) 砂粒および植物片の除去。
- (3) 傾斜法により粘土鉱物およびフミン酸の除去。
- (4) 蒸発皿処理によるシルト粒および植物片の除去。
- (5) 塩化亜鉛(飽和水溶液)による重液分離(800r. p. mで15分間、その後2000r. p. mで10分間、遠心分離)。
- (6) フッ化水素酸処理(室温で1日)。
- (7) アセトリシス処理(1分間湯煎)。
- (8) グリセリジェリーで封入。
- (9) ネイルエナメルで密封。

上記の方法で各試料2～5枚のプレパラートを作成した。花粉化石の同定は、オリンパスの生物顕微鏡(BH2)で主に400倍(接眼10倍×対物40倍)の鏡下で行った。メカニカルステージを用いて木本花粉の総数が200個を越えるまで同定・計数を行い、その過程で産出する草本花粉およびシダ・コケ孢子についても同定し計数した。出現率の計算は、木本花粉の総数を基数として行った。

3. 分析結果

各々の試料における花粉化石の産出状況を表-1～4に、花粉ダイアグラムを図-10～13に、稀産タクサを表-5～8に示す(ただし、図-12の発掘地東部地区における分析では、ほぼ全ての試料において木本花粉総数が20個未満と少なかった。少しでも産出傾向を視覚的にとられようと、異常な割合を示しながらも花粉ダイアグラムを作成した)。なお、分析試料を採取した地点は大きくみて3箇所(調査地東部、中部、西部)ある。発掘地の西部で採取した試料にはその試料番号の頭に「WP-」を、発掘地の中部で採取した試料にはその試料番号の頭に「CP-」を、発掘地の東部で採取した試料にはその頭に「EP-」をつけて区別した。また、発掘地の中部で人の足跡化石が多数みられた場所でも試料を採取し、それには試料番号の頭に「FP-」を付けた。

表-1 分析重量と花粉化石産出状況(発掘地西部から採取した試料)

| 試料番号 | 分析重量 (湿潤重量、g) | 産出状況 | 試料番号 | 分析重量 (湿潤重量、g) | 産出状況 |
|-------|------------------|------|-------|------------------|------|
| WP-1 | 32.0 | ◎ | WP-23 | 34.0 | ◎ |
| WP-2 | 31.0 | ◎ | WP-24 | 38.3 | △ |
| WP-3 | 31.0 | ○ | WP-25 | 49.4 | △ |
| WP-4 | 33.0 | ◎ | WP-26 | 49.0 | △ |
| WP-5 | 32.0 | ◎ | WP-27 | 52.1 | △ |
| WP-6 | 34.0 | ◎ | WP-28 | 51.1 | △ |
| WP-7 | 33.7 | ◎ | WP-29 | 51.7 | △ |
| WP-8 | 36.0 | ◎ | WP-30 | 48.0 | △ |
| WP-9 | 32.0 | ◎ | WP-31 | 40.3 | △ |
| WP-10 | 35.6 | ◎ | WP-32 | 42.2 | △ |
| WP-11 | 35.0 | ○ | WP-33 | 38.9 | △ |
| WP-12 | 32.0 | ◎ | WP-34 | 33.2 | ○ |
| WP-13 | 35.0 | ◎ | WP-35 | 33.2 | ○ |
| WP-14 | 32.1 | ◎ | WP-36 | 34.5 | ○ |
| WP-15 | 33.5 | ◎ | WP-37 | 33.5 | ○ |
| WP-16 | 35.0 | ◎ | WP-38 | 38.5 | ◎ |
| WP-17 | 34.4 | ◎ | WP-39 | 38.7 | ◎ |
| WP-18 | 33.0 | ◎ | WP-40 | 48.0 | △ |
| WP-19 | 32.3 | ◎ | WP-41 | 37.3 | △ |
| WP-20 | 33.9 | ◎ | WP-42 | 37.6 | △ |
| WP-21 | 32.6 | ◎ | WP-43 | 49.6 | ○ |
| WP-22 | 32.5 | ◎ | | | |

◎:木本花粉200個以上

○:木本花粉50~200個未満

△:木本花粉50個未満

表一 2 分析重量と花粉化石産出状況(発掘地中部から採取した試料)

| 試料番号 | 分析重量 (湿潤重量、g) | 産出状況 | 試料番号 | 分析重量 (湿潤重量、g) | 産出状況 |
|-------|------------------|------|---------|------------------|------|
| CP-1 | 25.3 | ○ | CP-23 | 35.8 | △ |
| CP-2 | 24.3 | ◎ | CP-24 | 36.4 | △ |
| CP-3 | 24.0 | ○ | CP-25 | 34.9 | △ |
| CP-4 | 24.0 | △ | CP-26 | 36.0 | △ |
| CP-5 | 25.2 | ○ | CP-27 | 33.9 | △ |
| CP-6 | 24.6 | ○ | CP-28 | 34.6 | △ |
| CP-7 | 24.8 | ○ | CP-29 | 33.7 | △ |
| CP-8 | 23.9 | △ | CP-31 | 33.1 | △ |
| CP-9 | 25.1 | △ | CP-32 | 34.4 | △ |
| CP-10 | 23.6 | ○ | CP-33 | 34.7 | △ |
| CP-11 | 26.0 | ○ | CP-34 | 34.4 | ○ |
| CP-12 | 25.0 | ◎ | CP-35 | 35.5 | ○ |
| CP-13 | 24.0 | ◎ | CP-35-1 | 34.5 | ◎ |
| CP-14 | 22.8 | ○ | CP-36 | 34.8 | ◎ |
| CP-15 | 25.3 | ◎ | CP-37 | 33.1 | ○ |
| CP-16 | 25.1 | ◎ | CP-38 | 33.8 | ○ |
| CP-17 | 26.2 | ◎ | CP-39 | 34.7 | ○ |
| CP-18 | 23.0 | ○ | CP-41 | 33.5 | △ |
| CP-19 | 25.5 | ◎ | | | |
| CP-20 | 24.4 | ○ | | | |
| CP-21 | 23.1 | ◎ | | | |
| CP-22 | 36.8 | ○ | | | |

◎:木本花粉200個以上
△:木本花粉50個未満

○:木本花粉50~200個未満

表一 3 分析重量と花粉化石産出状況(発掘地東部から採取した試料)

| 試料番号 | 分析重量 (湿潤重量、g) | 産出状況 | 試料番号 | 分析重量 (湿潤重量、g) | 産出状況 |
|-------|------------------|------|-------|------------------|------|
| EP-1 | 30.5 | ◎ | EP-17 | 51.3 | △ |
| EP-2 | 32.0 | △ | EP-19 | 51.9 | × |
| EP-3 | 51.4 | △ | EP-21 | 51.1 | × |
| EP-5 | 51.7 | × | EP-28 | 51.0 | × |
| EP-7 | 51.2 | △ | EP-30 | 50.8 | △ |
| EP-9 | 51.8 | △ | EP-32 | 50.1 | △ |
| EP-11 | 50.3 | △ | EP-34 | 51.2 | △ |
| EP-13 | 51.2 | △ | EP-36 | 51.8 | △ |
| EP-15 | 51.2 | × | | | |

表一 4 分析重量と花粉化石産出状況(発掘地中部で人の足跡化石が見られた場所から採取した試料)

| 試料番号 | 分析重量 (湿潤重量、g) | 産出状況 | 試料番号 | 分析重量 (湿潤重量、g) | 産出状況 |
|-------|------------------|------|-------|------------------|------|
| FP-1 | 30.2 | ○ | FP-19 | 30.0 | ◎ |
| FP-3 | 30.4 | ○ | FP-20 | 30.2 | ◎ |
| FP-5 | 30.3 | ◎ | FP-21 | 30.0 | ◎ |
| FP-6 | 30.0 | ○ | FP-22 | 30.5 | ◎ |
| FP-8 | 29.7 | ◎ | FP-23 | 30.6 | ◎ |
| FP-9 | 30.5 | ◎ | FP-24 | 30.2 | ◎ |
| FP-11 | 30.2 | ◎ | FP-25 | 50.5 | ◎ |
| FP-13 | 30.0 | ◎ | FP-27 | 50.5 | ◎ |
| FP-15 | 30.2 | ◎ | FP-29 | 51.5 | ○ |
| FP-16 | 30.5 | ◎ | FP-30 | 31.2 | ◎ |
| FP-17 | 30.1 | ◎ | FP-31 | 50.7 | ◎ |
| FP-18 | 29.3 | ◎ | FP-33 | 50.4 | ◎ |

◎: 木本花粉200個以上

△: 木本花粉50個未満

○: 木本花粉50~200個未満

×: 木本花粉産出せず

3-1. 発掘地西部の花粉化石群集

発掘地西部において採集した全ての試料から、花粉化石は産出した。ただし、WP-24~33とWP-40~43では、木本花粉の総数が50個以下と少なかった。産出した木本の花粉化石としてはアカガシ亜属(*Cyclobalanopsis*)が多く、それに伴うように広葉樹の花粉ではコナラ亜属(*Quercus*)、クリ属(*Castanea*)、シイ属-マテバシイ属(*Castanopsis-Pasania*)、針葉樹の花粉ではスギ属(*Cryptomeris*)、ヒノキ科(*Cupressaceae*)、モミ属(*Abies*)、ツガ属(*Tsuga*)、コウヤマキ属(*Sciadopitys*)、マキ属(*Podocarpus*)などがあった。二葉マツ類(*Diploxylon*)を主としたマツ属(*Pinus*)は、下半部の地層から採取したWP-1~33ではわずかしこ産出していないが、上半部の地層から採取したWP-34~39では非常に多く産出した。

草本の花粉化石としては、イネ科(*Gramineae*)やカヤツリグサ科(*Cyperaceae*)やイネ属型(*Oryza* type)が多く、オモダカ属(*Sagittaria*)やガマ属(*Typha*)そして上部の地層から採取したWP-34~39ではアブラナ科(*Cruciferae*)が高率でワタ(*Gossypium*)なども産出した。

胞子の化石では単条口の胞子が圧倒的に多く、わずかながら三条口の胞子やコケの胞子が産出した。

3-2. 発掘地中央部の花粉化石群集

発掘地中央部において採集した全ての試料から、花粉化石は産出した。ただし、CP-4、8、9とCP-23~33、CP-41では、木本花粉の総数が50個以下と少なかった。

産出した木本の花粉化石としてはアカガシ亜属が多く、それに伴うように広葉樹の花粉ではコナラ亜属、クリ属、シイ属-マテバシイ属、針葉樹の花粉ではスギ属、ヒノキ科、二葉マツを主としたマツ属、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、マキ属などがあった。

草本化石としては、イネ科やカヤツリグサ科が多く、ガマ属やヨモギ属(*Artemisia*)、セリ科(*Umbelliferae*)が部分的に多く産出した。

胞子の化石では単条口の胞子が圧倒的に多く、わずかながら三条口の胞子やコケ胞子が産出した。

3-3. 発掘調査東部の花粉化石群集

発掘地東部において採取したほとんど全ての試料において、花粉化石が産出した。ただし、EP-1を除く試料では木本花粉の総数が20個以下と非常に少なく、EP-19では花粉も胞子も産出しなかった。

産出した木本の花粉化石としては、広葉樹の花粉でアカガシ亜属やコナラ亜属、クリ属、シイ-マテバシイ属、クマシテ属(*Carpinus*)、ハンノキ属(*Alnus*)、針葉樹ではスギ属や二葉マツ類を主としたマツ属、ツガ属、コウヤマキ属などがあった。

草本の花粉化石としては、イネ科やカヤツリグサ科、アブラナ科があり、上部の地層から採取したEP-30~36ではこれらが非常に多く産出した。

胞子の化石では単条口の胞子が圧倒的に多く、わずかながら三条口の胞子やコケの胞子が産出した。

表一5① 久宝寺遺跡第22次・23次調査 西部地区花粉稀産タクサ

| 試料番号 Sample No | トウヒ属 Picea | ヤナギ属 Salix | エノキ属・ムクノキ属 Celtis-Aphananthe | センダン属 Melia | アカメガシワ属 Malvaceae | アブラギリ属 Alantaria | キハダ属 Phellodendron | モミノキ属 Ilex | カエデ属 Acer | トネノキ属 Aesculus | ノブドウ属 Ampelopsis | ヤブガラシ属 Cayratia | ツタ属 Parthenocissus | シナノキ属 Tilia | ダマ属 Elaeagnus | アキノキ属 Aucuba | ツバジ科 Ericaceae | イボタノキ属 Ligustrum | *トネリコ属 Fraxinus | チエウフキ属 Weigela | スイカズラ属 Lonchocarpus | サトウ属 Punica | エゴノキ属 Styax | ハイノキ属 Symplocos | ツバキ属 Camellia | |
|----------------|------------|------------|------------------------------|-------------|-------------------|------------------|--------------------|------------|-----------|----------------|------------------|-----------------|--------------------|-------------|---------------|--------------|----------------|------------------|-----------------|----------------|---------------------|-------------|-------------|-----------------|---------------|--|
| WP-40 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-41 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-42 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-43 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-34 | | | | | | | | | | | 0.8 | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-35 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-36 | | | 1.1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-37 | | | | | | | | | | | 0.6 | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-38 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-39 | ● | 0.4 | 1.7 | | 0.8 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-1 | | | 1.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-2 | | 0.5 | 0.5 | 0.5 | 0.5 | | | | | | | | | | | | | | 1.3 | | | | | | | |
| WP-3 | 0.6 | | | | | | | | 0.6 | | | | | | | | | | 0.5 | | | | | | | |
| WP-4 | | 0.4 | 0.4 | 0.4 | 0.4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-5 | | | 0.5 | | | | | | ● | | | | 0.9 | ● | | | | | | | | | | | | |
| WP-6 | | | 1.4 | 0.9 | 0.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-7 | | ● | 2.0 | 0.9 | 0.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-8 | | | 0.4 | ● | 1.2 | | | | 0.4 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-9 | | | 0.9 | 0.9 | 0.4 | | | | 0.4 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-10 | | | | | 0.4 | | | | 0.4 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-11 | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0.7 | | | | | |
| WP-12 | | 0.4 | | | | | ● | 0.4 | | 0.4 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-13 | | | 0.5 | | | | | 0.7 | | 1.0 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-14 | 0.5 | 0.5 | 1.4 | | | | | 0.5 | 0.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-15 | | 1.1 | 2.5 | | | | | 0.9 | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-16 | | | 1.3 | | | | | 0.9 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-17 | 0.4 | 0.8 | 0.4 | | | | | 0.8 | | 0.4 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-18 | | 0.4 | 0.7 | | | | | 0.7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-19 | | | 0.4 | | | | | ● | 0.4 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-20 | | | 0.9 | 0.5 | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-21 | 0.4 | ● | 1.1 | 0.4 | ● | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-22 | | | 0.5 | 1.0 | | | | 0.5 | 0.5 | | | | | | | | | 0.4 | 0.4 | | | | | | | |
| WP-23 | | 0.4 | 0.4 | | 0.4 | | ● | 0.8 | 1.2 | | | | | | | | 0.4 | 1.9 | | | | | | | | |
| WP-24 | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-25 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-26 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | | | | |
| WP-27 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-28 | | | | | * | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-29 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-30 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-31 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | |
| WP-32 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WP-33 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

*：本花粉の総数が50個未満のため、%表示していないタクサ

●：計数の過程外で検出されたタクサ

単位：%

表-5③ 久宝寺遺跡第22次・23次調査 西部地区花粉稀産タクサ

| 試料番号 Sample No. | サフマイモ属 <i>Iponoea</i> | ミズナキハコ属 <i>Ondelia</i> | ホトトギス属 <i>Xanthium</i> | ミズウラボシ属 <i>Ceratopteris</i> | ワタ属 <i>Gossypium</i> |
|-----------------|-----------------------|------------------------|------------------------|-----------------------------|----------------------|
| WP-40 | | | | | |
| WP-41 | | | | | |
| WP-42 | | | | | |
| WP-43 | | | | | |
| WP-34 | ● | 2.4 | | | |
| WP-35 | | | | 0.7 | 2.1 |
| WP-36 | | | | | 1.7 |
| WP-37 | ● | | | | |
| WP-38 | | | | | |
| WP-39 | | 1.3 | | | 1.7 |
| WP-1 | | | | ● | |
| WP-2 | | | | | |
| WP-3 | | | | | |
| WP-4 | | | | | |
| WP-5 | | | | | |
| WP-6 | | 0.9 | | | |
| WP-7 | | | | | |
| WP-8 | | | | | |
| WP-9 | | | | | |
| WP-10 | | | | | |
| WP-11 | | | | | |
| WP-12 | | | | | |
| WP-13 | | | | | |
| WP-14 | | | | | |
| WP-15 | | | | | |
| WP-16 | | | | | |
| WP-17 | | | | | |
| WP-18 | | | | | |
| WP-19 | | | | | |
| WP-20 | | | | | |
| WP-21 | | | | | |
| WP-22 | | | | | |
| WP-23 | | | | | |
| WP-24 | | | | | |
| WP-25 | | | | | |
| WP-26 | | | | | |
| WP-27 | | | | | |
| WP-28 | | | | | |
| WP-29 | | | | | |
| WP-30 | | | | | |
| WP-31 | | | | | |
| WP-32 | | | | | |
| WP-33 | | | | | |

* : 木本花粉の総数が50個未満のため、%表示していないタクサ

● : 計数の過程外で検出されたタクサ

単位 : %

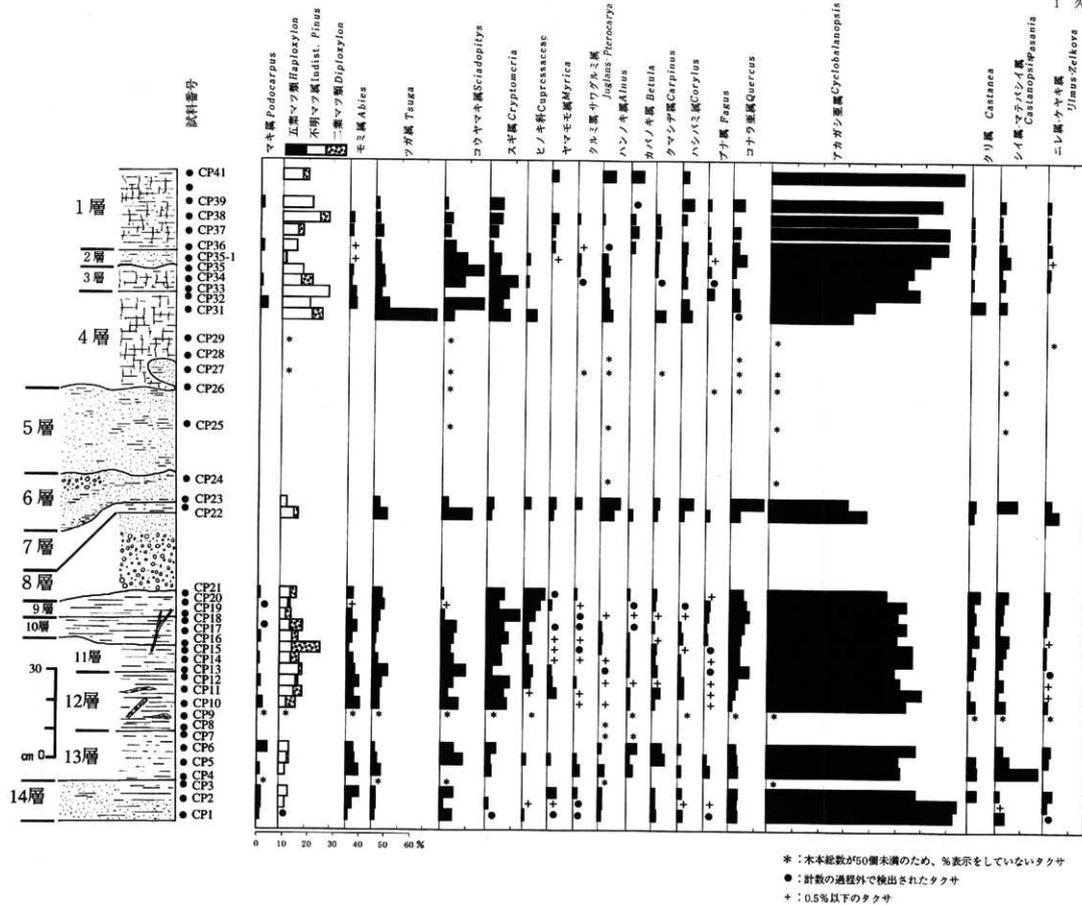


図-11① 久宝寺遺跡第22次・23次調査 花粉ダイアグラム(23次-9調査区、VI-5-3 A区北壁、調査地中部)

表一6① 久宝寺遺跡第22次・23次調査 中部地区花粉稀産タクサ

| CP 試料番号 Sample No. | トウヒ属 Picea | ヤナギ属 Salix | ユキノキ属 ユキノキ科 Celtis-Aphananthe | セシラン属 Melia | アカメガシワ属 Malvaceae | キハダ属 Phellodendron | モチノキ属 Ilex | カエデ属 Acer | トチノキ属 Anacardium | ツタ属 Parthenocissus | シナノキ属 Tilia | ゾウノ属 Elaeagnus | アオキ属 Aucuba | ツツジ科 Ericaceae | イボタノキ属 Ligustrum | スイカズラ属 Lonicera | ハインキ属 Symplocos | ツバキ属 Camellia | フグ属 Fagopyrum | ササノキ科 ユキノキ科 Cactaceae | アザミ科 Compositaceae | ナデシコ科 Caryophyllaceae | カタマツソウ属 Thalictrum | Pericaria-Echinocaulon |
|--------------------|------------|------------|-------------------------------|-------------|-------------------|--------------------|------------|-----------|------------------|--------------------|-------------|----------------|-------------|----------------|------------------|-----------------|-----------------|---------------|---------------|-----------------------|--------------------|-----------------------|--------------------|------------------------|
| CP-41 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-39 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-38 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-37 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-36 | | 0.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-35-1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-35 | 0.7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-34 | | | 0.9 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-33 | | | 2.6 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-32 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-31 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-29 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-28 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-27 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-26 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-25 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-24 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-23 | | 2.6 | 2.6 | 2.6 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-22 | 1.7 | 1.7 | 5.2 | 1.9 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-21 | | 1.0 | 1.9 | 0.7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-20 | 0.6 | 2.2 | 1.7 | 0.6 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-19 | | 1.0 | 1.9 | 0.7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-18 | | | 0.7 | 0.7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-17 | | | 0.7 | 0.7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-16 | | | 1.3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-15 | | 0.4 | 1.1 | 0.7 | 0.4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-14 | | 0.6 | 1.9 | 0.4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-13 | | | 0.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-12 | | | 0.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-11 | | | 2.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-10 | | | | 1.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-9 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-8 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-6 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-5 | | | 2.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-3 | | | 1.8 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-2 | 0.5 | 2.3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-1 | 3.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

* : 木本花粉の総数が50個未満のため、%表示していないタクサ

● : 計数の過程外で検出されたタクサ

単位 : %

表一6② 久宝寺遺跡第22次・23次調査 中部地区花粉産タクサ

| 試料番号 Sample No | Rosaceae | バラ科 | Sanguinaria | ワレモコウ属 | Leguminosae | マメ科 | Cerastium | フクロソウ属 | Trapa | ヒシ属 | Mizukentzia | Ludwigia | Nymphaeoides | アサガ属 | Actinostemma | ゴキブリ属 | Tanacetum | タンポポ科 | Alisma | サジメモタ科 | Ceratophyllum | ミズワラビ属 | Calyssegia | Gossypium | Rhus | ウルシ属 | | |
|----------------|----------|-----|-------------|--------|-------------|-----|-----------|--------|-------|-----|-------------|----------|--------------|------|--------------|-------|-----------|-------|--------|--------|---------------|--------|------------|-----------|------|------|--|--|
| CP-41 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-39 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-37 | 0.8 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-36 | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-35-1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-35 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-34 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-33 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-32 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-31 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-29 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-28 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-27 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-26 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-25 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-24 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-22 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-21 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-20 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-19 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-18 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-17 | | 0.7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-16 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-15 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-14 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-13 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-12 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-9 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-8 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-6 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-5 | 1.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CP-1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

*: 木本花粉の総数が50個未満のため、%表示していないタクサ

●: 計数の過剰外で検出されたタクサ

単位: %

表一7② 久宝寺遺跡第22次・23次調査 東部地区花粉稀産タクサ

| 試料番号 Sample No | ナデシコ科 Caryophyllacea | マメ科 Leguminosae | タンポポ科 Asteraceae | セトウチ科 Cichorioideae | ガマ属 Typha | サジメタカ属 Alisma | オモダカ属 Sagittaria | ミズワラビ属 Centaureis | ワタ属 Gossypium | キキョウ属 Platycodon | スベリヒユ科 Portulacaceae |
|----------------|----------------------|-----------------|------------------|---------------------|-----------|---------------|------------------|-------------------|---------------|------------------|----------------------|
| EP-36 | 263.9 | | | | | | | | | | |
| EP-34 | 88.9 | | | 13.9 | | | | | | | |
| EP-32 | 200.0 | 12.5 | | 12.5 | | | | | | | |
| EP-30 | 41.7 | | | | | | | | | | |
| EP-28 | ● | | | | | | | | | | |
| EP-21 | | | | | | | | | | | |
| EP-17 | 66.7 | | | 33.3 | | | | | | | |
| EP-15 | ● | | | | | | | | | | |
| EP-13 | | | | | | | | | | | |
| EP-11 | | | | | | | | | | | |
| EP-9 | 16.7 | | | | | | | | | | |
| EP-7 | | | | | | | | | | | |
| EP-5 | | | | | | | | | | | |
| EP-3 | | | | | | | | | | | |
| EP-2 | | | | | | | | | | | |
| EP-1 | 1.6 | | | | 0.4 | ● | ● | | | | |

* : 木本花粉の総数が50種未満のため、%表示していないタクサ

● : 計数の過程外で産出したタクサ 単位 : %

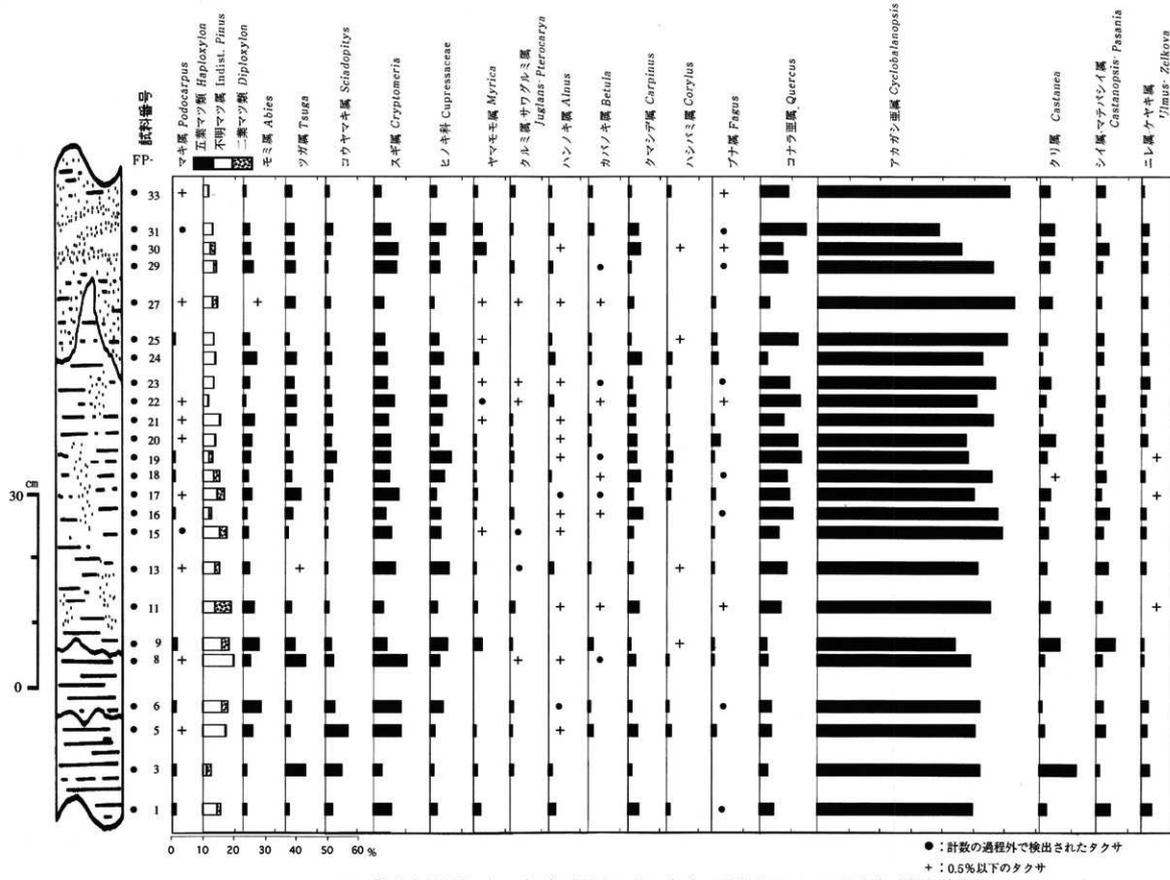


図-13① 久宝寺遺跡第22次・23次調査 花粉ダイアグラム(23次-13調査区、VII-1-8 C区東壁、発掘地中部足跡)

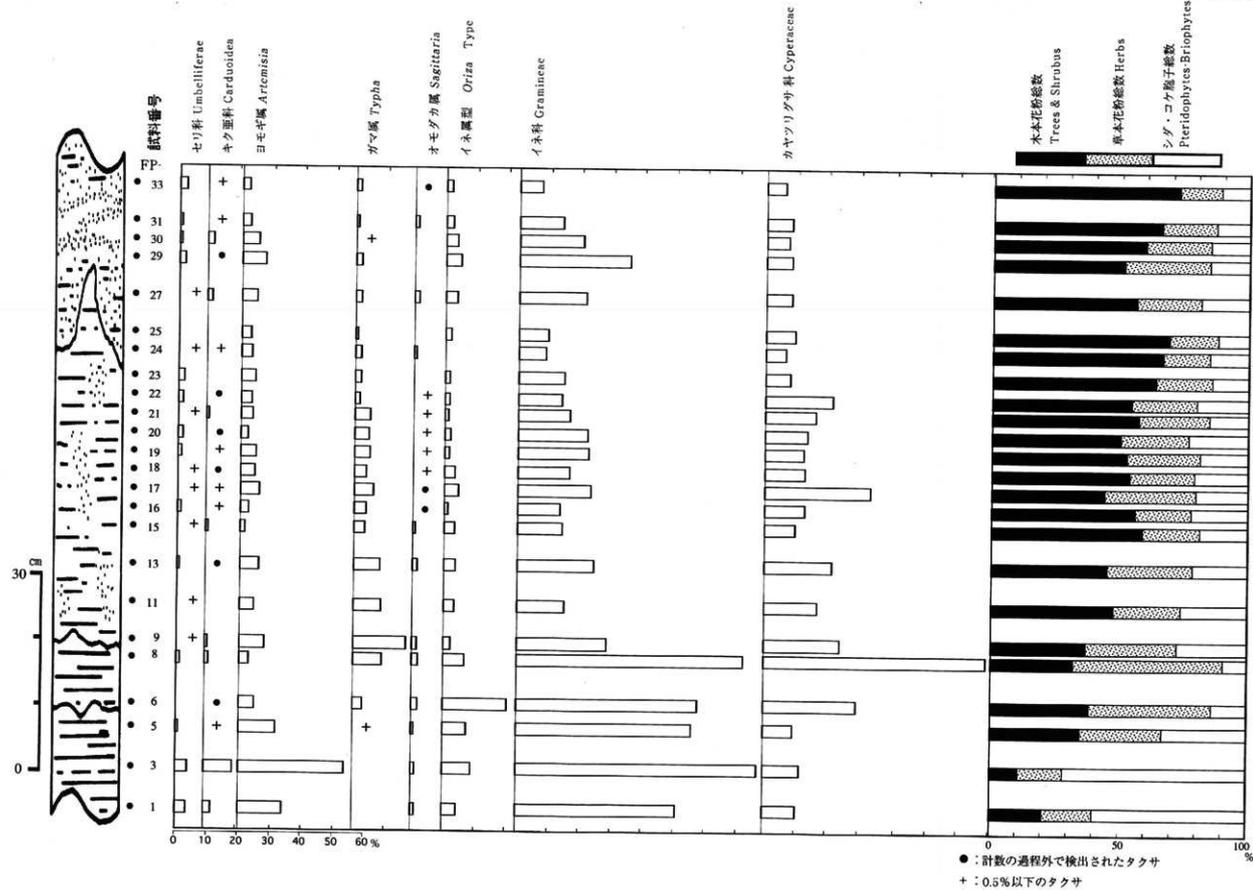


図-13② 久宝寺遺跡第22次・23次調査 花粉ダイアグラム(23次—13調査区、VI—1—8 C区東壁、発掘地中部足跡)

表-8① 久宝寺遺跡第22次・23次調査 中部(足跡)花粉種産タクサ

| 試料番号 Sample No | トウヒ属 Picea | ヤナギ属 Salix | エノキ属・ムクノキ属 Celtis-Aphananthe | センダン属 Melia | アカシガシワ属 Malvaceae | キハダ属 Phellodendron | モチノキ属 Ilex | カエデ属 Acer | トチノキ属 Aesculus | ツタ属 Parthenocissus | シナノキ属 Tilia | グミ属 Elaeagnus | アオキ属 Aucuba | ツツジ科 Ericaceae | イガタノキ属 Ligustrum | スイカズラ属 Lonicera | ハインキ属 Symplocos | ソバ属 Fagopyrum | イブキトラノオ属 Bistorta | サナエタデ属・ウナギワカミ属 Pericaria-Echinocaulon | アザミ科 Chenopodiaceae | |
|----------------|------------|------------|------------------------------|-------------|-------------------|--------------------|------------|-----------|----------------|--------------------|-------------|---------------|-------------|----------------|------------------|-----------------|-----------------|---------------|-------------------|---------------------------------------|---------------------|-----|
| FP-33 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-31 | 0.5 | 0.9 | 4.2 | 0.5 | 0.4 | 0.4 | 0.7 | 0.4 | 0.4 | 0.5 | | | | | | | | | | | | |
| FP-30 | | 1.8 | 0.1 | | | 0.6 | 1.2 | | 0.6 | 0.1 | | | | | | | | | | | | |
| FP-29 | 0.5 | 0.5 | 3.4 | 0.5 | | 0.5 | 2.4 | | 0.5 | 0.5 | | | | | | | | | | | | |
| FP-27 | | 0.3 | 0.3 | | | | 0.3 | 0.9 | 0.3 | 0.3 | | | | | | | | | | | 0.4 | 0.5 |
| FP-25 | | 0.5 | 0.5 | | | | 0.5 | | 0.5 | 0.5 | | | | | | | | | | | 0.8 | 1.0 |
| FP-24 | | 0.5 | 1.4 | | | | 1.9 | | 0.5 | 1.4 | | | | | | | | | | | 0.5 | 0.5 |
| FP-23 | | 0.4 | 1.2 | | | | 1.6 | | 0.8 | 0.8 | | | | | | | | | | | 0.5 | 0.5 |
| FP-22 | | 1.4 | 1.9 | | | | 0.9 | | | 0.5 | | | | | | | | | | | 0.9 | 0.9 |
| FP-21 | | | 1.8 | | | | 0.0 | | | 0.3 | | | | | | | | | | | 0.7 | 0.3 |
| FP-20 | | 1.1 | 1.8 | | | 0.4 | 0.4 | 0.7 | | | | | | | | | | | | | 1.1 | 0.4 |
| FP-19 | | 0.7 | 1.4 | | | | 0.3 | | | | | | | | | | | | | | 0.7 | 0.7 |
| FP-18 | | | 1.4 | | | | | 0.4 | 0.4 | | | | | | | | | | | | 0.4 | 0.4 |
| FP-17 | | | 3.5 | | 0.5 | 0.5 | | | | | | | | | | | | | | | 0.4 | 0.4 |
| FP-16 | ● | 0.4 | 1.1 | | 0.4 | 0.4 | 0.4 | | | | | | | | | | | | | | 2.0 | 0.4 |
| FP-15 | | | 2.3 | 0.5 | | | 0.5 | 1.4 | | | | | | | | | | | | | 0.5 | 0.5 |
| FP-13 | | 0.5 | 2.3 | 0.9 | ● | | 0.5 | 0.5 | 0.5 | | 0.5 | | | | | | | | | | 0.9 | 0.5 |
| FP-11 | | | 2.4 | 0.5 | | | | 0.5 | | | | | | | | | | | | | 1.0 | |
| FP-9 | | 0.5 | 2.7 | | | | | | 0.5 | | | | | | 0.5 | | | | | | 8.7 | |
| FP-8 | | 0.4 | 2.0 | 0.8 | | | | 0.8 | | | | | | | | | | | | | 1.0 | |
| FP-6 | | | 1.8 | | 0.6 | | 0.1 | | | | | | | | | | | | | | 0.6 | |
| FP-5 | | | 0.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2.3 | |
| FP-3 | | | 1.3 | | 1.3 | | | | | 1.3 | | | | | | | | | | | 3.9 | |
| FP-1 | | | 3.5 | 1.2 | | | | | | | | | | | | | | | | | 4.6 | |

●: 計数の過程外で検出されたタクサ

単位: %

表-8② 久宝寺遺跡第22次・23次調査 中部(足跡)花粉稀産タクサ

| 試料番号 Sample No. | ナデシコ科 Caryophyllaceae | カラマツ科 Thalictrum | バラ科 Rosaceae | アブラナ科 Cruciferae | フレモコ科 Sanguisorba | マメ科 Leguminosae | フリフネ科 Impatiens | ヒシ科 Trapa | ミズエキノシタ科 Ludwigia | Ericaceae | フサモ科 Myriophyllum | アサザ科 Nymphaeales | ヒツジグサ科 Nymphaea | シソ科 Labiateae | ゴキツル科 Actinostemma | タンポポ科 Cichorioideae | サジメ科 Alisma | ミズウラボシ科 Ceratopteris | ジャケツイバラ科 Caesalpinia | チヂミ科 Althaea |
|-----------------|-----------------------|------------------|--------------|------------------|-------------------|-----------------|-----------------|-----------|-------------------|-----------|-------------------|------------------|-----------------|---------------|--------------------|---------------------|-------------|----------------------|----------------------|--------------|
| FP-33 | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-31 | 0.8 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-30 | ● | | 0.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-29 | 0.6 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-27 | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-25 | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-24 | 0.9 | | | | 0.5 | 0.3 | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-23 | | | | 0.4 | | 0.4 | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-22 | | | | 0.5 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-21 | | | | | | 0.6 | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-20 | 0.7 | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | |
| FP-19 | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-18 | ● | | | | | 0.4 | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-17 | ● | | | 0.5 | | | | 0.5 | | | | | | | | | | | | |
| FP-16 | ● | | | 0.4 | | 0.4 | | 0.4 | | | | | | | | | | | | |
| FP-15 | 0.5 | | 0.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-13 | 0.0 | | 0.9 | | | 0.9 | | ● | | 0.5 | | | | | | | | | | |
| FP-11 | 0.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-9 | | | | | | 0.5 | | | | | 0.5 | | | | | | | | | |
| FP-8 | 0.4 | | | 0.4 | | 0.4 | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-6 | 1.2 | 1.2 | | 0.6 | | 1.8 | | ● | 0.1 | | | | | 2.0 | 3.1 | 0.4 | | | | |
| FP-5 | 0.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-3 | 3.9 | | | 1.3 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| FP-1 | 2.3 | | | | | | | | | | 0.5 | | 1.3 | | | | | | | |

●：計数の過程外で検出されたタクサ

単位：%

3-4. 発掘地中部、人の足跡化石が多く見られた場所の花粉化石

発掘調査中部で人の足跡化石が多数見られた場所から採取し分析した全ての試料から、花粉化石は産出した。

産出した木本の花粉化石としてはアカガシ亜属が多く、それに伴うように広葉樹の花粉ではコナラ亜属、クリ属、シイ、シイ属-マテバシイ属、針葉樹の花粉ではスギ属、ヒノキ属、二葉マツ類を主としたマツ属、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、マキ属などがあつた。

草本の花粉化石としては、一般的にイネ科やカヤツリグサ科が多く、下部の地層から採集したFP-1や3ではヨモギ属が、中部の地層から採集したFP-6~21ではガマ属がやや多く産出した。

胞子の化石では単条口の胞子が圧倒的に多く、わずかながら三条口の胞子やコケの胞子が産出した。

4. 古植生・古気象

4-1 発掘地西部

(1) 分帯

発掘地西部で試料を採取した地層は、花粉化石群に基づいて下位よりKW I帯(WP-24~33)、KW II帯(WP-1~23)、KW III帯(WP-34~39)、KW III帯(WP-40~43)に分帯される。各花粉帯の花粉化石群の特徴は次の通りである。

KH I帯 (WP-24~33)

木本花粉の産出が少ない。産出しているものとしてはアカガシ亜属やコナラ亜属やブナ属、ハシバミ属、クリ属、シイ属-マテバシイ属、スギ属、ヒノキ科、コウヤマキ属、二葉マツ類を主としたマツ属などである。この帯の下半部であるWP-29~33では草本花粉の産出も少なく、上半部であるWP-24~28では草本花粉が高率である。上半部での草本花粉の種類としては、イネ科やカヤツリグサ科、イネ属型、ヨモギ属などがある。

KH II帯 (WP-1~23)

アカガシ亜属が高率で優占し、コナラ亜属やスギ属、ヒノキ科、二葉マツ類を主としたマツ属などが伴われる。その他、クリ属やシイ属-マテバシイ属、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属なども低率ながら産出している。草本花粉ではイネ科が非常に高率で優占し、カヤツリグサ科やイネ属も比較的高率でオモダカ属やガマ属などが伴われる。

KH III帯 (WP-34~39)

二葉マツ類を主としたマツ属が高率で優占し、その他はアカガシ亜属やクリ属、スギ属などわずかに伴われるだけである。草本花粉ではイネ科が非常に高率で優占し、イネ属型やアブラナ科なども高率である。

KH IV帯 (WP-40~43)

木本花粉、草本花粉そして胞子すべての産出が少ない。

(2) 古植生・古気象

各帯ごとに古植生と古気候を考える。

KH I帯の時代

木本花粉の産出が少ないが産出している花粉化石の種類構成から、遺跡周辺の植生、気候ともにKHⅡの時代と同じであると考えられる。

KHⅡ帯の時代

遺跡周辺の植生はアカガシ亜属が優占しクリ属やシイ属-マテバシイ属などが混じる常緑広葉樹林で、後背地である生駒山地あるいは金剛山地の高標部にはモミ属やツガ属、コウヤマキ属、スギ属、ヒノキ科などからなる中間温帯林があったと考えられる。また、スギ属については、扇状地性の場所で常緑広葉樹林に混じていた可能性も考えられる。

四集粒の状況でガマ属の花粉化石が産出し草本花粉が高率であることから、試料採取地の近傍の植生はイネ科が優占しカヤツリグサ科やガマ属が混じる湿性の草地であったと考えられる。この草地のなかには、水田雑草としてもみられるオモダカ属を伴ってイネ属型が産出していることから、水田もあった可能性がある。特に、WP-23やWP-4~13ではイネ属型が高率に産出し、試料採取地近傍に水田があったと考えられる。

このイネ属型の花粉が高率に産出する試料では、他の試料に比べてアカガシ亜属のみが低率である。特にWP-4~10では、上位に向かって減少傾向がみられる。稲作が行われると共に集落が大きくなり、周囲の林を切り開いたと考えられる。

気候は、植生帯区分による暖温帯に属し、現在の大阪平野と同じぐらいの暖かさであったと考えられる。

KHⅢ帯の時代

遺跡周辺の植生は、アカガシ亜属の優占する常緑広葉樹林から、二葉マツ類と考えられるマツ属の優占する林に移り変わっていったと考えられる。この帯の地層は、肥前系の焼き物が出土することから江戸時代に堆積したものと考えられ、前述のマツ属が優占する林は常緑広葉樹を伐採した後のアカマツの二次林であると思われる。

イネ属型の花粉が高率であることから、この帯の時代にも試料採取地周辺では稲作をしていたと考えられる。しかし、KHⅡ帯のようなオモダカ属やガマ属といった湿性草木の花粉が伴わず、イネ科やカヤツリグサ科などに比べれば花粉の生産量が非常に少ない虫媒花のアブラナ科が高率であることから、試料採取地近傍は畑でアブラナを栽培していた可能性がある。また、この帯でのみワタ属が産出し、ソバ属が産出することから、この帯の地層が堆積した時代、遺跡の近くでワタやソバなども栽培されていたと考えられる。これは、出土した遺物から推定される地層の堆積時代と矛盾しない。

KWⅣ帯の時代

花粉化石がほとんど産出しないので、考察できない。

4-2 発掘地中部

(1) 分帯

発掘地中部で試料を採集した地層は、花粉化石群集に基づく花粉帯としてはKCI帯のひとつの帯でまとめられる。この帯の花粉化石群の特徴は、アカガシ亜属が非常に高率で広葉樹としてはコナラ亜属、クリ属、シイ属、シイ属-マテバシイ属など、針葉樹としてはスギ属、ヒノキ属、二葉マツ類を主としたマツ属、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属などが伴って産出していることで

ある。さらにこの帯は、下位より a 亜帯(CP-1~9)、b 亜帯(CP-10~23)、c 亜帯(CP-24~29)、d 亜帯(CP-31~41)に細分される。各花粉帯の花粉化石群集の特徴は次の通りである。

a 亜帯 (CP-1~9)

木本花粉の産出が少なく、下半部では胞子が、上半部では草本花粉が高率である。木本花粉の産出特徴は帯全体と同じである。草本花粉が高率となる上半部では、イネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属が高率である。

b 亜帯 (CP-10~23)

a 亜帯に比べスギ属と二葉マツ類を主としたマツ属が少し増加し、ヒノキ科やコナラ亜属なども上位に向かってわずかに増加傾向が見られる。最上部を除けばこの帯でも、イネ科やカヤツリグサ科そしてガマ属など草本花粉が高率である。

c 亜帯 (CP-24~29)

胞子が多く、木本花粉の産出が非常に少ない。産出している木本花粉としては、帯全体とほぼ同じでアカガシ亜属やコナラ亜属、シイ属-マテバシイ属、マツ属、コウヤマキ属がある。

d 亜帯 (CP-31~41)

木本花粉については b 亜帯と同じ特徴である。草本花粉ではイネ科が高率で、この亜帯の下半部ではヨモギ属やセリ科も高率である。b 亜帯で高率だったガマ属やカヤツリグサ科は減少して低率である。

(2) 古植生・古気象

KCI 帯の時代、遺跡周辺の植生はアカガシ亜属が優占しクリ属やシイ属-マテバシイ属などが混じる常緑広葉樹で、後背地である生駒山地あるいは金剛山地の標高部にはモミ属やツガ属、コウヤマキ属、スギ属、ヒノキ科などからなる中間温帯林があったと考えられる。また、スギ属については、扇状地性の場所で常緑広葉樹林に混じっていた可能性も考えられる。

試料採取地近傍にはイネ科とカヤツリグサ科が優占する草地があったと考えられる。この草地は、a 亜帯の時代ではヨモギ属が高率なことからこの帯の中で一番乾燥した状態で、b 亜帯の時代では再びヨモギ属が高率となりガマ属は低率となるがセリ科も高率なことから b 亜帯よりは乾燥した状態になるがまだ湿っていて後半になると a 亜帯が同じぐらい乾燥した草地になると考えられる。

イネ科が高率で低率ながらイネ属型が産出している。また、水田雑草としてもみられるオモダカ属やサジオダカ属、ゴキツル属などが伴われることから、試料採取地近傍では稲作がおこなわれていたと思われる。

気候は、植生帯区分による暖温帯に属し、現在の大阪平野と同じぐらいの暖かさであったと考えられる。亜帯ごとに比べたとき、a 亜帯に比べて b 亜帯と d 亜帯でコナラ亜属やブナ属などの冷温帯落葉広葉樹の花粉が増加するが、中間温帯の要素であるモミ属とツガ属は全く変化しないことから、気候の変化はない。ただし、スギ属やヒノキ科の増加から、降水量は増えたと考えられる。これは草地の乾湿とも一致している。

4-3 発掘地東部

(1) 分帯

木本花粉の総数が20個未満と少ないため、出現率の変化を細かく解析することはできない。産出しているかどうか、非常に高率であるかそうでないかの変化でみれば、下位よりKEI帯(EP-1~28)、KEII帯(EP-30~36)に分帯される。各花粉帯の花粉化石群集の特徴は次の通りである。

KEI帯(EP-1~28)

胞子が多く、木本花粉と草本花粉は産出が少ない。木本花粉ではアカガシ亜属が多く、コナラ亜属やハシバミ属、クリ属、シイ属-マテバシイ属、スギ属、ヒノキ科、コウヤマキ属、マツ属などが伴われる。

KEII帯(EP-30~36)

草本花粉が多く、木本花粉と胞子は産出が少ない。木本花粉では二葉マツ類を中心としたマツ属が産出する。草本花粉ではアブラナ科が非常に多く、ワタ属が伴って産出する。

(2) 古植生・古気候

各帯ごとに古植生と古気候を考える。

KEI帯の時代

遺跡周辺の植生はアカガシ亜属が優占しクリ属やシイ属-マテバシイ属などが混じる常緑広葉樹で、気候は、植生帯区分による暖温帯に属し、現在の大阪平野と同じくらいの暖かさであったと思われる。

KEII帯の時代

遺跡周辺の植生はアカガシ亜属の優占する常緑広葉林から、二葉マツ類と考えられるマツ属の優占する林に移り変わっていったと考えられる。また、この帯の時代には草本花粉、特にアブラナ科が高率であることから、試料採取地近傍は畑でアブラナを栽培していたと考えられる。さらに、この帯でのみワタ属が産出することから、この帯の地層が堆積した時代、遺跡の近くではワタも栽培されていたと考えられる。

4-4 発掘地中部、人の化石が多数見られた場所

(1) 分帯

発掘地中部、人の足跡化石が多くみられた場所で試料を採取した地層は、花粉化石群集に基づく花粉帯としてはKF I帯のひとつの帯でまとめられる。この帯の花粉化石群集の特徴は、アカガシ亜属が非常に高率で広葉樹としてはコナラ亜属、クリ属、シイ属-マテバシイ属など、針葉樹としてはスギ属、ヒノキ科、二葉マツ類を主としたマツ属、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属などが伴って産出していることである。さらにこの帯は、下位よりa亜帯(FP-1~9)、b亜帯(FP-11~33)に細分される。a亜帯とb亜帯を比べると、b亜帯でコナラ亜属がわずかに増加している。草本花粉をみると、亜帯の境界に出現率の変化がまたがっているが、a亜帯ではイネ科やヨモギ属が高率で、b亜帯ではそれらが低率となり、草本花粉全体も低率となる。その中でガマ属やヒシ属、ヒツジクサ属が低率ながら連続している。

(2) 古植生・古気候

K F I 帯の時代、遺跡周辺の植生はアカガシ亜属が優占しクリ属やシイ属-マテバシイ属、コナラ亜属などが混じる常緑広葉樹林で、後背地である生駒山地あるいは金剛山地の高標にはモミ属やツガ属、コウヤマキ属、スギ属、ヒノキ科などからなる中間温帯林があったと考えられる。またスギ属については、扇状地性の場所で常緑広葉樹林に混じていた可能性も考えられる。K F I 帯の中でみられる花粉化石群集の変化としては、b 亜帯でのコナラ亜属の増加とそれに伴うマツ属、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属のわずかな減少がある。b 亜帯になって木本花粉総数の割合が高くなっていることから、これらの変化は、気候の変化による植生の変化ではなく、土地が安定することによって遺跡周辺の植生がより強く反映されたものと考えられる。試料採集地近傍では、a 亜帯の時代、イネ科とヨモギ属を中心に草本花粉が高率であることから、イネ科やヨモギ属が優占しかヤツリグサ科などが混じるやや乾燥した草地があったと考えられる。a 亜帯時代の後半から b 亜帯の時代にかけて、ガマ属がやや高率に産出し、ヒシ属やヒツジグサ属が伴われる。イネ科は減少しヨモギ属は低率となる。イネ科やヤツリグサ科そしてガマ属などからなる湿地性の草地で、滞水域があったと思われる。

(3) 稲作について

試料を採取した地域では、F P -18-25の層準で一定方向に向かう人の足跡が多数検出され、この場所で稲作が行われていたのではないかと考えられた。花粉分析の結果では、イネ科の花粉が多く水田雑草であるオモダカ属やゴキズル属、サジオモダカ属を伴ってイネ属型の花粉も産出している。しかし、その出現率は決して高くなく、試料を採集した場所で稲作が行われていたというよりも、その周辺で行われていた可能性があると思われる。

4-5 比較

(1) 発掘地の西部と中部と東部の比較

出土した遺物に基づいた地層の堆積年代によって、試料採取した地層を並べると図-15のようになる。弥生後期に堆積した発掘地中部の地層の上に、庄内式期から近世にかけて堆積した発掘地西部の地層が重なる。

発掘地中部で人の足跡化石が多数みられた場所の地層は弥生後期に堆積し、花粉化石群集にもとづくと、足跡化石が多数みられた場所のK F I 帯 a 亜帯が発掘地中部のK C I 帯 a 亜帯に、K F I 帯 b 亜帯がK C I 帯 b 亜帯に対比される。これら人の足跡化石がみられた場所とそうでない場所における古植生を比較すると、両地域とも a 亜帯の時代は、イネ科やヨモギ属が優占しかヤツリグサ科などが混じるやや乾燥した草地だったと考えられた。人の足跡化石が多数みられた場所では、a 亜帯の終わり頃から b 亜帯の時代にかけて、ガマ属が増えて湿地性の草地になりヒシ属やヒツジグサ属などがみられる滞水域も存在したと考えられた。これに対して人の足跡化石が見られなかった場所では、b 亜帯になっても少しの間やや乾燥した草地が続き、その後、ガマ属が増えて湿地性の草地になったと考えられた。これらのことと、人の足跡化石がみられなかった場所ではヒシ属やヒツジグサ属などはほとんど産出しなかったことから、人の足跡化石が多数みられた場所は、人の足跡化石がみられなかった場所よりも湿っていて、常時あるいはしばしば水に浸かるような環境であったと考えられる。

発掘地東部の地層は弥生後期から近世にかけて堆積し、花粉化石群集に基づくと、発掘地東部のKEI帯は発掘地中部のKCI帯～西部のKWI帯・KWII帯の全てあるいは一部に対比され、KEII帯がKWIII帯に対比される。発掘地の東部と西部では、対比されたKEII帯とKWIII帯の時代、稲作が行われたアブラナやワタが栽培されていたと考えられ、この環境は発掘地全域で同じであったと思われる。

(2) 他の遺跡との比較

今回発掘が行われたJR大和路線「久宝寺」駅南側、貨物列車の駅および線路跡地の周辺には、近畿自動車道大和～吹田線建設に伴って発掘された瓜生堂遺跡、若江北遺跡、巨摩庵寺遺跡、友井東遺跡、久宝寺遺跡、亀井北遺跡、亀井遺跡、長原遺跡や中田遺跡、加美遺跡、八尾南遺跡、瓜破遺跡など多くの遺跡が点在している。これらのうち、今回発掘地とほぼ同じ時代に堆積した地層があり、花粉分析を行っている主な遺跡の分布結果と今回の分析結果を比較する。

瓜生堂遺跡では、安田(1980, 1981, 1982など)の花粉分析結果がある。瓜生堂遺跡のD地区、E地区、F地区、H地区、I地区、J地区において、弥生時代後期から庄内式期、古墳時代では、遺跡の周辺にカシヤシの照葉樹林が存在したと考えられている。これは、今回の分析結果と同じである。庄内式期の瓜生堂遺跡では、D地区、F地区、H地区、I地区、J地区の分析結果に見られるようにイネ属型花粉が急増し稲作が盛んになるとともに一時期にカシ林が破壊されたと考えられている(安田, 1981)。今回の分析でも、庄内式期に堆積した地層であるKWII帯で同じことが考えられた。

亀井遺跡では、那須・坂本(1980)の花粉分析結果がある。亀井遺跡では、含貝海成層の直下から始まって弥生時代の遺物包含層、古墳時代前期～中期の地層およびそれ以降の地層までを分析し、遺跡周辺の基本的な森林植生はカシ林を主とする暖温帯照葉樹林であったとしている。これは今回分析結果と同じである。那須・坂本(1980)で試料番号32から上位においてスギ属やヒノキ科、コウヤマキ属、モミ属、ツガ属、などが増加する特徴は、今回の分析のKCI帯b亜帯からKWI帯、KWII帯でみられるものと同じである。また、亀井遺跡周辺の森林植生が少なくとも古墳時代まであまり極端な破壊をうけなかつたと考えられている(那須・坂本1980)ことも、今回の分析では近世であるKWIII帯になるまでは二葉マツ類を主としたマツ属の異常な増加がなく、アカガシ亜属が優占していることから考えられることと同じである。

亀井北遺跡では、バリノ・サーヴェイ(株)(1987a, b)の花粉分析結果がある。この遺跡では主に弥生時代後期から古墳時代の地層が分析され、カシ類を中心とした照葉樹林が広く分布したと推定されている。これは今回の分析結果と同じである。亀井北遺跡でマツ属複雑管束亜属(二葉マツ類)が急増し、アカガシ亜属が激減する中世～現在のKMV帯は、今回の分析のKWIII帯やKEII帯と同じである。

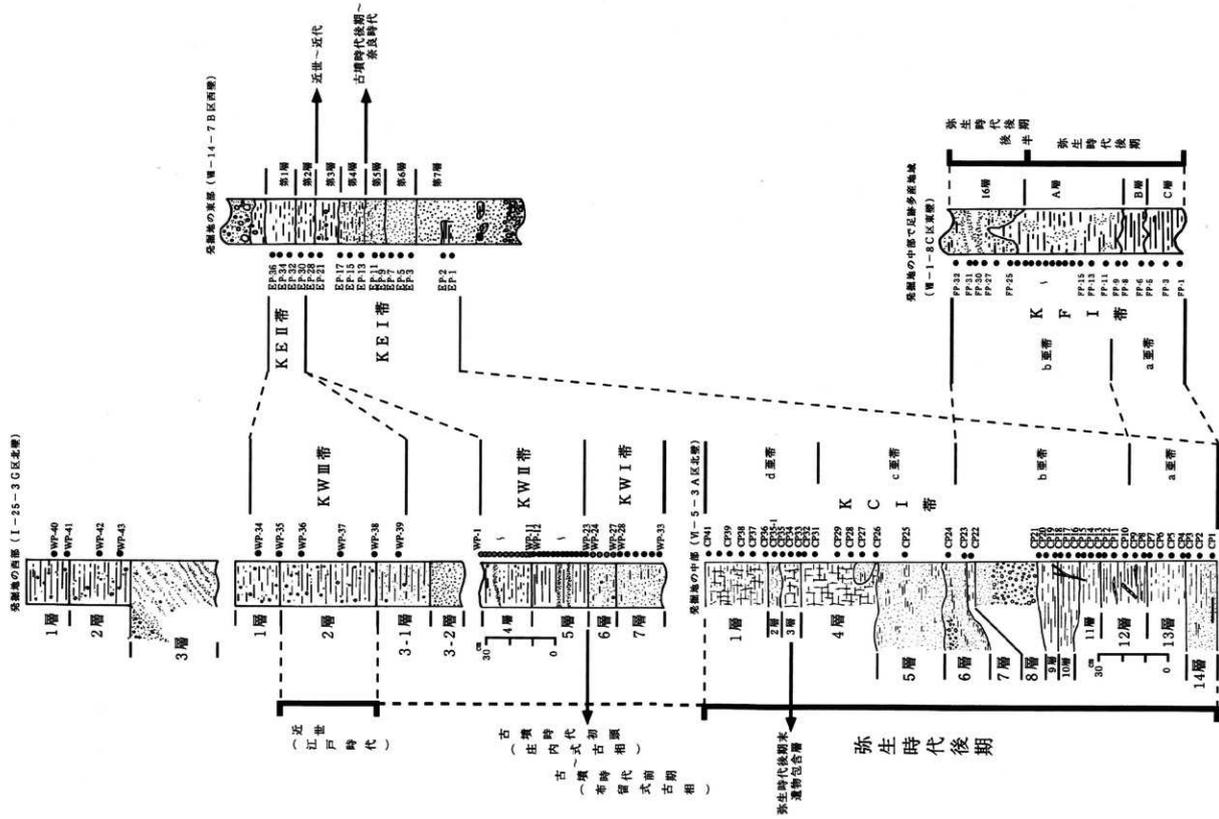


図-14 花粉化石群集にもとづく発掘地の西部と中部と東部の対比

5. まとめ

今回の花粉分析では、以下のことが明らかになった。

(1) 試料を採取した地層は花粉化石にもとづき、発掘地の西部(I-25-3 G区北壁)ではKW I帯とKW II帯とKW III帯とKW IV帯に、発掘地の中部(IV-5-3 A区北壁)ではKC I帯のa亜帯とb亜帯とc亜帯に、発掘地の東部(VI-14-7 B区西壁)ではKE I帯とKE II帯に、発掘地の中部で足跡多産の地域(VII-1-8 C区東壁)では、KF I帯のa亜帯とb亜帯に分帯される。

(2) 花粉化石群集にもとづき、KW II帯とKE I帯、KW III帯とKE II帯、KC I帯a亜帯とKF I帯a亜帯、KC I帯b亜帯とKF I帯b亜帯が対比される。

(3) KC I帯およびKW I帯、KW II帯の地層が堆積した時代の遺跡周辺には、アカガシ亜属が優占する暖温帯の常緑広葉樹があり、現在の大阪平野と同じぐらいの暖かさであったと考えられる。

(4) KC I帯の中で、b亜帯とd亜帯の地層が堆積した時代には、a亜帯の時代よりも降水量が多かったと考えられる。

(5) KW II帯の地層が堆積した時代の遺跡周辺には、マツ属が優占した林があったと考えられる。出土した遺物に基づく時代観から、KW II帯の時代には自然への人による影響があり、前述のマツ属が優占した林は、アカガシ亜属が優占する暖温帯の常緑広葉林を伐採した後のアカマツ二次林であると思われる。

(6) 試料を採取した場所の周辺では、KC I帯a亜帯の地層が堆積した時代にはヨモギ属などがみられる乾燥した草地があり、KC I帯b亜帯の時代にはガマ属などがみられる湿地の草地になり、KC I帯c亜帯の時代には再び乾燥した状況になっていったと考えられる。また、KW I帯およびKW II帯の地層が堆積した時代には、ガマ属などがみられる湿地の草地があったと考えられる。

(7) KC I帯の地層が堆積した時代、試料を採取した場所の周辺では稲作が行われていたと考えられる。KW I帯およびKW II帯の時代にもひきつづき稲作が行われ、周囲のアカガシ亜属が優占する暖温帯の常緑広葉樹林を多少切り開いたと考えられる。

(8) KW III帯の地層が堆積した時代、試料を採取した場所の周辺では畑作が行われ、アブラナを中心にワタヤソバなども栽培されていたと考えられる。

6. 文献

- 那須孝徳・坂本清子 1980：花粉分析。亀井・城山 寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書—本文編—, P423-431。大阪文化財センター
- 安田喜憲 1980：瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析Ⅱ。瓜生堂 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書, P427-436。大阪文化財センター
- 安田喜憲 1981：瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析(Ⅲ)。瓜生堂 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書, P347-371。大阪文化財センター
- 安田喜憲 1982：瓜生堂・巨摩庵寺遺跡の泥土の花粉分析。巨摩・瓜生堂 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書, P321-360。大阪文化財センター

- 安田喜憲 1983：若江北遺跡Aトレンチ北壁の花粉分析。若江北 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，P75-78，大阪文化財センター
- バリノ・サーヴェイ(株)1987a：亀井北遺跡(その1)花粉・珪藻分析報告。亀井北 近畿自動車天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書その1～3 一本文編一，P230-247，大阪文化財センター。
- バリノ・サーヴェイ(株)1987b：亀井北遺跡(その3)花粉・珪藻分析報告。亀井北 近畿自動車天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書その1～3 一本文編一，P付1-付17，大阪文化財センター。